

内堀遺跡群 VIII



E区A地点の旧石器調査のようす

1996.3

前橋市教育委員会



B区H-5号住居址の竈



B区X-1号地割れ

はじめに

関東平野の最奥部に位置する前橋市は、人口28万余人を有する群馬県の県都です。市では、福祉・教育・文化・環境等の整備、拡充を推進し、教育文化・商工業の調和のある「豊かで素晴らしい社会を築くまちづくり」を進めています。

その事業の一つとして、大室公園の造成があります。大室公園は、本市の東部、赤城南麓の中央に広がる豊かな自然、素晴らしい景観、さらに貴重な史跡を活かした公園で、すでに一部については利用を開始し、訪れる市民の憩いの場となっています。

現在、この公園整備にあたり史跡の保存と活用面から大室古墳群（前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳と小二子古墳）の調査と内堀遺跡群の調査を実施しています。

第9年次を迎えた内堀遺跡群の調査は、大室公園整備工事により消滅しようとする遺跡を継続して調査しているもので、これまで多くの貴重な資料を得ています。本年度は、民家園造成地より、たくさん旧石器を検出し、前橋の歴史を一気に28,000年前まで溯らせ、文化交流の一端を解明することができました。

この旧石器時代の石器については、本年度、市民文化会館で実施した前橋市文化財展でも展示し、たいへん好評を博したのも印象的な出来事がありました。進む大室公園造成の中で大室古墳群および内堀遺跡群の調査成果が大室地区、ひいては本市の歴史解明に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、多くなるご協力をいただきました関係機関、各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成8年3月31日

前橋市教育委員会

教育長　岡　本　信　正

例　　言

- 1 本報告書は、前橋市が整備する大室公園に係る内堀遺跡群内堀遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は、群馬県前橋市西大室町2510番地ほかに所在する。
- 3 調査は、前橋市教育委員会が実施した。調査担当および調査期間は以下のとおりである。

調査・整理担当者 前原 带・新井真典（文化財保護課埋蔵文化財係）

発掘調査期間／A区（民家園予定地） 発掘調査面積3,000m²

平成7年4月25日～7月20日

平成7年9月1日～10月30日

／B区（幹線ケーブル埋設地） 発掘調査面積400m²

平成7年10月23日～10月27日

整理・報告書作成期間 平成7年12月1日～平成8年2月29日

- 4 本書の原稿執筆・編集は前原・新井が行った。
- 5 整理作業をはじめ報告書の作成には、伊藤孝子・佐藤佳子・高畠八栄子・竹内るり子・角田正次郎・内藤貴美子・峰岸あや子・吉田真理子の協力があった。
- 6 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫に保管されている。

凡　　例

- 1 挿図中に使用した北は、座標北である。
- 2 揿図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図（長野・宇都宮）と1/5万地形図（前橋）を使用した。
- 3 本遺跡の略称は、7E11である。
- 4 各遺構・住居址の施設名の略称は次のとおりである。
J…縄文時代の住居址、JT…縄文時代整穴状遺構、JD…縄文時代土坑、
H…古墳時代の住居址、D…土坑、X…地割れ、O…落ち込み
- 5 遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。
遺構 住居址・土坑・溝…1/60、全体図 1/500
遺物 土器・石器…1/3、一部の土器・石器…2/3、1/2
- 6 スクリーントーンの使用は次のとおりである。
遺構平面図 燃土…淡点、炭化物…粗い斑、粘土…細かい斑
遺構断面図 火山降下物…濃点、焼上…淡点、粘土…細かい斑、構築面…斜線
遺物実測図 石器使用痕…網

目 次

はじめに

I 調査に至る経緯.....	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地.....	2
2 歴史的環境.....	3
III 調査の経過	
1 調査方針.....	4
2 調査経過.....	5
IV 層序.....	7
V A区の調査（民家園予定地）.....	9
1 旧石器時代.....	9
2 繩文時代.....	10
3 その他.....	15
VI B区の調査（幹線ケーブル埋設地）.....	16
1 古墳時代.....	16
2 その他.....	19
VII 成果と問題点.....	20
1 A区の調査.....	20
2 B区の調査.....	21

卷首図版

1 B区II 5号住居址の発掘調査

2 B区X 1号地割れ

付 表

付	表	頁	頁	
Tab.	1 報告書抄録	24	5 繩文土器観察表	27
	2 A区包含層縄文土器一覧表	25	6 石器観察表	30
	3 A区縄文石器集計表	26	7 古墳時代遺物観察表	33
	4 A区遺構別縄文石器一覧表	26	8 内堀遺跡群の発掘調査一覧	37

挿 図

挿	図	頁	頁	
Fig.	1 内堀遺跡群の位置	35	Fig. 20 B区H-4・6号住居址	53
	2 内堀遺跡群位置図	36	21 B区H-5号住居址	54
	3 内堀遺跡群の遺跡一覧図	37	22 B区H-5・7号住居址	55
	4 内堀遺跡群周辺図(1)	38	23 B区II 8・X 1号地割れ	56
	5 内堀遺跡群周辺図(2)	39	24 A区縄文時代の土器(1)	57
	6 平成7年度調査終済図	40	25 A区縄文時代の土器(2)	58
	7 内堀遺跡群標準土層図	40	26 A区縄文時代の土器(3)	59
	8 平成7年度調査区設定図	41	27 A区縄文時代の石器(1)	60
	9 A区旧石器試掘トレンチ図	42	28 A区縄文時代の石器(2)	61
	10 A区縄文時代遺構全体図	43	29 A区縄文時代の石器(3)	62
	11 A区包含層遺物分布図(1)	44	30 A区縄文時代の石器(4)	63
	12 A区包含層遺物分布図(2)	45	31 A区縄文時代の石器(5)	64
	13 A区包含層遺物分布図(3)	46	32 A区縄文時代の石器(6)	65
	14 B区遺構全体図	47	33 A区縄文時代の石器(7)	66
	15 A区旧石器文化層の推定範囲	48	34 B区古墳時代の土器(1)	67
	16 A区J 1~3号住居址	49	35 B区古墳時代の土器(2)	68
	17 A区J-4、J T-1・2・縄文土坑	50	36 B区古墳時代の土器(3)	69
	18 A区縄文土坑・土坑・地割れ	51	37 B区古墳時代の遺物(4)	70
	19 B区H-1~3号住居址	52		

写真図版

PL.	1 A区縄文時代の調査	PL.	9 A区縄文時代の土器
2	A区縄文時代の遺構	10	A区縄文時代の土器
3	A区縄文時代の遺構・包含層	11	A区縄文時代の石器
4	A区縄文時代包含層の調査	12	A区縄文時代の石器
5	B区古墳時代の住居址	13	A区縄文時代の石器
6	B区古墳時代の住居址	14	A区縄文時代の石器
7	B区古墳時代の住居址	15	B区古墳時代の土器
8	B区古墳時代の住居址・地割れ	16	B区古墳時代の土器

I 調査に至る経緯

本調査は、前橋市の大室公園整備事業に先立って行われたものである。この調査は昭和62年度に始まり今年度で9年目になる。そもそもの出発は、公園建設予定地の埋蔵文化財を調査し公園設計の基礎資料にすることが目的であったが、ほぼ公園の実施設計が出来上がってからは記録保存を主体にした調査となっている。

第1年次（昭和62年度）公園予定地約369,000m²のうち国指定史跡である前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳・小二子古墳や山林、沼などを除く約200,000m²について東西に10m間隔でトレーンチを入れる方法で確認調査を行い、予定地全域についての埋蔵文化財の分布状況を把握した。また、5世紀末葉から6世紀初頭の豪族居館跡である桜木遺跡についても範囲確認調査を実施した。その結果、前二子古墳の方向である西側に張り出しを持ち、2間×3間の柱穴列で構成された門と思われる施設が発見された。『内堀遺跡群（1988）』に所収。

第2年次（昭和63年度）駐車場予定地の北西部約10,000m²についての発掘調査を実施した。その結果、多数の形象埴輪を出土した6世紀後半の前方後円墳である内堀1号墳（M-1）と古墳時代前期を中心とした住居址19軒や、弘仁9（818）年の大地震によって形成された地割れを検出された。『内堀遺跡群II（1989）』に所収。

第3年次（平成元年度）昭和63年度調査区の西側を中心に約12,600m²について発掘調査を実施した。この調査では、円墳である内堀5号墳（M-5）のほかに石櫛墓1基、古墳時代前期を中心とした住居址が16軒が検出された。『内堀遺跡群III（1990）』に所収。

第4年次（平成2年度）昭和63年度と平成元年度の調査区を取り囲む範囲の発掘調査と確認調査を実施した。発掘調査の面積は約9,000m²で確認調査の面積は約2,500m²で合計11,500m²である。調査によって古墳時代前期を中心とした住居址37軒や弘仁9（818）年の大地震による地割れや液状化現象を検出した。『内堀遺跡群IV（1991）』に所収。

第5年次（平成3年度）平成元年度第1調査区の南および西側に隣接したL字形の区域約4,000m²について、後二子古墳・小二子古墳範囲確認調査とともに発掘調査を実施した『後二子古墳・小二子古墳（1992）』。この調査では、古墳時代前期の前方後方形周溝墓1基と円形周溝墓1基や炭窯を検出した。『内堀遺跡群V（1993）』に所収。

第6年次（平成4年度）公園予定地の北西部にある自然丘陵の東側と西側の部分約9,400m²について、前二子古墳の範囲確認調査と並行して発掘調査を実施した『前二子古墳（1993）』。この調査では、堅穴式石室を持つ内堀2号墳（M-2）や石櫛墓、内堀6号墳（M-6）の範囲確認調査や一部試掘調査を行った。『内堀遺跡群V（1993）』に所収。

第7年次（平成5年度）五料沼の北側の部分3,130m²について、2カ年計画の2年次の中二子古墳範囲確認調査の前に発掘調査を実施した。調査によって住居址44軒が調査され、内訳は、古墳時代

前期の住居址が35軒、古墳時代後期の住居址が7軒、平安時代の住居址が2軒であった。『内堀遺跡群VI（1994）』に所収。

第8年次（平成6年度）前年度の調査区（A区）の水路をはさんだ東側の部分1,200m²について、2カ年計画の2年次の中二子古墳範囲確認調査と一部並行して発掘調査を実施した『中二子古墳（1995）』。調査によって縄文時代前期の住居址1軒、古墳時代前期の住居址5、中期の住居址2、後期の住居址3軒が検出された。『内堀遺跡群Ⅶ（1995）』に所収。

第9年次（平成7年度）前橋市指定文化財の「開根家住宅（赤城型民家）」移築予定地（A区）とその周囲道路部分と後二子古墳の西側に設置されるケーブル埋設予定地の3,400m²（B区）についてと2カ年計画の1年次の小二子古墳範囲確認調査と併行しながら調査を実施した。調査によってA区からは縄文時代の竪穴住居址4軒をはじめ旧石器時代の石器群などを調査でき、B区からは古墳時代前期の住居址6軒、後期の住居址2軒を調査できた。本報告書である『内堀遺跡群Ⅷ（1996）』に所収。

なお、初年度以前の経緯については『内堀遺跡群I（1988）』に詳しく述べられているので本書では省略する。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

内堀遺跡群が所在する前橋市西大室町は、前橋市の中心市街地から東へ約15kmの所にある。遺跡は国道50号線東大室十字路より北へ2kmで、県道前橋・今井線と県道伊勢崎・深津線の交差点から北東1kmに位置している。またJR両毛線伊勢崎駅から遺跡へは北約7kmにあり、上毛電鉄柏川駅からは南南西に約3kmである。東側は多田山と呼ばれる火山沈流による丘陵地形があり、赤堀町との境となっている。また、北に接する柏川村とは、七ツ石とよばれる信仰の対象となっている巨石のある丘陵とそれに連なる丘陵地形を行政上の境界としている。

平成7年度の調査区は後二子古墳の南西、中二子古墳の北西にあり、大室公園造成区域である内堀遺跡群の中では西に位置し、標高129m～133mである。

本遺跡群の東端には五料山とよばれる自然丘陵があり、また、後二子古墳の南側、さらには前二子古墳が造られた所も丘陵地形となっている。この地区の丘陵地形の基盤は、すべて粗粒安山岩よりなる火山沈流によって形成されており、それらが露出しているのが、七ツ石や石山觀音、産泰神社裏の円石などである。また、平成3年度調査区内から小さな谷地が人り、かつては湧水による小河川があったものと推定される。現在五料山の西側には小河川が流れているが、近世頃にこの谷地

の南側に堤を造り、堰止めてできたものが五料沼である。本遺跡のある丘陵の北側には現在水田地帯が広がっているが、下縄引I遺跡や柏川村五反田遺跡の存在からこの地域を当時の生産基盤と考えることが難しいため、上記の谷地を含めた南側に生産基盤を求める。

2 歴史的環境

内堀遺跡群のある城南地区は四季の恵みに抱かれた風光明媚な所であるとともに、大室二二子古墳を始めとした周知の遺跡が存在する考古学上にも重要な地域である。そこで、本遺跡群を理解するために周辺の歴史的環境を見てみたい。

旧石器時代 まず、今年度の調査中心のひとつである旧石器時代の周辺遺跡として、荒砥川流域の洪積台地先端部を中心に尖頭器がまとまって出土したNo.4の荒砥北二木堂遺跡、AT下の国内最大の「環状ロック群」が検出されたNo.26の下触牛伏遺跡、また、神沢川の東部にあたるNo.27の横岳遺跡群では「流れ山」の頂上部から、さらには、宮川の沖積地に臨むNo.3の柳久保遺跡群柳久保遺跡や頭無遺跡において台形様石器、ナイフ形石器、細石刃等の旧石器文化の遺物が出土している。

縄文時代 続く縄文時代には、草創期の遺跡として爪形文土器が検出されたNo.26の下触牛伏遺跡がある。No.25の二本松遺跡や柳久保遺跡群からは、田戸下層、上層期の土器が出土している。前期の遺跡は、No.24の荒紙二之塙遺跡、No.6の荒砥上ノ坊遺跡、No.19の荒砥上諏訪遺跡など検出例は多い。中期後半の遺跡も多く確認されているが、いずれも5~10軒の中・小規模の集落にとどまっている。赤城村三原田遺跡、赤堀町曲沢遺跡のような大規模遺跡の存在は知られていない。

弥生時代 弥生時代の遺跡は水田耕作に適した沖積地を臨む台地や微高地に立地しており、中期後半から後期の小規模集落がNo.5の荒砥島原遺跡、No.20の荒砥上川久保遺跡、No.16の西原遺跡、No.17の西迎遺跡などで見られる。

古墳時代前期 古墳時代前期は、本遺跡の北西に隣接するNo.18の上縄引遺跡をはじめ、No.13の北山遺跡、No.14の七ツ石遺跡、No.22の久保皆戸遺跡、No.21の梅木遺跡などがある。この時期の遺跡は、住居山上の上器を見る限り複雑な様相を呈しており、弥生時代後期の樽式・赤井戸式土器はこの時期まで残存し、上師器と共に伴する。そのうち、浅間C軸石降下後およびFA降下前の各遺跡の住居は、内堀遺跡群下縄引II遺跡の集落に対応するものであると考えられる。また、下縄引II遺跡の集落の墓域として上縄引遺跡の周溝墓群を考えている。

古墳時代中~後期 5世紀後半から6世紀代に入ると、No.23の赤堀茶臼山古墳をはじめ強大な支配者の存在を暗示する大室二二子古墳が築造され、この地区が当時の中心的様相を呈するようになる。梅木遺跡で検出された首長層の居宅は大室二二子古墳のうち、前二子古墳と何らかの関係があると推定される。このほかに居館址として、No.7の荒砥荒子遺跡、No.1の丸山遺跡などがある。また、荒砥荒子遺跡の豪族居宅遺構と関連し、No.8の舞台遺跡1号古墳および9号の西大室丸山遺跡があり、豪族の勢力格差により居宅・古墳の規模、祭祀行為に相違があったことが窺える。6世紀

後半から7世紀代に入ると小円墳の群集化が進み、1～3基程度の散在する小円墳も出現するようになり、文配階層の多層化と系列化が進んだことを意味している。柏川村深津のNo.15の三ヶ尻西遺跡では、7世紀後半の製鉄遺構3基と住居跡が確認された。古墳群が密集した地域であることから、有力な豪族が招いた技術者の集落址で製鉄品造りの拠点になっていたと推定される。また、西大室では赤城南麓の占墳時代終末期を代表する截石切組積石室をもつNo.10の荒砥富士川古墳が築造され、高度な石材加工技術を習得していたことが窺える。

奈良・平安時代 居住域が台地全体に広がり、水田開発が進み、No.2の荒砥諏訪西遺跡では微高地まで水田化している、一方、No.28の上増田中原遺跡群には9世紀前半の大規模な条里制水田が検出された。また、12世紀の中頃、開削されたとされる女堀の遺構も残存している。さらに、奈良～平安時代の炭窯址が横浜遺跡群や柏川村の西原古墳群、大胡町の上人屋・越地区遺跡群等の近隣市町村から検出されており、当時赤城南麓の近隣で盛んに木炭生産が行われていたことがうかがえる。

中世以降 城郭としては、No.11の大室城、No.12の元大室城、今井城、赤石城などがあり、荒砥北三木堂遺跡などでは多数の墓坑が調査されている。また、井戸や溝など近世の遺構も、多くの遺跡で確認されている。

III 調査の経過

1 調査方針

1) 内堀遺跡群の調査区設定

調査の実施にあたっては、国家座標に基づいた基線で調査区を設定した。平成2年度の調査から、本遺跡群全域にわたる4m×4mグリッドを設定した。調査グリッドの北西隅を基点とし、図面の北を上にした場合、右から左、すなわち西から東に0～X250グリッドを設定した。上から下、すなわち北から南へは、Y0～Y200Gを設定した。

ちなみに南北ラインである

X0ライン	-57,300m	Y0ライン	+43,400m
X100ライン	-56,900m	Y100ライン	+43,000m
X200ライン	-56,500m	Y200ライン	+42,600mとなる。

2) A区の調査（民家園予定地）

民家園敷地は、ほぼ正方形であるが、北に対して45°に近い傾斜を持つため、菱形となり、4m方眼を掛けた場合、非効率的な面が予想された。しかし、区域が四角形であるため、図面編纂等を

考慮して全体グリッドを採用した。

調査の対象は、民家園と民家園を取り囲む北・東・南の道路部分を合わせた面積3,000m²の区域である。グリッドの設定にあたっては、公園内の既設多角点T.22およびT.21を基準として杭打ちを行った。ベンチマークの設置は、同じく公園内の既設多角点T.22を基準として、132.0mの水準杭を設置した。

ちなみに調査区内の

Y125-X30グリッドは、第IX系 +42,900.0m • -57,180.0m

北緯36° 23' 05" .9850 東経139° 11' 45" .2596 にある。

調査は、時間的制約があるため、掘削用重機を用いて表上の除去を行うことにした。並行してグリッド設定、ベンチマーク（水準点）の設置を行った。その後、平板測量で遺構の配置図を作成し、各遺構の調査工程を検討した。具体的には

- ①遺構の掘り下げ セクションベルトを設けて上層観察を行いながら進める。
- ②遺物の取り上げ 10cm四方以上のものは縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドットで表記した平面図を作成する。取り上げに際しては、遺物台帳に諸属性を記録する。
- ③炉と竈の図化 原則として縮尺1/10にて図化する。
- ④遺構平面図 原則として縮尺1/20にて実施する。

以上の方針の下に調査を進めた。

3) B区の調査（幹線ケーブル埋設地）

調査区の設定にあたっては、国家座標に対して斜めであるため、内堀遺跡群全体グリッドとは別に、北東の中心と南西の中心を結んで4m四方のグリッドを設定した。

西から東にアルファベット大文字を用いてA～Hライン、北から南へ0～40ラインを設定した。杭打ちは遺構図化の必要範囲に適宜行った。調査面積400m²である。

方眼杭打ち測量は、方眼杭の打設後、座標の位置付けを行った。その際に使用した点は、後二子古墳に設定してある埋設コンクリート杭のタ-30G、タ-39Gである。ベンチマークの設置にあたっては、タ-39Gを基準として130.5mの水準杭を設置した。

ちなみに、 F-6グリッド X-43,049.423m • Y=-56,918.810m,

F-35グリッド X-42,945.325m • Y=-56,969.991m

であり、グリッドの北に対する振れはN-26° 10' 54" Eである。

2 調査経過

1) A区の調査（民家園予定地）

岩葉萌え出4月27日、平成7年度内堀遺跡群の調査が始まった。7日間の0.4m³のバックフォーによる表上掘削の後、直ちにジョレン掛けを実施したところ、調査範囲の全域から縄文土器と石器

の出土がみられたことから縄文時代包含層の存在が明らかになった。また、平成5年度に実施した試掘調査で縄文時代の遺構が確認されていることや、本調査区が南へと見晴らしのよい台地であることから、旧石器時代文化層の存在も予想されたため、縄文包含層と縄文遺構、旧石器文化層の3面調査が必要となった。

したがって、調査は、①縄文時代包含層の掘り下げ、②縄文時代の遺構検出、③旧石器時代文化層の調査といった3工程が必要と考えられた。

① 縄文時代包含層の掘り下げ 5月～6月中旬にかけて行った。ジョレンがけで出土した遺物について、4mグリッドごとに取上を行った。さらに、遺物の多いグリッドから順次、掘り下げを行いながら周辺グリッドへ拡大をしていった。最終的に掘り下げを行ったグリッドは44グリッドであるため、全体190グリッドの2割強の部分を調査したことになる。

出土遺物は縄文時代早期から後期の土器、石器があげられるが、縄文時代初頭の有舌尖頭器も出土した。

② 縄文時代の遺構検出 包含層はⅢ層であるソフトローム状の淡色黒ボク土中に存在するため、遺構の確認が困難を極める状況であった。したがって陥れ穴等の遺構はIV層であるハードローム層面でないとほとんど確認できないため、6月下旬に、バックフォーでⅢ層下面を除去した。調査は、7月初旬から中旬まで行い、住居址4軒・竪穴状遺構2基・土坑9基を検出した。J-1号住居址からは300点を超える遺物が出土した。

③ 旧石器時代文化層の調査 6月下旬に縄文時代の遺構を避けて10カ所に試掘トレンチを設定した。その結果、約2.2～2.5万年前のAT層の下位から石器が9点出土した。9点の石器は、黒曜石製の剥片7、黒色頁岩製の局部磨製石斧1と黒色頁岩製の斧形石器1であり、石斧2点は近接して出土した。

しかし、当初に積算した予算を50%も削減された調査であるため、旧石器時代文化層の試掘で石器を検出し、拡大して調査を実施する必要が生じたが、予算不足が生じた。そこで、

1案…調査を次年度に送り民家工事も1カ年先に延長する。

2案…何らかの方法で予算措置を講じ、調査を完了させ、予定通り工事を行う。

といった二者択一に迫られてきた。

なかなか、結論が出ないため、7～8月は別に計画していた国指定史跡である小二子古墳の発掘調査に精力を切り替え、解決を待つこととした。

8月も後半になると、小二子古墳の掘り下げが大方終了した。作業員の手も余ってきたが、なかなか結論はでない。そんな中の9月にやっと結論がでた。予算措置がなされ発掘調査が開始されることになり、9～10月の2カ月間の調査で135点の石器が出土した。

2) B区の調査（幹線ケーブル埋設地）

後二子古墳の東側から中二子古墳の西側までの延長約200mに幅0.65mで深さ1mの幹線ケーブル埋設のための掘削が実施され、公園緑地課から立ち会いの要請があった。立ち会い調査を実施した

ところ古墳時代前期と後期の住居址が7～8軒確認できた。その旨を公園緑地課に連絡するとともに、掘削の幅について確認をとった。その結果、さらに2～3mの幅で広げる必要があり、マンホール設置カ所は更に広範囲を掘削するとの連絡を受けた。工事も逼迫していることから、10月下旬の5日間で調査を完了することとし、予算的な措置については、文化財保護課と公園緑地課、財政課で協議を行い、後日予算流用の形となった。

調査は当初の約束期間である5日間で済ませた。その結果、住居址10軒、土坑1基、地割れ1条、縄文時代包含層が検出された。

こうして、土師器、縄文土器・石器、旧石器ありと種類に富んだ出土品を伴う平成7年度の内堀遺跡群の現場作業は、昨秋、10月31日、ラジコンヘリコプターによる空撮で終了となった。

3) 文化財展開催や整理場整備と報告書作成

11月16日から19日までの4日間にわたり前橋市民文化会館大展示ホールで展示会『大室古墳群の実像にせまる』が開催された。また、会期中の11月19日には、『大室古墳群の実像にせまる』と題した講演会とシンポジウムが開催された。この準備に追われるとともに、『赤城南麓の大豪族の栄華 大室古墳群パンフレット』(A4版カラー16頁)の編集刊行を行った。また緊急発掘調査現場への応援や旧東部共同調理場に新設される整理事務所の改修作業に追われる日々を送った。遺物整理作業は、平成7年12月1日から平成8年2月29日まで行い、本報告書の作成を行った。

IV 層序

X30-Y120グリッドの土層を基にして本遺跡の標高上層図を作成した。民家園子定地の調査区は、内堀遺跡群の南西部に存在し、幹線ケーブル埋設工事立ち会いの緊急調査は後二子古墳のすぐ東に隣接して存在する。

約20～30万年前に赤城山の山体崩壊によって、引き起こされた梨木泥流によって形成された「流れ山」を中心とした標高129～137mの丘陵性台地である。「流れ山」の頂上には梨木泥流によって運ばれた大形の礫が一部露出し、上層の堆積も薄く、ちなみにⅦ層のAT(姶良丹沢バミス)が表面から50～60cm程度で検出できる。

Ia層 黒褐色粗砂層 稲作土層。1,108年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B)を50%以上含む。粘性なく、縮まりあり。

Ib層 黒褐色土層 As-B、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C)、6世紀中葉初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳軽石Irr-PP(榛名二ツ岳軽石: 6世紀中葉降下)を含む粗砂層。粘性はないが、縮まりはある。

IIa層 As-B純層 天仁元(1108)年に浅間山より降下した軽石層。わずかに間層をはさんで上部にA

s-Kk（浅間柏川テフラ）が存在する場合もある。

IIb層 黒色細砂層 As-C, Hr-PP（径20mm）を15%含む細砂層。粘性を有し、縮まりあり。

IIc層 暗灰黄色細砂層 粘性は少しあるが、縮まりが弱い。

III層 黄褐色細砂層 淡色黒ボク上。粘性は少しあるが、縮まりが弱い。縄文時代遺物包含層。

IVa層 明黄褐色硬質ローム層 約1.3～1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP)を10%、約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石(As-Sr)、または1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石(As-OP1)を5%含む微砂層。粘性があり、硬く縮まる。

IVb層 明黄褐色土層 ハードローム層。As-YPを5%、As-SrまたはAs-OP1を10%程度含む微砂層。粘性があり、硬く縮まる。

V層 明黄褐色硬質ローム層 約1.8～2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP)をブロックで20～30%程度含む層。粘性があり、硬く縮まる。

VI層 明黄褐色硬質ローム層 As-BPGroupをブロックで15%程度含む層。粘性があり、縮まりが弱い。古環境研究所の分析によれば基底付近に約2.2～2.5万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(AT)の降灰層準があると考えられる。また、As-BPGroupの基底の室田軽石(MI)の存在も考えられる。

VII層 明黄褐色微砂層 風化土壤。粘性を有し縮まりは弱い。上部にAT（姶良丹沢バミス：約2.2～2.5万前）の含有が極大値を示す。

VIII層 明黄褐色粘土層 暗赤帶。粘性が強く、縮まりの弱い粘土層。

色調でa・bの2亜層に分類できる。b層の下部から灰色のチャートの岩片がブロックで検出された。古環境研究所に分析を依頼した所、約3.1～3.2万年前に赤城山から噴出した赤城鹿沼テフラ(Ag-K)の上部に相当する水沼ラブリ(CL)およびその上位の赤城小沼テフラ(Ag-KL)と一致する。噴火の規模や分布などから水沼ラブリ(CL)の可能性が大きいという分析結果を得た。

IX層 明黄褐色粘土層 粘性が強く、縮まりのある粘土層。a～dの4亜層に分類できる。

X層 明黄褐色軽石層 比較的風化しており、層相などから約4.1～4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石(Jir-IP)に同定される。3亜層に分類でき、Xa層は比較的大粒な軽石層、Xb層は火山灰層、Xc層は軽石層である。

XI層 褐色粘土層 水性堆積で非常に粘性が強い。

XII層 青灰色砂礫層 巨礫によって構成される。梨木泥流（約20～30万年前）によって形成されと考えられる「流れ」である。

V A区の調査（民家園予定地）

1 旧石器時代

旧石器時代についての調査は、来年の平成8年度に継続して実施するため、報告については来年度刊行の『内堀遺跡群IX』に平成7・8年度調査を合わせて掲載する予定である。ここでは平成7年度調査の概要の記述に留めておく。

1) 試掘調査

旧石器時代の文化層が検出された127m～130mの丘陵性台地は、北から南南西に緩やかに延びる地形である。地形が急激に落ち込むあたりから台地中央に向かい2×4mのトレーナーを10カ所ほど設定した。まず、縄文時代の調査によりソフトローム層の除去が終わり、ハードローム層のIV層面まで掘削が終わっていたので、人力によりAT層下面（V層）まで人力による掘り下げを行った。その結果、試掘坑No.6とNo.7からそれぞれ暗色帶上面（V層）から剥片が1点ずつ出土した。そのため更に試掘坑No.7をやや長めに拡張した。そこから斧形石器と局部磨製石斧がまとまって出土したため、さらに西侧に試掘坑No.12トレーナーを追加した。この試掘坑から遺物がまとまって出土したために調査を拡大した。

2) 調査

結果、A地点と呼んだ黒曜石を主体にする石器群をからは120点の石器が出土した。さらに東側の試掘坑No.6についても1点見つかることから拡張をしたところ15点の黒色頁岩と黒色安山岩で構成される石器群がみつかったためB地点と呼んだ。石器出土の層位は多少の幅を持つものの基本的にはAT下位の暗色帶上部に所属するものといえる。そのほかの層位からは文化層は検出されず單一文化層の遺物として把握される。

① A地点の石器群

調査の結果、A地点の石器は120点を数える。ナイフ形石器、台形様石器、削器、抉入石器、彫刻等形石器、楔形石器、斧形石器、局部磨製石斧、敲石、剥片、碎片、石核など構成される。礫群は確認されず、焼上・炭化物の分布も認められなかった。A地点の石器130点の石材内訳は、黒曜石が主体を占め、黒色頁岩や黒色安山岩、粗粒輝石安山岩、ホルンフェルス、結晶片岩、チャートが認められた。

石器の出土層位はV層（AT層）下部から検出された。一部VI層から出土したものもあるが、本来は暗色帶であるV层a層に所属するものである。石器の垂直分布は、高低差の大きい所で50cmほどあるが、平均した場合30cm前後の幅が認められた。ちなみにAT（姶良丹沢バニス）は約2.2～2.5万前という年代が算出されている。

② B地点の石器群

調査の結果からB地点の石器は15点を数える。器種でみるとナイフ形石器、斧形石器、台石、敲石、剥片で構成される。縁群は確認されず、焼土・炭化物の分布も認められなかった。

B地点の石器石材内訳は、黒色安山岩や黒色頁岩、粗粒輝石安山岩であり墨曜石の使用がなく、在地の石材で構成される特徴を有する。

石器の出土層位はA区と同様にVII層（A T層）下部から検出された。一部VI層から出土した石器もあるが、本来は暗色帯であるⅤa層に所属するものである。石器の垂直分布は、高低差の大きい所で50cmほどあるが、平均した場合30cm前後の幅が認められた。

2 縄文時代

縄文時代の遺構・遺物は調査区の南西に延びる台地の標高129m～133mにまとまって検出された。竪穴住居址4軒、竪穴状遺構2基、土坑9基、包含層によって構成されていた。住居址4軒は前期諸磯a式期のものであり、竪穴状遺構や土坑についても遺物が検出されなかつたが住居址とほぼ同じ時期と考えられた。

包含層からは縄文式上器2,061点、石器1,036点が検出された。土器は早期の撚糸文土器から後期後半の壺之内式まで断続的に認められた。しかし、量的には早期終末から前期前半にかけての土器が主体を占め、その他の時期の遺物は極めて少なかつた。

1) 住居址

J-1号住居址 (Fig. 23・42・45, P.L. 1・9・11)

(位置) X27・28、Y127・128G (確認面) 全体層序III層上面で確認された。(形状) 圓円正方形 (標高) 130.34m (面積) 16.77m² (方位) N-73° -W (床面) 東から西にやや傾きを持つ。床面は軟らかく地山のIV層との識別が困難であった。確認面からの深さ12.1cmを測る。(炉址) 楕円形の地床炉。規模は長径0.78m×短径0.48mである。底面は硬く赤化していた。長軸の縁辺に偏平な粗粒輝石安山岩の礫を2石用いている。(柱穴) 住穴は炉址の北側に長径0.78m×短径0.48mの1個が検出された。(遺物) 土器238点、石器が260点出土した。土器の内訳は沈線文2、縄文織維74、無文織維6、竹管文が97、その他無文54が出土している。石器の内訳は石錐6、石錐1、楔形石器1、削器4、打製石斧8、磨製石斧1、磨石・凹石4、調整痕のある剥片1、剥片・碎片227、結晶片岩片6である。このうち縄文土器1～20、石器21点を図示した。(備考) 出土遺物から所産時期は縄文時代前期前半の諸磯a式期と考えられる。

J-2号住居址 (Fig. 23・42・45, P.L. 1・9・11)

(位置) X27・28、Y127・128G (確認面) 全体層序III層上面で確認された。(形状) 長方形 (標高) 130.50m (面積) 9.47m² (方位) N-6° -E (床面) 北から南に傾きを持つ。確認面が浅く床面

の検出は困難であった。IV層面に構築されている。確認面からの深さは1cmと浅かった。(炉址) 横円形の地床炉。規模は長径64m×短径46mである。底面は硬く赤化していた。(遺物) 上器135点、石器が46点出土した。土器の内訳は条底文6、縄文織維53、無文織維6、竹管文が43、その他無文17が出土している。石器の内訳は石鏃2、削器2、打製石斧3、磨製石斧1、磨石・凹石3、剥片・碎片35である。このうち縄文上器11点、(21~31) 石器10点を図示した。(備考) 出土遺物から所産時期は縄文時代前期前半の諸磧a式期と考えられる。

J-3号住居址 (Fig. 23・42・47、P.L. 1・9・11)

(位置) X31・32、Y128・129G (確認面) 全体層序Ⅲ層上面で確認された。(形状) 長方形(標高) 130.26m (面積) 5.60m² (方位) N-41° - W (床面) 北から南に緩やかに傾斜を持つ。確認面が浅く北半分の床面を検出したに過ぎない。IV層面に構築されている。確認面からの深さは2.7cmを測る。(炉址) 円形の地床炉。規模は長径0.53m×短径0.47mである。底面は硬く赤化していた。(遺物) 上器17点、石器10点と出土は少なかつた。土器の内訳は縄文織維8、無文織維1、竹管文が4、その他無文4が出土している。石器の内訳は石鏃1、削器4、打製石斧1、剥片・碎片3である。このうち縄文上器2点、(32・33)、石器3点、石製品1点を図示した。(備考) 出土遺物から所産時期は縄文時代前期前半の諸磧a式期と考えられる。

J-4号住居址 (Fig. 23・42・45、P.L. 1・9・12)

(位置) X32・33、Y128・129G (確認面) 全体層序Ⅲ層上面で確認された。(形状) 正方形(標高) 130.91m (面積) 16.65m² (方位) N-29° - E (床面) 東から西にやや傾きを持つ。床面は軟らかく地山のIV層との識別が困難であった。確認面からの高さは4.25cmを測る。(炉址) 地床炉を2個検出。F1は長径0.80m×短径0.51m×深さ0.08mである。F2は長径0.25m×短径0.21mである。2個とも底面は硬く赤化していた。(柱穴) 柱穴は炉址の北側に長径0.31m×短径0.25mの1個検出された。(遺物) 土器15点、石器が10点出土した。土器の内訳は縄文織維10、無文織維1、その他4が出土している。石器の内訳は削器1、剥片・碎片9である。このうち縄文土器2点、石器1点を図示した。(備考) 出土遺物から所産時期は縄文時代前期前半の諸磧a式期と考えられる。

2) 壇穴状遺構

JT-1号壇穴状遺構 (Fig. 24・42・45、P.L. 2・9)

(位置) X23、Y121G (重複) JD-6と重複 (確認面) 全体層序Ⅲ層で確認された。(形状) 楕円正方形。長軸2.9m、短軸1.4m。JD-6がほぼ中央部に位置するが層位を検討した結果では同時期存在と考えられる。(底面) 立ち上がりは急傾斜あり、底面は東が高く西が緩やかに傾斜を持つ。確認面からの深さは20cmを測る。(遺物) 土器5点が10点出土したに過ぎない。土器の内訳は竹管文5が出土している。このうち36・37の2点を図示した。(備考) 出土遺物から所産時期は縄文時

代前期前半の諸磯 a 式期と考えられる。

JT-2号竪穴状遺構 (Fig. 24・42・45, P.L. 2・9・12)

(位置) X24、Y121・122G (重複) JD-3・7と重複。(確認面) 全体層序Ⅲ層で確認された。(形状) 楕円正方形。長軸2.95m、短軸2.08m JD-3・7がほぼ北西部に位置するが層位を検討した結果では同時期存在と考えられる。(底面) 立ち上がりは急傾斜であり、底面は東が高く西が緩やかに傾斜を持つ。確認面からの深さは42cmを深い。(遺物) 土器4点、石器が4点出土した。土器の内訳は条痕文1、竹管文1、その他2が出土している。石器の内訳は敲石2、剥片・碎片2である。このうち38・39の2点を図示した。(備考) 出土遺物から所産時期は縄文時代前期前半の諸磯 a 式期と考えられる。

3) 土坑

JD-1号土坑 (Fig. 18, P.L. 2)

(位置) X28、Y127G。(形状) 楕円形。長径77×短径59cm、深さ33cmを測る。平面形・断面形とも整美された形である。底面はほぼ平坦である。(備考) 山上遺物がないことから所産時期の決定は困難であるが縄文時代前期前半諸磯式期と推定できる。

JD-2号土坑 (Fig. 18, P.L. 2・12)

(位置) X32、Y131G。(形状) 楕円正方形。長径110×短径99cm、深さ57cmを測る。(遺物) 打製石斧が1点検出されたに留まった。(備考) 山上遺物から石器が1点出土したに過ぎない。他の遺構から縄文時代前期前半諸磯期の所産と判断した。

JD-3号土坑 (Fig. 18, P.L. 2)

(位置) X35、Y126・127G。(形状) 楕円正方形。長径125×短径90cm、深さ96cmを測る。(備考) 遺構形状から縄文時代早期後半の所謂陥し穴と判断した。

JD-4号土坑 (Fig. 18, P.L. 2・9)

(位置) X35、Y123G。(形状) 楕円正方形。長径62×短径53cm、深さ29cmを測る。(備考) 他の遺構から縄文時代前期前半諸磯期の所産と判断した。

JD-5号土坑 (Fig. 18, P.L. 7)

(位置) X29、Y117G。(形状) 楕円正方形。長径80×短径67cm、深さ26cmを測る。(遺物) 隆脊と刺突を有する条痕文(40)が1点出土した。(備考) 山上遺物や他の遺構から縄文時代前期前半諸磯期の所産と考えられる。

JD-6号土坑 (Fig. 17, P.L. 9)

(位置) X23、Y121G。(形状) 楕円正方形。長径170×短径152cm、深さ105cmを測る。JT-1号竪穴状遺構の中心に位置する。(遺物) 上器は縄文織維1、無文織維1、竹管文2が出土している。図示できたのは2点(41・42)である。石器は敲石1、蝶の巣石1が出土している。(備考) 出土

遺物と他の遺構から縄文時代前期前半諸磧期の所産と判断した。

JD-7号土坑 (Fig. 17)

(位置) X23・24、Y122G。 (形状) 隅円正方形。長径125×短径103cm、深さ20cmを測る。 (備考) 他の遺構から縄文時代前期前半諸磧期の所産と判断した。

JD-8号土坑 (Fig. 17、P.L. 3)

(位置) X23・24、Y122G。 (形状) 隅円正方形。長径115×短径106cm、深さ55cmを測る。 (備考) 他の遺構から縄文時代前期前半諸磧期の所産と判断した。

JD-9号土坑 (Fig. 18、P.L. 9)

(位置) X23、Y122・123G (形状) 隅円正方形。長径75×短径72cm、深さ49cmを測る。 (遺物) 縄文織維1、竹管文1が出土し、図示できたのはうち1点(43)である。 (備考) 出土遺物と他の遺構から縄文時代前期前半諸磧期の所産と判断した。

4) 包含層の遺物

包含層からは総数2,061点の縄文土器片が出土した。これらの内訳についてはTab. 2に示したとおりである。早期終末から前期初頭の遺物が1,457点と全体の71%を占めていた。次いで前期後半の諸磧a、b式が300点と14.5%を占める。このほかに少量ながら、撫条文や沈線文、中期から後期の上器も出土している。

a. 土器 (Fig. 24~26、P.L. 3・4・10・11)

第1群土器は撫条文系土器群を扱った。44・45の2点である。

第2群土器は沈線文系土器群である。47は田戸下層式に該当する。

第3群土器は条痕文系土器群を扱った。縄文時代早期後葉から前期初頭の土器群である。織維を施入し内外面に貝殻条痕文を施文するものが主体をなすが、縄文条痕や短輪絞条体を条痕として使用したものが存在する。48~52は沈線を多用するもの、53~61は陰帯が貼付されるものである。62~75は条痕文、76~86が縄文施文される土器である。87~84は外面は無文である。

第4群土器は竹管文系土器群である諸磧a・bを扱った。この中でも浮線文は數点と少なく、主に円管文や連続爪形文が施文される土器であった。110~115は関西地方に分布する北白川下層であり、116は東關東に分布する浮島式土器である。

第5群土器は縄文中期から後期の上器を一括して扱った。117~122である。

b. 石器 (Fig. 27~33、P.L. 3・4・12~14)

合計1,036点が出土した。器種でみると、石鏃33点と打製石斧44点が目立った存在である。打製石斧は早期後半に出現するトランシェ様石器に似た片刃形のものが存在する。40は長身の有舌尖頭器である。41~56は無茎石鏃である。石材はチャートが20点、黒色頁岩が8点、黒曜石製1点である。57~60、62~64が石匙である。61・65~67・69~73が削器である。74~80までが楔形石器、80~94・

96～105までが打製石斧である。裏面に大きく縦面を残したものが多く、片刃である。95は三角錐形石器であり、105は分銅形であることから縄文後期の所産である。106～115については磨、敲き、凹み石である。

c. 石器石材

次にTab. 2の付表の石材では関東山地北部産出の緑色片岩が量的にも多く搬入されている点に注目できる。石棒や石皿・砥石・敲石の石製品や石器にも使用されているが、多くは加工の痕跡が認められないことから他の目的が考えられよう。

これらの石材を産地との距離、大きさ、硬さや緻密さ、粘りなどから便宜的に第1から第5群石材に分類した。

第1群石材は黒曜石、チャート、珪質頁岩、硬質頁岩などの緻密な加工に適する石材である。この中で黒曜石は長野県や栃木県に産出地があり、硬質頁岩は中部以北の日本海側から搬入された遠隔地石材である。小形の石器に利用されることは産地との移動の距離、産出形状、粘りの弱さが考慮された結果といえよう。第1群石材の総重量は1548.9gであり、この中でチャートの総重量は1013.5gと65%を占めている。なお、チャートの主要な採集地は9km離れた渡良瀬川流域に求められる。

第2群石材は黒色頁岩・黒色安山岩を代表格とする県内の一般的石器石材である。中形の加工石器に利用されること、大きい素材が提供され、粘りがあり、産地が近い結果といえる。ただ、有舌尖頭器、石鎌、石匙、石錐などの小形石器にも多用されている。利器に加工される石材である第1群と第2群の中でみた場合には他を抜き出した利用がみられた。第1群と第2群を合わせた重量が12728gであり黒色頁岩は8438.8gと66%を占めている。それに比べ黒色安山岩は、346gと3%にも満たない。それに比べ渡良瀬川流域に広くみられるホルンフェルスが1381.2gであり11%と高比率を占める。

第3群石材としたものは、内加工には不向きで円錐のまま利用されるものである。目的に適う形状・大きさの素材を最短距離で5km離れた古利根川から採取したと考えられる。石英閃綠岩・ひん岩・輝綠岩などの石材である。

第4群石材とした結晶片岩類は長く利用される石材で、後期以降は石棒などの第2の道具に多用される。産地が三波川帯（多野・秩父地域）に限定できるため、交易研究に優れた石材である。石器としては確認できなかったが緑色片岩が1554.1g、雲母石英片岩が25.9gが出土した。向者を合わせると1.6kgを超える石材が遺跡に搬入されている。

第5群石材とした粗粒輝石安山岩は赤城山の山体を形成している岩石であり、山麓では至るところにみられる。粗い軟らかな石材であり巨大な原材料も入手が可能である。石皿や鉢の裏石に利用されるが極まれに打製石斧にも使用される。

d. 遺物分布

表土掘削後に縄文時代遺物包含層についてジョレン掛けを行い遺物集計を行った。その結果、遺物が集中する区域は大きく2カ所であった。1つが遺跡の北東であるX29～X37区、Y115～Y121

区の集中であり、もう 1カ所が X27～X34区、Y125～Y130区の集中である。2カ所を中心に掘り下げを行った。また、後者の集中区域は縄文前期の住居址の分布と重複をみせる。従って遺物分布を検討する場合、掘り下げを行っている区域と行っていい区域が存在するため分布図をみる場合注意が必要である。

①土器群の分布 (Fig. 14～16) 土器群の分布は石器と比べた場合、著しい偏在性を読み取れる。量的に多いことも確かであるが第3群の分布が集中をみせている。また、第4群の分布は南側に偏る傾向があるのにくらべ第5群は中央部分に分布をみせている。

第1群土器の分布…撚糸文土器群は南部から1点のみの出土である。

第2群土器の分布…沈線文土器群はやや東寄りに2点が出土しているだけである。

第3群土器の分布…早期終末から前期初頭は全域に分布をみせるが掘り下げを行った北辺に特に集中している。X29～X36、Y115～Y120区には著しい集中がみられる。

第4群土器の分布…縄文時代前期後半の土器は第3群の分布域とは異なり南の区域にややまとまりがみられた。しかし、第3群の分布にくらべると量的にも少なく著しい集中はみられない。

第5群土器の分布…縄文中期・後期の土器は有文破片に限って分布をみたが、中央部分に散在する。したがって早期や前期の分布域と異なりをみせている。

②石器群の分布 (Fig. 13) 石器全体分布…石器の分布は土器とやや異なり北側のX29～X31、Y114～Y116に集中がみられる。土器が南の住居集中区にみられたのに比べるとやや異なりをみせている。

有舌尖頭器・石鏃・石錐・楔形石器の分布…有舌尖頭器はX36・Y125から1点出土している。石鏃は北に集中しているが南側からも出土している。北側に分布する石鏃、楔形石器多くは縄文早期末葉から前期初頭にかけての石器であることが考えられよう。

削器・石匙の分布…削器と石匙は北側に集中をみせている。このことは縄文早期末葉～前期初頭にかけての時期のものであることが考えられる。

打製石斧の分布…北側の調査区と南側にまとまりがみられる。片刃の打製石斧は北側にまとまり傾向があることから、早期末葉～前期初頭の時期であり、南側のものは両刃の打製石斧であることからそれ以外の時期である可能性が高い。

3 そ の 他

1) 土 坑

D-1号土坑 (Fig. 25, PL. 7)

(位置) X27、Y128G (形状) 円形。長径80×短径70cm、深さ21cm。平坦な底面を持つ。 (備考) 覆上の層から所産時期は古墳時代以降と考えられる。

2) 地割れ

X-1号地割れ (Fig. 25)

(位置) X32・33、Y117・118G (形状) 5条に分かれて検出された。最大幅12cm・深さ29cmである。

(備考) 覆土にAs-Bが認められないことから818年の大地震に伴うものと考えられる。

X-2号地割れ (Fig. 25)

(位置) X25、Y119・120G (形状) 2条に分かれて検出された。最大幅14cm・深さ47cmである。(備考) 覆土にAs-Bが認められないことから818年の大地震に伴うものと考えられる。

X-3号地割れ (Fig. 25)

(位置) X26、Y125・126G (形状) 3条に分かれて検出された。最大幅23cm・深さ46cmである。(備考) 覆土にAs-Bが認められないことから818年の大地震に伴うものと考えられる。

3) 落ち込み

O-1号落ち込み

(位置) X27・28、Y127G (形状) 円形。長径195×短径110cm、深さ49cm。(備考) 所産時期は不明。

O-2号落ち込み

(位置) X32、Y123・124G (形状) 円形。長径330×短径200cm、深さ37cm。平坦な底面を持つ。(備考) 所産時期は不明。

O-3号落ち込み

(位置) X32、Y121・122G (形状) 円形。長径260×短径260cm、深さ79cm。(備考) 所産時期は不明。

VI B区の調査（幹線ケーブル埋設地）

調査の結果、古墳時代の住居址が8軒調査された。このうち前期が6軒、後期のものが2軒であった。この集落は後二子古墳に隣接する東側の丘陵に形成されたものである。風のわたる丘から検出された下縄引遺跡の集落とは谷を挟んだ形で向かいあって立地している。古墳時代後期の集落も5世紀末葉から6世紀初頭にかけての時期であるため6世紀後半である後二子古墳との時間的な関係は本集落の方が占い。なお、古墳時代前期の集落は後二子古墳の調査でも発見されているため広い範囲での広がりがみられる。

1 古墳時代

1) 住居址

H-1号住居址 (Fig. 26, P.L. 5)

（位置）E・F-22～24G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）調査は、対角線上に西側部分の調査を実施した。調査した範囲からみれば正方形である。（覆土）住居址を覆っている土は大きく3層に分けられる。主的には黒色土が覆う。（床面）調査した範囲で堅歛面がひろがっていた。（炉址）調査した範囲ではみつかっていないが東半分に存在するものと推定される。（柱穴）西壁に壁柱穴が1個検出された。従来の調査で壁柱穴の2本柱が検出されているので、本住居址も2本柱穴の住居址と考えられる。（遺物）土器が4点出土した。いずれも古墳時代前期のものであるが図示できるものはなかった。（備考）出土遺物や住居址形態から古墳時代前期でも古い様相を帯びるものと考えられる。

H-2号住居址 (Fig. 26, P.L. 5)

（位置）F-26・27G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）西のコーナー部分を調査したに過ぎないが、正方形と考えられる。（覆土）大きく2層に分かれる。主的には黒色土である。（床面）調査した範囲ではやや硬い床面が広がっていた。（遺物）なし。（備考）住居址の覆土から古墳時代前期ものと考えられる。

H-3号住居址 (Fig. 26, P.L. 5・15)

（位置）E・F-10・11G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）全体の1/2を調査したに過ぎないが、2つのコーナーが検出されたことから正方形と考えられる。（覆土）詳細な観察は実施していないが、主的には黒色土で充填される。（床面）炉址を中心に堅歛面が広がり、部分的に堅歛面が存在する。ほぼ平坦に造られている。（炉址）北西によった部分から地床が検出した。炉の規模は長軸82cm×短軸64cm×深さ15cmである。底面には赤化した堅い面が存在していた。（柱穴）炉址の脇から柱穴1個検出された。長径41cm×短径38cm×深さ24cmである。（遺物）土器が58点出土した。いずれも古墳時代前期のものであるが図示できたものは鏡(1)の1個体である。（備考）出土遺物や住居址形態から古墳時代前期と考えられる。

H-4号住居址 (Fig. 27, P.L. 5)

（位置）E・F-11～13G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）全体の1/2を調査したに過ぎないが、2つのコーナーから長方形と考えられる。（覆土）詳細な観察は実施していないが、主的には黒色土で充填されるが一部にAs-Cの純層が存在していた。（床面）炉址を中心に部分的に堅歛面が広がり、ほぼ平坦に造られている。（炉址）中央部から2カ所の地床炉を検出した。F1は長軸74cm×短軸32cmであり、F2は長軸70cm×短軸38cmである。底面には赤化した堅い面が存在

していた。(遺物) 土器が262点出土した。いずれも古墳時代前期のものであるが図示できたものは
壺(3・4)の2個体である。(備考) 山上遺物や埋土にAs-Cが存在することから古墳時代前期でも
古い様相を帯びるものと考えられる。

H-5号住居址 (Fig. 27、P.L. 6・7・15・16)

(位置) E・F-16~18G(確認面) 全体層序Ⅲ層で確認した。(形状) 全体の1/2弱を調査したに
過ぎないが、正方形と考えられる。(方位) N-71°-E(覆土) 詳かな観察は実施していないが、
主体的には黒色土で充填される。(床面) 壁前面を中心に堅緻面が広がっていた。全体にわたって
ほぼ平坦に造られている。(窓址) 北東壁のやや東よりに位置する。袖や天井部には粗粒輝石安山岩
の山石を用いている。袖部は粘土を主体に構成される。窓内から壺が2個体掛けられた状態で出
土している。支柱は高杯(6)を転用したもので内部に粘土が充填されていた。窓の振り方には住居
址の周溝が認められた。(炉址) 中央北寄りから地床炉を検出した。大きさは長軸50cmである。壺
と炉を併用した住居である。(柱穴) 柱穴は1個検出されただけであるが、4本柱住居址になるもの
と考えられる。柱穴は長径27cm×短径23cm×深さ83cmである。(貯蔵穴) 壁の右側に位置する。
幅軸117cm、深さ8cmの一段下がったテラスを有し円形を呈する。大きさは長径68cm×短径59cm×深
さ82.5cmである。(床下上坑) 壁の前面から長径87cm×短径87cm×深さ76.5cmの床下上坑を検出。
土坑下部から焼土と粘土層が厚さ15cm堆積していた。(遺物) 上器片が382点出土した。また、完形
個体が9点・他7点はほぼ完形が山上した。いずれも窓周辺に集中しており南東壁から杯・壺、窓
の右脇から杯・壺、窓の東から杯数個体がまとまって出土した。(備考) 山上遺物から古墳時代後
期鬼高I式期の所産である。

H-6号住居址 (Fig. 27 写真 P.L. 7)

(位置) E・F-19・20G(確認面) 全体層序Ⅲ層で確認した。(形状) 全体の1/2を調査したに過
ぎないが3つのコーナーから正方形と考えられる。(覆土) 詳細な観察は実施していないが、主体
的には黒色土で充填される。覆土の一部にAs-Cの純層が存在していた。(床面) 炉址を中心部分
的に堅緻面が広がり、ほぼ平坦に造られている。(炉址) 中央部から地床炉を検出した。大きさは
長軸53cmであり、底面には赤化した堅い面が存在していた。(遺物) 土器が9点出土した。いずれ
も古墳時代前期のものであるが図示できたものはなかった。(備考) 出土遺物や埋土にAs-Cが存在
することから古墳時代前期でも古い様相を帯びるものと考えられる。

H-7号住居址 (Fig. 29、P.L. 7・8)

(位置) E・F-28~30G(確認面) 全体層序Ⅲ層で確認した。(形状) 水道工事に立ち会い調査で
西側のコーナーが検出されており、その後の拡張ではほぼ全体の調査をすることができた。(方位)
N-56°-E(覆土) 4層に分けられる。最上部にAs-Bテフラの純層が堆積していた。主体的には

黒色土で充填される。(床面) 窟前面を中心に堅緑面が広がっていた。全体にわたってほぼ平坦に造られている。(窓址) 北東壁のやや東よりに位置する。袖や大井部には粗粒輝石安山岩の山石を用いて構築している。袖部は粘土とロームセを主体に構成される。支柱には粗粒輝石安山岩を用いている。窓の掘り方には住居址の周溝が認められた。(柱穴) 柱穴は4個検出されただけである。P 1 が長径27cm×短径26cm×深さ50.5cm、P 2 が長径25cm×短径24cm×深さ49.5cm、P 3 が長径33cm×短径30cm×深さ40.5cm、P 4 が長径24cm×短径20cm×深さ55cmとなる。(貯蔵穴) 窟の右側に位置する。4個が対角線上に並ぶものの北側の柱穴間に比べ南側の柱穴間がやや狭くなっている。(遺物) 土器片が75点出土した。分布は窓の前面に集中して出土した。図示できたものは30・31の甕、29の小甕の3個体であった。(備考) 山上遺物から古墳時代後期鬼高I式期の所産である。

H-8号住居址 (Fig. 30, P.L. 8)

(位置) CD-33・34C(確認面) 全体層序Ⅲ層で確認した。(形状) 幅5.28mで調査したに過ぎない。北側にテストトレンチを入れた所、礫が検出できた。(理土) 大きく5層に分けられる。下部の3層にAs-Cの純層が存在していた。黒色土が主体となっていた。(床面) 調査した範囲では堅緑面が広がっていた。(か址) 中央部の北側にか址を検出した。調査した範囲で長径75cm、短径49cm、中央部に円環が2個並んで設置されていた。(柱穴) 北壁に2個検出したことから4本柱の住居である可能性が高い。(周溝) 西側と東側から検出されている。西側のものは途中で途切れている。(遺物) なし。(備考) 埋土にAs-Cが存在することから古墳時代前期でも占い様相を帯びるものと考えられる。

2 その他の

1) 地割れ

X-1号地割れ (Fig. 30, P.L. 12)

(位置) BC-35・36G(確認面) 全体層序Ⅱ層で確認した。(形状) 上幅4.82m、下幅4.39mで深さ1.3m落ち込んでいる。両側に深い亀裂が入っており、西側では幅65cm、東側では幅85cmである。その間は平坦に落ち込んでいる。(地割れの方向) N-10°-E(覆土) 上部にAs-Bテフラの純層が確認された。このAs-Bテフラの純層は落ち込んでいない。(備考) 覆土からAs-Bテフラ降り以前の大地震に伴うものであることが判明した。すでに検出されている地割れと同時期のものであることが予想されるため818年の大地震に伴う地割れの可能性が高い。

VII 成果と問題点

平成7年度（1995）の調査は、A区（民家園予定地）3,000m²とB区（ケーブル埋設地）400m²の計2ヵ所3,400m²の調査を行った。A区では旧石器時代の文化層から旧石器135点が、縄文時代では、前期住居址4軒、堅穴状遺構2基、土坑9基を検出した。このほか縄文包含層から縄文土器2,061点、石器1,036点が出た。B区の調査は短期間であったが、占墳時代前期の住居址6軒、後期の住居址2軒のほか、地割れ1条が検出された。

1 A区の調査（民家園予定地）

1) 旧石器時代

A区については、かねてから旧石器時代文化層の存在を推測していた。それは、丘陵の突出した先端部で眼下の平坦地から7~8mと高いという、周囲に眺望のきく恵まれたロケーションであったからである。今年度（平成7年度）の調査では、試掘調査と本調査の結果、旧石器時代文化層の石器が東西2ヵ所の地点から135点が出土した。西のA地点からは、120点の石器が出土した。その内訳は、ナイフ形石器7、台形様石器3、削器5、抉入石器3、斧形石器1、局部磨製石斧2、石核や剥片・碎片などで構成される。A地点の石器120点の石材内訳は、黒曜石が主体を占め、黒色頁岩や黒色安山岩、粗粒輝石安山岩、ホルンフェルス、結晶片岩、チャートが認められた。

石器の出土層位はVII層（AT層）下部の暗色帶であるVIIa層に所属するものである。AT層の年代は約2.2~2.5万年前という年代が算出されている。

B地点の石器は15点を数える。器種でみるとナイフ形石器2、斧形石器1、台石4、剥片で構成される。B地点の石器石材は、黒曜石の使用がなく、黒色安山岩や黒色頁岩など在地の石材で構成される。石器の出土層位はA区と同様にVII層（AT層）下部からの暗色帶であるVIIa層に所属するものである。

このようにA地点とB地点ともほぼ同一水準から出土しており、いずれも群馬編年I期第1段階の石器群である。両地点から出土した斧形石器は接合はしないものの同一母岩の可能性が高いため、同時期に形成された可能性が高い。これらの石器群の調査は来年度も（平成8年度）も継続して実施されるため、来年度刊行する『内堀遺跡群IX』に2ヵ年あわせて掲載する予定である。

2) 縄文時代

A区の縄文時代の遺構・遺物は調査区の南西に延びる台地の標高129m~133mにまとまって検出された。堅穴住居址4軒、堅穴状遺構2基、土坑9基、包含層によって構成されていた。住居址4軒は前期諸期式期のものであり、堅穴状遺構や土坑についても遺物が検出されなかつたが住居址

とほぼ同じ時期と考えられた。包含層の調査では、有舌尖頭器 1 点をはじめ早期から後期の土器 2,061 点・石器 1,036 点が出土した。

この中で京都府北白川小倉町遺跡を標識遺跡とする縄文時代前期に属する北白川下層式土器が 6 点出土している。北白川下層式土器は関西地方を中心に関東地方まで分布している。この型式の特徴は、薄手で文様が条痕文+爪形文、縄文+爪形文、縄文+特殊突帯文などの特色ある構成があげられる。今回出土した土器は、薄手のもので褐色の器壁に乳白色の細かな刻みがなされる浮線文が特徴である。このほかに東関東系の土器である浮島式土器が 1 点出土している。

2 B 区の調査（幹線ケーブル埋設地）

B 区の調査は短期間であったが、古墳時代前期の住居址 6 軒、後期の住居址 2 軒のほか、地割れ 1 条が検出された。このうち地割れは、内堀遺跡群 II や内堀遺跡群 IV で検出されている、818 年（弘仁 9 年）の大地震に起因するものと思われる。

1) 古墳時代前期

今回の調査で、古墳時代前期の遺構は、すでに調査されている下綱引 I・II 遺跡、上綱引遺跡と谷を挟んだ内堀遺跡に存在することが判明した。今回の内堀遺跡では 6 軒の住居址であったが、谷をはさんだ南側にも古墳時代前期の集落が存在することが判明した。すでに、『内堀遺跡群 III』の調査で後二期古墳の北側から前期の住居址らしいものの検出があったが、判然としなかったため、今回の調査で広く谷を挟んだ両側に集落が存在することとなった。

下綱引 I 遺跡（『西大室遺跡群 IV』）では、微高地上の狭い調査区から 4 軒の住居址が調査されている。下綱引 II 遺跡（『内堀遺跡群 II～VI』）では 100 軒近い住居址が調査されており、更にその数は増加するものと考えら



第 1 図 古墳時代前期の集落と墓域
(上綱引遺跡と下綱引 I・II 遺跡・内堀遺跡)

れる。このように沖積地を挟んで、下綱引Ⅰ・Ⅱ遺跡の集落と内堀遺跡の3集落が存在する。これらの集落に挟まれた現五料沼一帯の沖積地が生産域である水田に該当するものと思われる。このほかに、下綱引Ⅰ遺跡周辺の神沢川と桂川が形成した沖積地にも生産域が存在する可能性もある。

この谷の奥にあたる丘陵地に墓域が形成されている（『西大室遺跡群Ⅱ』・『内堀遺跡群Ⅴ』）。周溝墓14基が調査された上綱引遺跡であるが、円形10基、方形3基、前方後方形1基の合計14基の周溝墓が存在する。これらの周溝墓を形成した集落は、下綱引Ⅰ・Ⅱ遺跡と内堀遺跡と想定される。当初は、下綱引Ⅰ・Ⅱ遺跡に付随した墓域と考えたが、現五料沼一帯の両岸から、今後も集落の検出が予測されるため、これらの集落の人々が形成した墓域と考えていきたい。今後、内堀遺跡群の全体調査が完了した時点で、集落変遷や墓域変遷を詳細に分析する必要がある。これらの内堀遺跡群の集落・生産域・墓域の分析によって赤城山南麓における弥生時代終末期から古墳時代初頭への文化変遷の実態がより明確に浮き出されてくるものと思われる。

2) 古墳時代後期

今回の調査によって、古墳時代中期から後期の住居址が2軒が調査された。すでに『前二子古墳範囲確認調査』や『中二子古墳範囲確認調査』でも同じ時期の住居址が検出されている。2つの古墳の調査は、古墳の範囲確認調査が主目的であり、トレンチ調査であったため集落の全貌は把握していないが、その様相を推察することは可能である。

前二子古墳と中二子古墳から出土した須恵器は、須恵器編年のMT15である。このことから、両古墳は築造された時期は、6世紀初頭から前半に位置付けられる。両古墳周辺での、



第2図 古墳時代中期～後期の集落と墓域
(上綱引遺跡と下綱引Ⅰ・Ⅱ遺跡・内堀遺跡・五反田遺跡)

この時期の集落のあり方をみると、下鉢引II遺跡や内堀遺跡、前二子古墳周辺に広がる五反田遺跡から検出されている。五反田遺跡の集落は、前二子古墳と中二子古墳のトレンチ調査で検出されたものであり、集落の全貌は明らかでないが、9軒の住居址が確認された。古墳に近接するものであり、中には墳丘下や外堤下に存在するもので、ほぼ前・中二子古墳築造直前の住居といえる。中二子古墳の確認調査で見つかった住居址は、外堀に近接するもので、現五料沼内からみつかっている。

のことから前二子古墳・中二子古墳にかけての一帯には古墳時代中期後半から後期前半（5世紀終末から6世紀前半）の大規模な集落が存在していた。しかし、大前方後円墳の造営にあたって集落形成はその後全くなされなくなる。今回の内堀遺跡での調査事例2軒も、古墳造営によって移動を余儀なくされた集落であろう。今後、大前方後円墳の築造にあたってこの地域一帯での集落変遷や社会構造を分析していく必要がある。これらの分析により古墳築造以前の集落集団と古墳造営集団の関係も見いだせるものと考えられる。大前方後円墳の造営にあたって造営組織と地域の変遷をとられる中で、古墳の被葬者像もより明確に表出させることができるものと考えている。

参考文献

- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 「小堀遺跡解説」
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1989 「内堀遺跡解説」
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990 「内堀遺跡解説」
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991 「内堀遺跡解説IV」
前橋市教育委員会 1993 「内堀遺跡解説V」
前橋市教育委員会 1994 「内堀遺跡解説VI」
前橋市教育委員会 1995 「内堀遺跡解説VII」
前橋市教育委員会 1991 「西大塚遺跡解説」
加部二化・前原 豊「内堀遺跡解説」昭和60年「東日本における古墳埋蔵調査の検討」山形大学学術研究会
前橋市教育委員会 1983 「西大塚遺跡解説IV」
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986 「梅木遺跡」
岩川町教育委員会 1985 「岩川町内堀遺跡 昭和60年度」
岩川町教育委員会 1986 「岩川町内堀遺跡 昭和61年度」
岩川町教育委員会 1987 「岩川村の遺跡」
岩川町教育委員会 1988 「荒瀬遺跡」
岩川町教育委員会 1990 「西道遺跡」
安中市教育委員会 1988 「古城遺跡」
長岡明徳・井戸教育委員会 1994 「トカラ堂—諏訪御用町の集落調査報告」
長岡明徳・井戸教育委員会 1993 「立科I遺跡」
岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会 1993 「霞ヶ浦シック群 予備集」
岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会 1994 「霞ヶ浦の岩宿シックの変遷と特色 資料集」
岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会 1994 「霞ヶ浦の岩宿シックの変遷と特色 予備集」
岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会 1996 「石器石材—北側町の原石とその流通を中心として—予備集」

Tab. 1 報告書抄録

ふりがな	うちばりいせきぐんはち
書名	内堀遺跡群Ⅳ
副書名	大室公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第8巻
編著者名	前原 豊・新井真典
編著機関	群馬県前橋市教育委員会管理部文化財保護課
編著機関所在地	〒371 群馬県前橋市上泉町661-4
発行年月日	1996(平成8)年3月28日

所収遺跡名	所在地	ふりがな	コード	位置	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
うちばり 内堀遺跡群	群馬県前橋市	ぐんまけん さきばしし		北緯 36° 23' 05"	1995/04/25 ~		
うちばり 内堀遺跡	西大室町 2510番地ほか	にしおおむろ にしおおむろ	10201	東経 139° 11' 45"	1995/10/31	3400m ²	公園造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
内堀遺跡群	文化層	旧石器時代	文化層	群馬櫛牛I類第1段階のA-T層下の2群の石器135点
	集落	縄文時代	住居址4・土坑9・竪穴状遺構2	縄文時代前期諸種a式期の遺物
	包含層	縄文時代	縄文時代前期～後期の遺物	縄文土器2,061点、石器1,036点
	集落	古墳時代	住居址8	土師器・須恵器・石製品
内堀遺跡	地割れ	平安時代	地割れ1	818年の大地震に伴う地割れ
特記事項	旧石器時代では、群馬櫛牛I類第1段階の黒曜石を多用する1群と地元石材の黒色安山岩等を用いる1群の2群が存在。縄文時代では前期諸種a式期の集落、古墳時代前期や後期の集落が検出され、社会構造を解明するためのデータを補強された。			

Tab. 2 A区包含層繩文土器一覽表

時期	分類	種類・型式	点数	小計	割合(%)
早期前半	第1群土器	撲杀文	2		
早期中葉	第2群土器	沈線文	1	3	0.2
早期終末～ 前期初頭	第3群上器	沈線文（織維）	26		
		隆脊・刺突（織維）	16		
		貝殻背压痕（織維）	34		
		条痕文（織維）	407	1,457	70.7
		条痕繩文（織維）	20		
		繩文（織維）	441		
		無文（織維）	513		
前期後半	第4群土器	竹管文（連続爪形文・円管文・浮線文）	51		
		竹管文（平行沈線）	21		
		浮線文	116		
		繩文	100	300	14.5
		北白川下層式土器	6		
		浮島式土器	6		
中期～後期	第5群土器	加曾利E・称名寺・堀之内式	10		
		無文	81	91	4.4
不明			210	210	10.2
合計			2,061	2,061	100

Tab. 3 A区繩文石器集計表

Tab. 4 A区遭情別御文石器一覽表

Tab. 5 桐文土器觀察表

番号	出土位置	器形	①軸②焼成③色画④残存危険部、製作技術の特徴	登録番号	備考
1	J-1	桐文深鉢	①輪底②良好③にない黄緑④縁部⑤平行沈線・水建乳形文。	296	語継b
2	J-1	桐文深鉢	①中粒②良好③にない黄緑④縁部⑤半裁竹管による逆続爪形文。地文に桐文R L。	163	語継b
3	J-1	桐文深鉢	①中粒②良好③青緑④縁部⑤円管文・半裁竹管による逆続爪形文。地文に桐文R L。	190	語継b
4	J-1	桐文深鉢	①中粒②良好③青緑④縁部⑤円管文・平行沈線・地文に繩文R L。	177	語継b
5	J-1	桐文深鉢	①中粒②良好③青緑④縁部⑤円管文・半裁竹管による逆続爪形文。地文による格子目。地文に純文R L。	218	語継b
6	J-1	桐文深鉢	①細粒②良好③にない黄緑④縁部⑤半裁竹管による平行沈線と鉢縁。	73他	語継b
7	J-1	桐文深鉢	①中粒②良好③細粒④縁部⑤純文R L。	125	語継b
8	J-1	桐文深鉢	①繩文②良好③青緑④縁部⑤口段多条の撲文R L。	271	黑浜
9	J-1	桐文深鉢	①細粒②良好③青緑④縁部⑤純文R L。	209	語継b
10	J-1	桐文深鉢	①繩文②良好③細粒④縁部⑤薄普純文⑥口段多条のR Lに口段多条のR Lを有する。	375	黒浜
11	J-1	桐文深鉢	①繩文②口段③青緑④縁部⑤口段多条の地文R L。	275	黒浜
12	J-1	桐文深鉢	①繩文②良好③にない黄緑④縁部⑤地文R L。	80	黒浜
13	J-1	桐文深鉢	①細粒②良好③青緑④縁部⑤純文R L。	200	語継
14	J-1	桐文深鉢	①細粒②良好③にない黄緑④口縫部⑤ナデ状の沈線。	38	語継
15	J-1	桐文深鉢	①中粒②良好③にない水泡④縁部⑤桐縫部と糞粂部との白い浮線文を持つ。	305	北白川ト判
16	J-1	桐文深鉢	①中粒②良好③にない赤褐色④縁部⑤圓形粘土と糞粂部との白い浮線文を持つ。	16	北白川下層
17	J-1	桐文深鉢	①中粒②良好③にない赤褐色④縁部⑤浮線文。	286	語継b
18	J-1	桐文深鉢	①細粒②良好③にない赤褐色④縁部⑤地文R L。	241	浮島
19	J-1	桐文深鉢	①細粒②良好③にない赤褐色④縁部⑤地文R L。	92	浮島
20	J-1	桐文深鉢	①繩文②良好③明赤褐色④縁部⑤表面に貝殻条痕。裏面はナデ。	40	奈良文系
21	J-2	桐文深鉢	①中粒②良好③にない黄緑④縁部⑤半裁竹管による平行沈線。地文に繩文R L。	-	語継b
22	J-2	桐文深鉢	①中粒②良好③青緑④縁部⑤口段部⑥下裁竹管による平行沈線。地文に繩文R L。	-	語継b
23	J-2	桐文深鉢	①中粒②良好③青緑④縁部⑤口段部に突起。円管文・半裁竹管による逆続爪形文。地文に桐文R L。	-	語継b・3と同一個体
24	J-2	桐文深鉢	①中粒②良好③青緑④縁部⑤糞粂を貼付。地文に繩文R L。	-	語継b
25	J-2	桐文深鉢	①繩文②良好③青緑④縁部⑤貝殻条痕。裏面にナデ。	-	奈良文系
26	J-2	桐文深鉢	①中粒②良好③細粒④縁部⑤純文R L。	-	語継b
27	J-2	桐文深鉢	①中粒②良好③にない赤褐色④縁部⑤桐縫部の純文R L。	-	語継
28	J-2	桐文深鉢	①中粒②良好③青緑④縁部⑤純文R L。	-	語継
29	J-2	桐文深鉢	①繩文②良好③にない黄緑④縁部⑤口段部⑥口段多条の純文R L。	-	黒浜
30	J-2	桐文深鉢	①繩文②良好③青緑④縁部⑤口段多条の純文R L。	-	黒浜
31	J-2	桐文深鉢	①繩文②良好③青緑④縁部⑤純文R L。	-	黒浜
32	J-3	桐文深鉢	①小粒②良好③にない黄緑④縁部⑤半裁竹管による平行沈線。地文に繩文R L。	-	語継b
33	J-3	桐文深鉢	①繩文②良好③にない水泡④縁部⑤揚げ底に繩文R L。	-	黒浜
34	J-4	桐文深鉢	①繩文②良好③青緑④縁部⑤純文R L。	15	黒浜
35	J-4	桐文深鉢	①繩文②良好③青緑④縁部⑤口段部の純文R L。	17	黒浜
36	JT-1	桐文深鉢	①細粒②良好③にない黄緑④縁部⑤円管文・半裁竹管による斜波の集合沈線。	-	語継
37	JT-1	桐文深鉢	①細粒②良好③青緑④縁部⑤地文R L。	3	語継
38	JT-2	桐文深鉢	①細粒②良好③青緑④縁部⑤地文R L。	7	語継b・3と同一
39	JT-2	桐文深鉢	①繩文②良好③にない黄緑④縁部⑤内外面とも貝殻条痕文。	9	奈良文系
40	JB-5	桐文深鉢	①中粒②良好③にない黄緑④縁部⑤糞粂を貼付し割みが入る。	-	奈良文系
41	JB-6	桐文深鉢	①繩文②良好③にない黄緑④縁部⑤糞粂を貼付し割みが入る。	3	語継
42	JB-6	桐文深鉢	①繩文②良好③青緑④縁部⑤糞粂を貼付し割みが入る。	2	黒浜
43	JB-9	桐文深鉢	①中粒②良好③にない黄緑④縁部⑤半裁竹管による平行沈線。地文に桐文R L。	2	語継b
44	X26Y128	桐文深鉢	①細粒②良好③青緑④縁部⑤地文R L。	-	奈良文系
45	X34Y120	桐文深鉢	①中粒②良好③にない黄緑④縁部⑤地文R L。	-	奈良文系
46	X34Y120	桐文深鉢	①細粒②良好③青緑④縁部⑤半裁竹管による平行沈線。地文の一部に割みあり。	-	語継b
47	X33Y119	桐文深鉢	①中粒②良好③にない黄緑④口部⑤口部による溝書きや格子目文様。口部に割みあり。	-	奈良文系
48	X29Y116	桐文深鉢	①繩文②良好③にない黄緑④口部⑤口部による溝書きや格子目文様。口部に割みあり。表面に貝殻条痕。	-	奈山下層

番号	出土位置	器形	①軸上②底成③色刷④残存⑤落形・製作技術の特徴	資料番号	備考
49	X36Y120	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④口縁部⑤沈文に、達文に圓文R L。口縁部にも胡文施文。	-	早朝末葉～前期初頭
50	X36Y120	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③淡黃④觸部⑤触線による格子目文。共に其餘条痕文。	-	茅山下層・45と同一個体
51	X33Y120	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤やや幅広な沈線で重ね文様。	-	田戸上層
52	X29Y116	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③に、44黄④觸部⑤触線による曲線、渦巻。	-	茅山下層・49と同一個体
53	X36Y119	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤触基上に渦巻、條体斜面文。	-	早期末葉～前期初頭
54	X34Y118	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤触基上に渦巻文底、達文に、4段多条渦文R L。	-	早期末葉～前期初頭
55	X32Y116	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤触基上に渦巻文底による丸み、円錐状文底。達文にD段多条渦文R L。	-	花柄下層
56	X33Y118	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤触基上に渦巻文底、達文にD段多条渦文R L。L R.一部無色施彩。	-	花柄下層
57	X33Y118	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤触基上に渦巻文底、達文にD段多条渦文R L。完全赤紅施文。	-	花柄下層
58	X30Y115	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤触基上に渦巻文底による丸み、圓錐状文底。	-	花柄下層
59	X33Y118	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤触基上に渦巻文底。	-	花柄下層
60	X32Y117	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤触基上に渦巻文底。達文にD段多条渦文R L。無色施彩。	-	花柄下層・66と同一個体
61	表揮	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③浅黄④口縁部⑤触部に刻み。表面に縦の先端による横矢。	-	早朝末葉～前期初頭
62	X34Y120	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤口設背压痕。	-	早期末葉～前期初頭
63	X34Y119	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤口設背压痕。内面に只残文底。	-	早朝末葉～前期初頭
64	X32Y118	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤口設背压痕。内面に只残文底。	-	早朝末葉～前期初頭
65	X35Y121	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤口設背压痕。	-	早朝末葉～前期初頭
66	X35Y120	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤口設背压痕。	-	早朝末葉～前期初頭
67	X30Y120	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤口設背压痕とも只残文底。	-	早朝末葉～前期初頭
68	X33Y118	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤内外面とも只残文底前文。	-	早朝末葉～前期初頭
69	X30Y116	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤内外面とも只残文底前文。	-	早朝末葉～前期初頭
70	X34Y118	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤底部に亞笠系。夫底土記。	-	早朝末葉～前期初頭
71	X30Y119	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤内外面とも只設文底。	-	早朝末葉～前期初頭
72	X34Y118	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤外縁に只設文底。	-	早朝末葉～前期初頭
73	X31Y117	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤内縫部とも只設文底。	-	早朝末葉～前期初頭
74	X30Y115	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤内縫部とも只設文底。	-	早朝末葉～前期初頭
75	X34Y120	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤内縫部とも只設文底。	-	早朝末葉～前期初頭
76	X28Y114	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤内縫部とも只設文底R L。内面に只設文底。	-	早朝末葉～前期初頭
77	(25)	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③桺④口縁部⑤D段多条渦文R L. L R.	-	花柄下層・79と同一個体
78	X34Y120	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐④觸部⑤内縫部とも只設文底。	-	花柄下層
79	X31Y117	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐③口縫部④口縫部に設を有する。	-	花柄下層
80	X34Y118	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐③口縫部④口縫部による羽状構成。	-	花柄下層
H1	X30Y116	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐③触部⑤D段多条渦文R L。	-	花柄下層
B2	X34Y126	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐③触部④口縫部の圓文R L。口縫部に設を有する。	-	花柄下層
83	X29Y122	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐③触部④口縫部の圓文R L. L R.に設を有する。	-	花柄下層
B4	X31Y116	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤D段多条渦文R L。	-	花柄下層
B5	X39Y120	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐③触部に圓文施文。内面に只設文底。口縫部に圓文施文。	-	早期末葉～前期初頭
B6	X28Y124	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤圓文R L.の異方向施文による羽状構成。	-	花柄下層～前期初頭・85と同一個体
B7	X30Y118	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤圓文R L.	-	早朝末葉～前期初頭
B8	X34Y120	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤圓文R L.	-	早朝末葉～前期初頭
B9	X30Y116	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④觸部⑤内外面とも植物模様によるナフ。	-	早朝末葉～前期初頭
B10	X30Y118	圓文深鉢	①鐵鑄②良好③明赤褐④触部の圓文R L.	-	早朝末葉～前期初頭
B11	X35Y119	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐③触部④口縫部の圓文R L.内面に只設文底。	-	早朝末葉～前期初頭
B12	X28Y121	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐③触部④口縫部の圓文R L.内面に只設文底、肋骨文。	-	花柄下層
B13	X34Y125	圓文深鉢	①鐵鑄の良鮮②明赤褐③に、45黄④触部⑤口縫部の押しきりによる脚突を残す平行施紋。	-	諸職
B14	X29Y128	圓文深鉢	①中空②良好③に、45黄④触部⑤突起。口縫部に刻み、腹底の漆脱爪形。	-	刀身
B15	X34Y126	圓文深鉢	①中空②良好③に、45黄④触部⑤丁酉竹管による蓮瓣爪形文、円筒文。	-	諸職a

番号	出土位置	縞形	①粘土②焼成③色調④残存⑤器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
96	X34Y125 ほか	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄緑④口縁部⑤半截竹管による幅広な逆狭爪形と刻み。	-	浮島
97	X34Y126	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄緑④胴部⑤内凹文、逆狭爪形文。	-	筑波山
98	X22Y123	縞文深鉢	①細粒②良好③にぶい黄緑④胴部⑤半截竹管による平行沈線。	-	諸磯
99	X22Y123	縞文深鉢	①細粒②良好③にぶい黄緑④胴部⑤半截竹管による平行沈線と変形爪形文。	-	浮島
100	X33Y127	縞文深鉢	①中粒②良好③櫛④脚部⑤半截竹管による平行沈線、地文に縞文R.L.	-	諸磯
101	X30Y116	縞文深鉢	①細粒②極度③浅黄④口縁部⑤半截竹管による平行沈線。	-	諸磯
102	X26Y128	縞文深鉢	①細粒②極度③にぶい粗④口縁部⑤半截竹管による平行沈線。	-	諸磯
103	X28Y128	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい粗④口縁部⑤半截竹管による平行沈線、口唇部に刻み。	-	諸磯
104	X34Y126	縞文深鉢	①粗粒②良好③にぶい黄緑④口縁部⑤浮游文、地文に縞文R.L.	-	諸磯
105	X34Y126 ほか	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄緑④口縁部⑤浮游文、地文に縞文R.L..	-	諸磯
106	X31Y125	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄緑④脚部⑤輪格文、圓文し。	-	諸磯
107	X31Y125	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄緑④脚部⑤輪格文、圓文し。	-	諸磯
108	X27Y127	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄緑④脚部⑤輪格文、圓文し。	-	諸磯
109	X23Y122	縞文深鉢	①粗粒②極度③にぶい脚部④脚部⑤縞文R.L..	-	諸磯
110	X28Y129	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい櫛④脚部⑤脚部粘土と真粘土の白い浮線文を持つ。	-	北白川下層
111	X28Y129	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい櫛④脚部⑤脚部粘土と真粘土の白い浮線文を持つ。	-	北白川下層
112	X27Y129	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい櫛④脚部⑤脚部粘土と真粘土の白い浮線文を持つ。	-	北白川下層
113	X28Y120	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい櫛④脚部⑤脚部粘土と真粘土の白い浮線文を持つ。	-	北白川下層
114	X28Y129	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい櫛④脚部⑤脚部粘土と真粘土の白い浮線文を持つ。	-	北白川下層
115	X28Y129	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい櫛④脚部⑤脚部粘土と真粘土の白い浮線文を持つ。	-	北白川下層
116	X28Y129	縞文深鉢	①細粒②良好③にぶい櫛④脚部⑤変形爪形文。	-	浮島
117	X33Y121	縞文深鉢	①細粒②良好③灰黄④口縁部⑤残存に刻み、沈線。	-	恵之内式
118	X35Y126	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄緑④脚部⑤脚部⑥無文。縞文R.L.	-	称名寺
119	X34Y126	縞文深鉢	①中粒②反対③にぶい櫛④脚部⑤残存に円形溝痕。	-	恵之内式
120	X25Y121	縞文深鉢	①中粒②良好③明赤褐④脚部⑤脚部沈線区画。横走の縞文R.L.	-	加曾利E.3
121	X30Y121	縞文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄緑④脚部⑤無文。	-	中期後半
122	X32Y117	縞文深鉢	①粗粒②良好③にぶい黄緑④底部⑤無文。	-	中期後半

注) 表の記載は以下の基準で行った。

① 粘土は細粒(0.5mm以下)、中粒(1.0mm～1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とし、著微的な動物が入る場合に動物名を付す。成形は極良、良好、不良の3段階評価。

② 色調は土器外表面で観察し、色名は新版標準JIS色名(小山・竹原1970)によった。

③ 残存は復元個体に限って記載。大きさは現存面を()、復元値を(-)で示した。その他の小片については有効部位を記

Tab. 6 石器観察表

No.	出土位置	面種	①長さ②幅③厚さ④重さ⑤残存⑥石材名	形状、調整加工の特徴・取手番号
1	J - 1	石鏃	①1.8②1.45③0.4④0.5⑤⑥黒色安山岩	四基無茎式・336
2	J - 1	石鏃	①2.9②1.35③0.5④1.8g⑤131.1g⑥黒色頁岩	不基無茎式・346
3	J - 1	石鏃	①2.9②1.35③0.5④1.4g⑤ほぼ完形⑥黒色頁岩	平基無茎式・2
4	J - 1	石鏃	①2.2②1.85③0.5④1.4g⑤完形⑥チャート	四基無茎式・3
5	J - 1	石鏃	①2.9②1.5③0.45④1.4g⑤完形⑥黒色頁岩	四基無茎式・392
6	J - 1	石鏃	①3.1②1.9③0.5④1.4g⑤完形⑥チャート	四基無茎式・1
7	J - 1	楔形石器	①3.3②2.1③0.9④1.7g⑤完形⑥チャート	綫長の四角形に作られる。・326
8	J - 1	削器	①4.8②4.2③1.0④20g⑤完形⑥黒色頁岩	表面2辺に丁寧な剥離が形成される。・58
9	J - 1	削器	①3.3②4.3③0.9④1.7g⑤完形⑥黒色安山岩	大形の刃部を持ち、裏面は主要剥離面で構成。・22
10	J - 1	石鏃	①6.4②5.1③1.3④2.8g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面の右側縁に大きい剝離の刃部が形成。・263
11	J - 1	削器	①7.3②3.9③1.7④30.6g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面に複数を残し、刃部を形成する。・274
12	J - 1	打製石斧	①6.8②4.2③1.7④63.4g⑤1/20灰色安山岩	刃部は裏面と主要剥離面で構成される。・78
13	J - 1	打製石斧	①6.6②4.3③1.7④49.8g⑤1/20黒色頁岩	表面に複数を残し、刃部は裏面に形成される
14	J - 1	削器	①5.8②3.7③1.2④20.8g⑤完形⑥黒色頁岩	やや彫形をなし、刃部は片刃となる。・340
15	J - 1	打製石斧	①7.7②5.2③1.8④75.4g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面に複数を残し、片刃を形成する。・202
16	J - 1	打製石斧	①10.3②6.0③2.9④192.0g⑤完形⑥灰色安山岩	刃部は裏面と主要剥離面で構成される。・78
17	J - 1	打製石斧	①8.3②6.4③2.8④172.1g⑤完形⑥黒色頁岩	刃部は裏面とともに大きな剥離で片刃構成。・338
18	J - 1	打製石斧	①9.8②6.3③4.8④98.1g⑤完形⑥黒色頁岩	双刃であり裏面に背面を残す。片刃構成。・211
19	J - 1	打製石斧	①10.4②7.1③3.7④380g⑤完形⑥輝緑岩	刃部は数回の剥離によって形成される。・300
20	J - 1	磨石・石臼	①7.3②7.25③0.7④283.8g⑤1/20粗粒輝石安山岩	表裏面とも磨石となる。・270
21	J - 1	磨石	①11.8②8.4③1.8④940.0g⑤1/4粗粒輝石安山岩	火熱によるハシクがみられる。表裏面とも焼っている。・86
22	J - 2	石鏃	①2.4②1.5③0.5④1.4g⑤先端欠損⑥黒色頁岩	四基無茎式
23	J - 2	石鏃	①2.4②0.1④80g⑤0.7④2.8g⑤完形⑥チャート	平基無茎式
24	J - 2	削器	①3.1②2.7③0.6④4.4g⑤完形⑥黒色頁岩	表面に細かな加力が述続してみられる。・205
25	J - 2	削器	①6.0②4.4③1.4④38.2g⑤下端欠損⑥黒色頁岩	丸面右側縁に刃部が形成される。・X29Y124
26	J - 2	打製石斧	①6.1②5.7③1.2④91.4g⑤1/36蛇紋岩	刃部に使用痕が認められる。・X29Y127
27	J - 2	磨石	①6.5②7.7③0.4④197.6g⑤1/20粗粒輝石安山岩	熱による削れを受けている。・X29Y127
28	J - 2	打製石斧	①11.3②8.6③2.0④500g⑤完形⑥ホルンフェルス	厚手であり片刃で構成される。片面裏面とも丁寧な加工が入る。片面裏面とも背面を残す。・X29Y127
29	J - 2	打製石斧	①7.3②4.6③0.6④1.6g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面裏面とも丁寧な加工が入る。片面裏面とも背面を構成。裏面に焼き痕。・X29Y127
30	J - 2	磨石	①6.4②3.4③0.6④58.9g⑤1/4粗粒輝石安山岩	片面に複数を残す。裏面に片刃の刃跡が形成
31	J - 2	打製石斧	①8.0②6.2③0.8④132.3g⑤完形⑥黒色頁岩	下端と右側縁に刃部が形成される。・4
32	J - 3	削器	①6.5②4.3③0.4②9.1g⑤完形⑥黒色頁岩	半円形の刃部を持つ上端に裏面を有する
33	J - 3	石鏃	①3.8②2.3③0.6④4.6g⑤完形⑥黒色頁岩	直角体を意識しながら円柱形に整形される。・1
34	J - 3	石製品	①1.7②1.6③0.4④8.4g⑤完形⑥滑石製品	裏裏面に大きく複数を残して刃部が形成
35	J - 3	打製石斧	①14.9②7.6③0.6④570.0g⑤完形⑥輝緑岩	左側縁に丁寧に加工された刃部が形成される。・9
36	J - 4	削器	①3.5②1.2③0.8④10.6g⑤完形⑥黒色頁岩	・下端に複数を有する。・1
37	J T - 1	敲石	①8.4②6.3③1.6④370.0g⑤完形⑥粗粒輝石安山岩	裏裏面とも剥離により形成される。・1
38	J D - 2	打製石斧	①8.6②6.4③2.6④152.0g⑤完形⑥黒色頁岩	

No.	出土位置	器種	①長さ②幅③厚さ④重さ⑤残存⑥石材名	形状、調製加工の特徴・取上番号
39	表様	上施	⑩4.02②1.73③1.7④1.0⑤△形骨上施	古墳時代は隕のものと思われる。1 点出土。
40	X35-Y125	有舌尖頭器	⑪6.62②1.63③0.8④6.8g⑤△形骨⑥黒色頁岩	舌部下端をむすびに欠損する。表面 とも丁寧な削離
41	X29-Y116	石鎌	⑫4.82②1.32③0.9④0.8g⑤△形⑥チャート	四基無事式。表面に縦面を残す
42	表様	石鎌	⑬2.02②1.3③0.5④0.9g⑤△形⑥チャート	四基無事式
43	X31-Y117	石鎌	⑭2.05②1.2③0.5④0.8g⑤△形⑥チャート	四基無事式
44	X28-Y129	石鎌	⑮1.85②1.75③0.5④0.6g⑤△形骨欠損⑥チャート	平基無事式
45	X35-Y118	石鎌	⑯2.05②1.3③0.6④0.9g⑤△形⑥チャート	平基無事式。裏面に虧状に未削離面 を残す
46	X31-Y127	石鎌	⑰1.88②1.22③0.7④0.7g⑤△形骨⑥黒色頁岩	四基無事式。向みがややねによる 削離無事式。身部は福広となる
47	X36-Y125	石鎌	⑱2.02②1.45③0.4④0.8g⑤△形⑥チャート	四基無事式。身部は細味で直線的で ある
48	X36-Y120	石鎌	⑲2.25②1.2③0.4④0.7g⑤△形欠損⑥チャート	四基無事式。身部を有する
49	X26-Y128	石鎌	⑳2.1②1.85③0.4④1.1g⑤△形骨欠損⑥チャート	四基無事式。福広の身部を有する
50	表様	心匙	㉑2.02②1.65③0.38④0.8g⑤△形骨⑥黒色頁岩	四基無事式。わたぐりの深い基部を 有する
51	X30-Y115	石鎌	㉒1.92②1.3③0.45④0.7g⑤△形⑥チャート	四基無事式。平基に近い基部
52	X35-Y119	石鎌	㉓1.2②1.4③0.5④1.0g⑤△形骨欠損⑥黒色安山岩	四基無事式。身部は直線的に構成さ れる
53	X31-Y115	石鎌	㉔2.1②1.93③0.8④2.9g⑤△形⑥チャート	円基鎌。身部は厚手である
54	X40-Y122	石鎌	㉕2.65②1.85③0.55④2.0g⑤△形骨欠損⑥チャート	四基無事式
55	X25-Y119	石鎌	㉖2.5②1.77③0.47④1.9g⑤△形⑥チャート	平基無事式。裏面裏面とも丁寧な削離 で形成される
56	X29-Y117	石鎌	㉗3.4②2.05③0.42④1.9g⑤△形骨⑥黒色安山岩	四基無事式。深いたぐりの基部を 有する
57	X34-Y118	石鎌	㉘3.6.8②2.5③1.1④10.0g⑤△形⑥チャート	縱形の石鎌。表面に細かな削離が入 る
58	X31-T115	ノノ	㉙3.3②3.8③0.6④7.0g⑤△形骨斜拉鎌⑥黒色安山岩	横形の石鎌。表面全体と裏面裏面に 丁寧な削離が入る
59	X28-Y128	石鎌	㉚3.6.3②1.4③1.1④2.1g⑤△形⑥黒色頁岩	縱形の石鎌。裏面裏面とも両刃切口が わずかにみられる
60	X29-Y115	石鎌	㉛3.6.8②4.2③1.0④14.7g⑤△形骨⑥黒色頁岩	横形の石鎌。熱によりハシケが苦し い
61	X28-Y129	削器	㉜4.3②1.7③0.6④6.5g⑤△形⑥黒色頁岩	右側縁に丁寧な削離で刀部が形成さ れる
62	X34-Y125	石鎌	㉝3.8.5②3.0③0.8④15.2g⑤△形骨欠損⑥黒色安山岩	横形の石鎌。裏面裏面ともわずかに凹 刃切口で後形され
63	X34-Y119	石鎌	㉞4.1②6.9③0.7④20.7g⑤△形骨⑥黒色頁岩	横形の心匙。熱により裏面が大きくな る
64	X26-Y122	石鎌	㉟6.7②5.0③0.8④26.6g⑤△形⑥黒色頁岩	横形の石鎌。つまみの形成は不明瞭 である
65	X28-Y129	削器	㉛3.2②4.5③1.0④11.0g⑤△形⑥黒色頁岩	石鎌状。下端に加工が入る
66	X35-Y119	削器	㉜4.0②2.6③0.6④8.0⑤△形骨⑥黒色頁岩	右側縁に削離がなされる
67	表様	削器	㉝4.9②5.3③1.6④9.0g⑤△形骨⑥黒色頁岩	裏面に縦面を残す。裏面の両側縁に 削離加工
68	X35-Y118	石鎌	㉞6.7②3.5③0.6④9.0⑤△形⑥黒色頁岩	「」・下端端に刀部が形成される
69	X36-Y120	削器	㉟7.7②4.2③1.0④45.4g⑤△形⑥黒色頁岩	裏面右側縁に刀部が形成される
70	X31-Y117	削器	㉛9.2②5.3③1.4④49.1.2g⑤△形骨⑥黒色頁岩	裏面右側縁に刀部が形成される
71	X26-Y127	削器	㉜1.8.0②6.1③1.4④67.5g⑤△形⑥砂岩	裏面に大きく述べて有し。裏面右側 縁に刀部が形成される
72	X33-Y120	削器	㉝1.6.3②6.2③1.2④45.5g⑤△形⑥黒色頁岩	裏面下端に刀部が形成される
73	X30-Y115	削器	㉞1.7.7②4.0③1.6④44.7g⑤△形⑥砂岩	下端に刀部が形成され、裏面は縦面 を残す
74	X30-Y114	楔形石器	㉟1.6.15②21.75③1.05④5.1g⑤△形⑥チャート	楔形、四角形に形成される
75	X28-Y129	楔形石器	㉛2.8②1.0③1.1④6.1g⑤△形⑥チャート	楔形、裏面は主要側面で構成され る
76	X31-Y115	楔形石器	㉜3.12②5.5③1.0④6.0⑤△形⑥チャート	楕円形である
77	X34-Y120	楔形石器	㉝3.0②2.6③0.6④5.2g⑤△形⑥チャート	楔形、四角形に作られる
78	X34-Y121	楔形石器	㉞3.1②1.8③0.9④4.6g⑤△形⑥チャート	段長の楕円形で表面には主要側面 を大きく残す
79	表様	楔形石器	㉟3.9②2.6③0.6④5.7g⑤△形⑥チャート	段長で台形状をなす。裏面裏面とも縦 面を残す

No	出土位置	器種	①長さ②幅③厚さ④重さ⑤残存⑥石材名	形状、調査加工の特徴・取上番号
80	X31-Y117	打製石斧	①6.5②4.5③1.3④51.2g⑤1/2⑥黑色頁岩	裏面に縦面を大きく残し、刃部は表面の溝槽によって形成される
81	X29-Y115	打製石斧	①6.9②4.0③2.5④82.0g⑤2/3⑥砂岩	「端を欠損する。表面に刻磨が集中し片刃である」
82	X35-Y125	打製石斧	①8.4②4.7③1.9④90.0g⑤完形⑥黑色頁岩	裏面に縦面を大きく残す。片刃底座の刃部
83	X30-Y115	打製石斧	①7.9②5.0③1.8④66.8g⑤完形⑥黑色頁岩	表面面とも刻磨がなされるが、刃部は複数の溝槽で形成
84	X36-Y126	打製石斧	①9.3②5.0③1.8④79.7g⑤完形⑥黑色頁岩	表面に熱によるハジケが入る。刃部は片刃構成
85	X31-Y117	打製石斧	①8.2②4.7③1.5④59.2g⑤完形⑥黑色頁岩	裏面に大きく述べて刻磨を残す。刃部は表面から片刃で形成
86	X34-Y118	打製石斧	①7.3②4.7③1.7④63.7g⑤完形⑥黑色頁岩	裏面から刃部が作川され刃構成となる
87	X30-Y118	打製石斧	①8.4②6.0③2.5④147.7g⑤完形⑥黑色頁岩	裏面に大きく述べて刻磨を残す表面から熱筋の刃部が形成される
88	X29-Y115	打製石斧	①7.2②4.2③1.8④34.4g⑤2/3⑥黑色頁岩	裏面は主要刻磨面で構成される。刃部は表面から片刃が形成される
89	X30-Y118	打製石斧	①9.6②4.7③0.0④133.1g⑤1/4⑥黑色頁岩	筋理により右側面を欠損する。刃部は表面から形成される
90	X30-Y126	打製石斧	①8.0②5.0③1.4④56.1g⑤完形⑥黑色頁岩	底座の4.8cm。表面面とも丁寧な加工が施される
91	X30-Y115	打製石斧	①6.3②4.0③1.3④39.0g⑤完形⑥黑色頁岩	裏面に縦面を残す。表面の周囲に加工が入る
92	X29-Y117	打製石斧	①7.8②4.9③2.4④162.5g⑤完形⑥黑色頁岩	表面に丁寧な加工が入る。刃部は片刃無
93	X31-Y129	打製石斧	①8.3②4.9③2.1④69.8g⑤完形⑥黑色頁岩	刃部は主要刻磨面と底面によって構成される
94	X31-Y114	打製石斧	①6.8②4.8③1.5④62.7g⑤2/3⑥黑色頁岩	表面面とも周囲からの剥離によって形成される
95	X36-Y120	三角錐形石器	①11.2②6.0③0.3④7.1g⑤完形⑥柱頁岩	表面面とも縦面を大きく残している。四角錐形に作られる
96	X31-Y114	打製石斧	①5.9②5.6③0.3④54.0g⑤1/2⑥黑色頁岩	上下端とも欠損している
97	X35-Y125	打製石斧	①4.9②4.1③0.1④24.0g⑤1/3⑥細粒輝石安山岩	刃部を欠損している
98	X28-Y125	打製石斧	①13.8②6.3③0.6④350g⑤完形⑥黑色頁岩	刃部は縦面と大削離面で構成される
99	X34-Y126	打製石斧	①15.2②8.0③4.0④720g⑤完形⑥黑色頁岩	裏面に縦面を残す。刃部は大削離面で構成される
100	X26-Y117	打製石斧	①9.8②8.7③3.4④310g⑤1/2⑥黑色頁岩	上端を欠損する。刃部は片刃となる
101	X32-Y121	打製石斧	①17.2②4.8③3.0④253.2g⑤完形⑥黑色頁岩	表面に丁寧な加工が入る。刃部は片刃
102	X26-Y117	打製石斧	①11.1②6.3③0.1④460g⑤完形⑥ホルンフェルス	縦面を残す。表面から片刃の刃部が形成される
103	X37-Y119	打製石斧	①6.4②5.6③0.2④114.0g⑤1/2⑥黑色頁岩	刃部と基部を欠損する
104	X35-Y118	打製石斧	①6.0②5.6③0.2④88.1g⑤1/2⑥黑色頁岩	底部を欠損。刃部は片刃である
105	X37-Y119	打製石斧	①11.6②7.9③1.5④229.5g⑤完形⑥ホルンフェルス	分離形石斧。表面に縦面を大きく残す。
106	X33-Y124	圓石	①9.7②7.0③3.5④260.0g⑤0.0⑥角閃石安山岩	引き抜きの跡から底面の使用痕を残す
107	X27-Y128	磨石	①10.2②9.9③3.6④540.0g⑤0.0⑥粗粒輝石安山岩	両面とも使用
108	X32-Y127	磨石・節石	①10.3②8.1③0.9④610.0g⑤0.0⑥粗粒輝石安山岩	表面のみ回石として使用
109	X27-Y114	圓石	①9.9②7.9③3.6④550.0g⑤0.0⑥粗粒輝石安山岩	表面のみ回石として使用
110	X28-Y129	圓石	①11.6②8.0③4.0④520.0g⑤0.0⑥粗粒輝石安山岩	上端に離き痕が認められる
111	X24-Y127	圓石	⑨.6②8.4③5.6④370.0g⑤0.0⑥粗粒輝石安山岩	表面面とも回石として使用
112	X29-Y117	磨石・節石	⑩.0②7.3③3.5④300g⑤0.0⑥粗粒輝石安山岩	表面を研用
113	表様	磨石	⑪.1②29.6③3.0④490.0g⑤0.0⑥粗粒輝石安山岩	両面とも使用
114	X30-Y115	磨石	⑫.0②18.9③2.9④3870.0g⑤0.0⑥粗粒輝石安山岩	両面とも使用
115	X27-Y112	敲石	⑬.0②29.8③6.1④1830g⑤0.0⑥粗粒輝石安山岩	下端に大きな離き痕を有する

Tab. 7 古墳時代遺物觀察表

番号	出土 位臯	器 形	大きさ 口径 極高	①輪粒②良好③橙④保存	器形、製作技術の特徴	登録 番号	備考
1	H-3	碗	12.3 6.4	①輪粒②良好③橙④光形	外面磨き、底部付近はナデ。内山彫き。	6	
2	H-4	小鏡	[8.1] (6.4)	①輪粒②良好③にぶい赤褐色④1/4	外面横ナデ、ナデ。内面 横ナデ、ナデ。		
3	H-4	鏡	[14.8] (5.3)	①輪粒②良好③橙④口縁部	外表面状況。内面磨き。	18	博式系
4	H-4	鏡	[15.3] (4.4)	①輪粒②良好③黄褐色④口縁部	外表面状況。内面ナデ。	79ほか	
5	H-5	杯	12.2 6.1	①輪粒②良好③橙④ほぼ完形	外表面ナデ、底削り。内 面磨ナデ、暗文。	36	
6	H-5	高杯	[12.4] 11.1	①輪粒②良好③黄褐色④2/3	外表面横ナデ、底削り。内 面磨ナデ、ナデ。	48	
7	H-5	甕	14.2 23.1	①中粒②良好③橙④光形	外表面ナデ、底も日後ナ デ、底削り。内面横ナデ、ナ デ。	21	
8	H-5	甕	14.6 27.0	①中粒②良好③浅黃褐色④ほぼ完形	外表面横ナデ、刷毛口後 ナデ。底削り。内面ナデ、横ナ デ。	47	
9	H-5	甕	[15.4] (23.3)	①中粒②良好③橙④2/3	外表面横ナデ、刷毛口後、 ナデ。底削り。内面横ナデ、ナ デ。	23	
10	H-5	杯	14.2 6.2	①輪粒②良好③橙④光形	外表面横ナデ、底削り。内 面横ナデ、ナデ。	25	
11	H-5	杯	12.8 5.9	①輪粒②良好③橙④光形	外表面横ナデ、底削り。内 面横ナデ、ナデ。	45	
12	H-5	杯	10.7 5.5	①輪粒②良好③橙④光形	外表面横ナデ、底削り。内 面横ナデ、ナデ。	50	
13	H-5	杯	12.3 5.3	①輪粒②良好③橙④光形	外表面横ナデ、底削り。内 面横ナデ、出突、底の あつた跡あり。	27	
14	H-5	杯	[13.5] 5.8	①輪粒②良好③橙④ほぼ完形	外表面横ナデ、底削り。内 面横ナデ、ナデ。	24	
15	H-5	杯	12.2 5.2	①輪粒②良好③橙④ほぼ光形	外表面横ナデ、底削り。内 面横ナデ、ナデ。	41	
16	H-5	甕	14.0 13.7	①中粒②良好③明黄褐色④光形	外表面横ナデ、刷毛口後、 底削り。内面横ナデ、ナ デ。	24	
17	H-5	甕	19.3 23.2	①輪粒②良好③浅黃褐色④光形	外表面横ナデ、底も日後 ナデと擦削り。内面横ナ デ、ナデ。	22	
18	H-5	甕	15.2 28.8	①中粒②良好③浅黃褐色④完形	外表面横ナデ、刷毛口後、 ナデ、一帯擦削り。内面 横ナデ、ナデ。	1b	
19	H-5	甕	15.2 (23.9)	①中粒②良好③橙④1/2	外表面横ナデ、刷毛口、ナ デ。底削り。内面横ナ デ、ナデ。	19ほか	
20	H-5	杯	[14.4] 6.5	①輪粒②良好③橙④ほぼ完形	外表面横ナデ、底削り。内 面横ナデ、ナデ。	28	
21	H-5	碗	12.68.7	①輪粒②良好③橙④ほぼ光形	外表面横ナデ、底削り。内 面横ナデ、ナデ。	17	
22	H-5	碗	11.35.0	①輪粒②良好③橙④光形	外表面横ナデ、底削り。内 面横方向のナデ。	49	
23	H-5	杯	[13.2] 6.6	①輪粒②良好③橙④3/5	外表面横ナデ、底削り。内 面横ナデ、ナデ。底の端 が高たって時あり。	14	
24	H-5	甕	15.4 26.5	①中粒②良好③にぶい黄褐色④ほぼ完形	外表面横ナデ、刷毛口、底 削り。内面横ナデ、ナ デ。	46ほか	
25	H-5	甕	16.2 (20.0)	①中粒②良好③黄褐色④1/2	外表面横ナデ、刷毛口後 ナデ、底部付近は擦削 り。内面横ナデ、刷毛 口。	18ほか	
26	H-5	甕	(9.9) 6.2	①中粒②良好③橙④底部	外表面削りの後、ナデ。 内面、ナデ。	29ほか	

番号	出土位置	器種	大きさ 口径・器高	①紺土②焼成③色調心焼存	器形・製作技法の特徴	登錄 番号	備考
27	H-5	器台	[16.6] (6.7)	①紺土②焼成③色調心焼存	外面磨き、赤色塗装。内面副毛目後、ナデ、横ナデ。	31ほか	赤色塗影
28	H-5	台付甕	11.7(15.0)	①中粒②良好③橙・黒褐④3/4	外面凸峰～肩部は波状文、底部はナデ。内ナデ。	1	
29	H-7	小甕	[11.0] (5.8)	①中粒②良好③橙④口縁	外山積ナデ、窓削り。内面横ナデ、ナデ。	41ほか	
30	H-7	甕	-(8.1)	①中粒②良好③橙④底部	外面窓削り。内面ナデ。	31ほか	
31	H-7	甕	(10.9) 8.4	①中粒②良好③橙④底部	外面窓削り。内面ナデ。	7	
32	H-4	砥石	5.0×3.5×3.1cm 石56.7g 上部欠損	4面使用であるが底面なし	54		
33	H-6	砥石	7.8×6.0×6.1cm 石113.1g 完形	4面使用。磨った面と窓削り	26		
34	H-5	支柱石	23.5×15.0×18.5cm 粗粒輝石安山岩の角棒				電
35	H-5	左袖石	29.5×15.5×6.5cm 粗粒輝石安山岩の角棒				電
36	H-6	右袖石	29.5×19.5×10.5cm 粗粒輝石安山岩の角棒				電
37	H-6	天井石	44.5×26.5×12.0cm 粗粒輝石安山岩の角棒				電
38	H-7	天井石	42.0×28.0×9.0cm 粗粒輝石安山岩の角棒				電
39	H-7	左袖石	37.0×21.0×15.5cm 粗粒輝石安山岩の角棒				電
40	H-7	右袖石	25.5×20.0×12.5cm 粗粒輝石安山岩の円錐				電

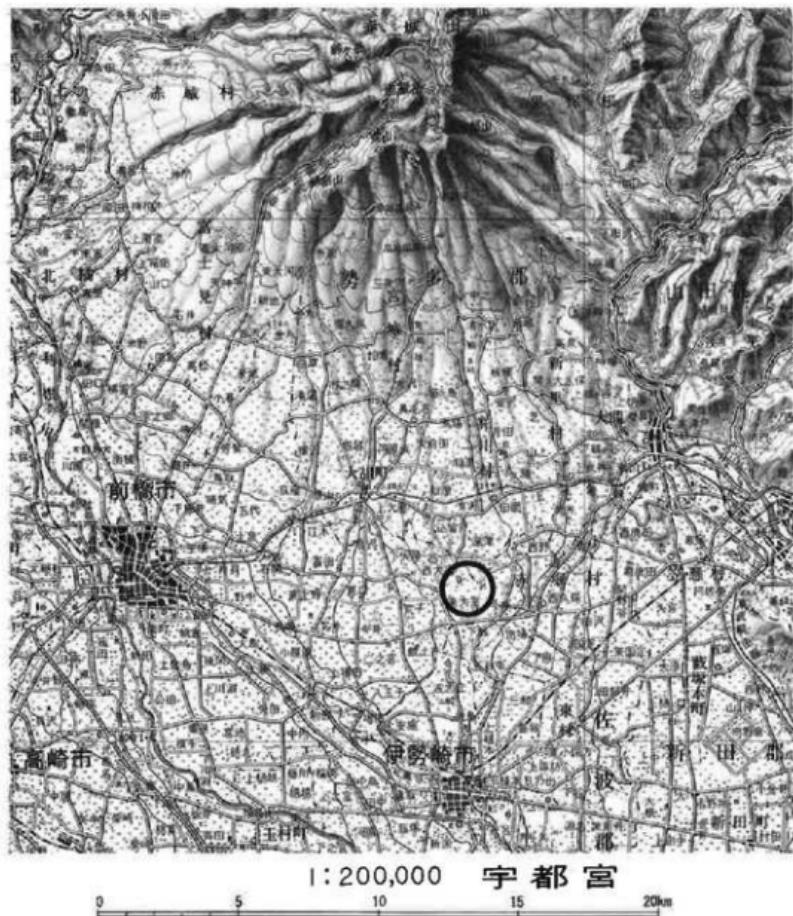


Fig. 1 内堀遺跡群の位置



Fig. 2 内堀道路群位置図

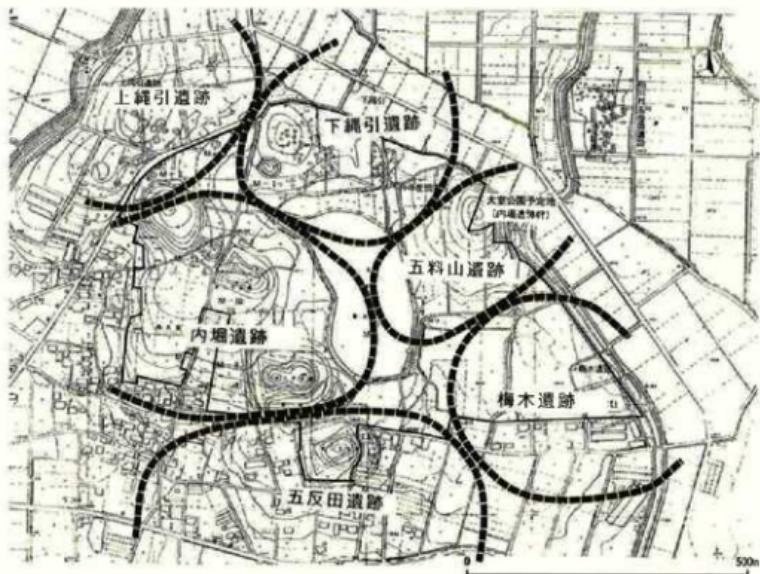


Fig. 3 内堀遺跡群の遺跡一覧図

Tab. 8 内堀遺跡群の発掘調査一覧

年次	年度	報告書名 (遺跡コード)	区域	調査区	遺跡名	主な遺構	面積 (m ²)	担当	国史跡調査 (遺跡コード)
1	昭和62 (1987)	内堀遺跡群 (62E-11)	公利企成の 試掘調査		「下縄引遺跡 下縄引II遺跡 内堀遺跡 五料山遺跡 五反田遺跡 梅木遺跡」	遺跡範囲確認	200,000	桑原 直浦	
2	昭和63 (1988)	内堀遺跡群 II (63E-11)	風のわたら丘		下縄引II遺跡	住居19・古墳1	10,000	園部 加部	
3	平成元 (1989)	内堀遺跡群Ⅲ (1E-11)	風のわたら丘 北側駐車場		下縄引II遺跡 「上縄引遺跡 内堀遺跡 内堀遺跡 内堀遺跡」	住居15 古墳1・石棚1	12,600	園部 鈴木	
4	平成2 (1990)	内堀遺跡群IV (2E-11)	風のわたら丘		下縄引II遺跡	住居37	11,500	伊藤	
5	平成3 (1991)	内堀遺跡群V (3E-11)	北側駐車場		上縄引遺跡 内堀遺跡	周溝基2 炭窯1	4,000	南原 伊藤	後二子古墳 (3E-11 M-10)
6	平成4 (1992)	内堀遺跡群V (4E-11)	北側駐車場 管理用道路		「下縄引遺跡 内堀遺跡 内堀遺跡」	古墳2・石棚1 炭窯1 炭窯1	9,400	南原 伊藤 戸所	前二子古墳 (4E-11 M-8)
7	平成5 (1993)	内堀遺跡群VI (5E-11)	風のわたら丘		下縄引II遺跡	住居44	3,130	前原 戸所	中二子古墳(1) (5E-11 M-9)
8	平成6 (1994)	内堀遺跡群VII (6E-11)	風のわたら丘		下縄引II遺跡	住居11	1,200	前原 戸所	小二子古墳(2) (6E-11 M-9)
9	平成7 (1995)	内堀遺跡群VIII (7E-11)	国家渋滞予定地 竹林ターブル	A区 H区	内堀遺跡 内堀遺跡	臼石器・住居4 住居9	3,400	前原 新井	小二子古墳(1) (7E-11 M-11)



Fig. 4 内堀遺跡群周辺図 (1)



Fig. 5 内柵遺跡群周辺図 (2)

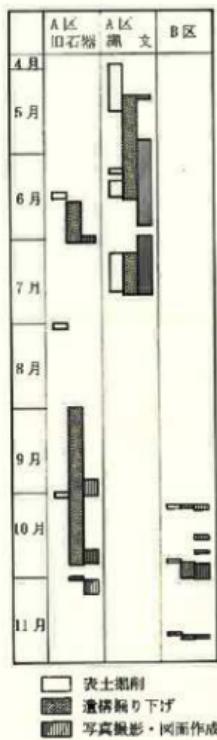


Fig. 6 平成7年度調査経過図

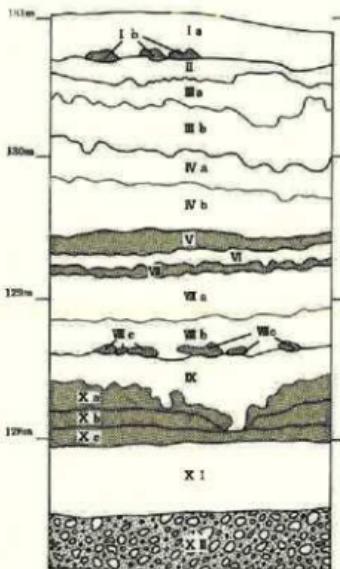


Fig. 7 内堀遺跡群標準十層図

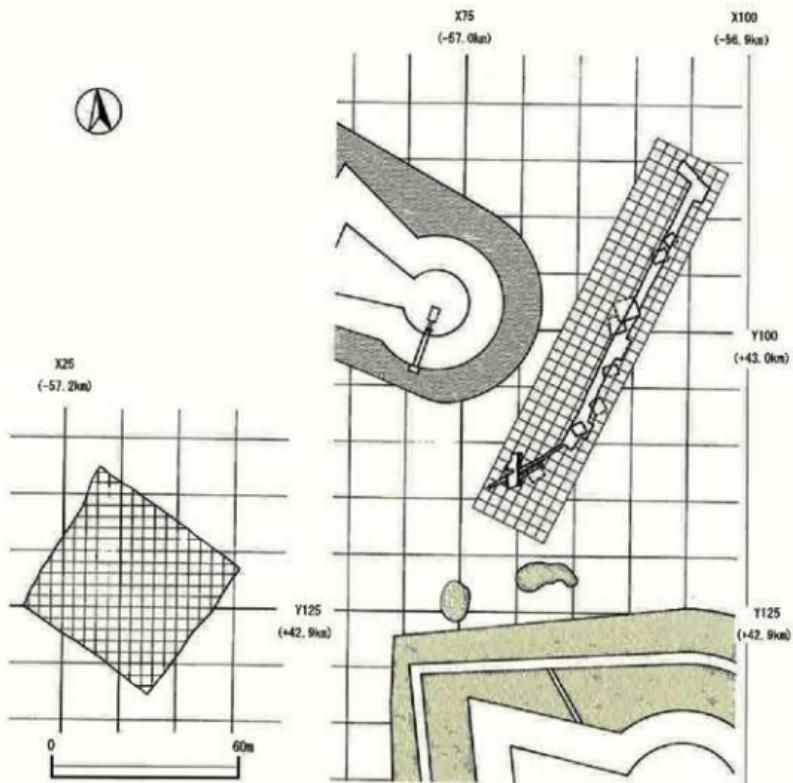


Fig. 8 平成7年度調査区設定図

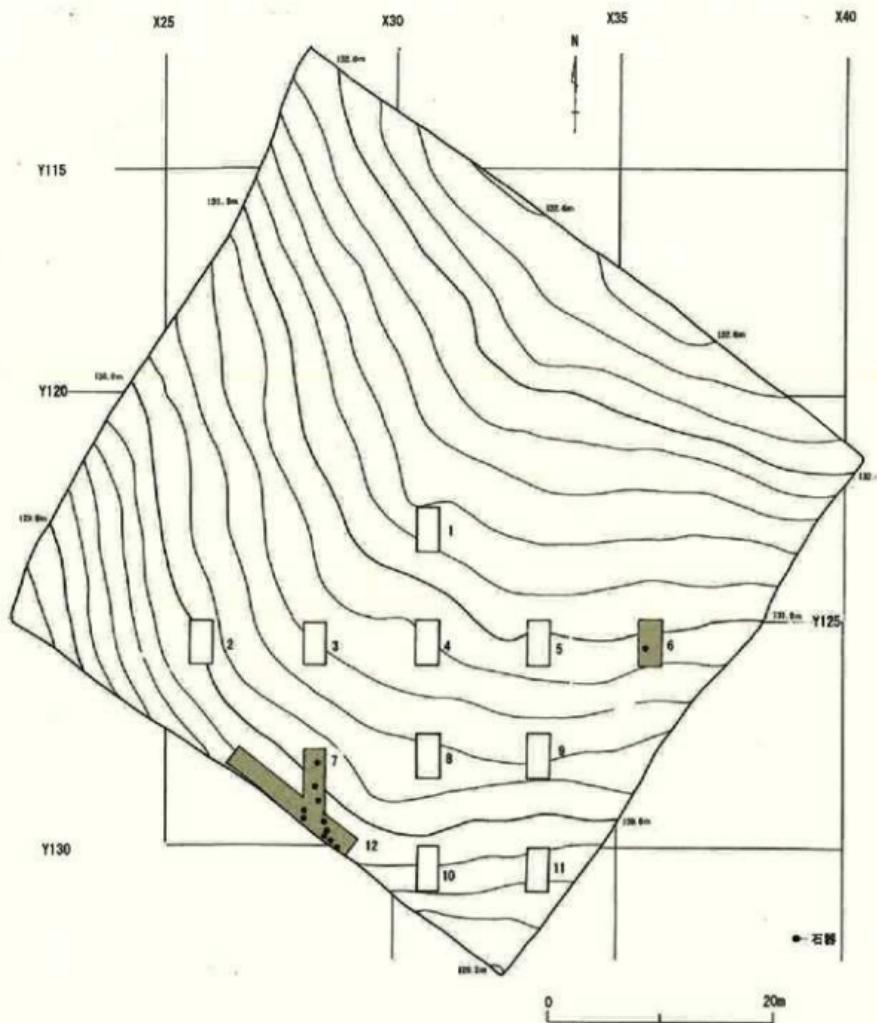


Fig. 9 A区旧石器試掘トレンチ図

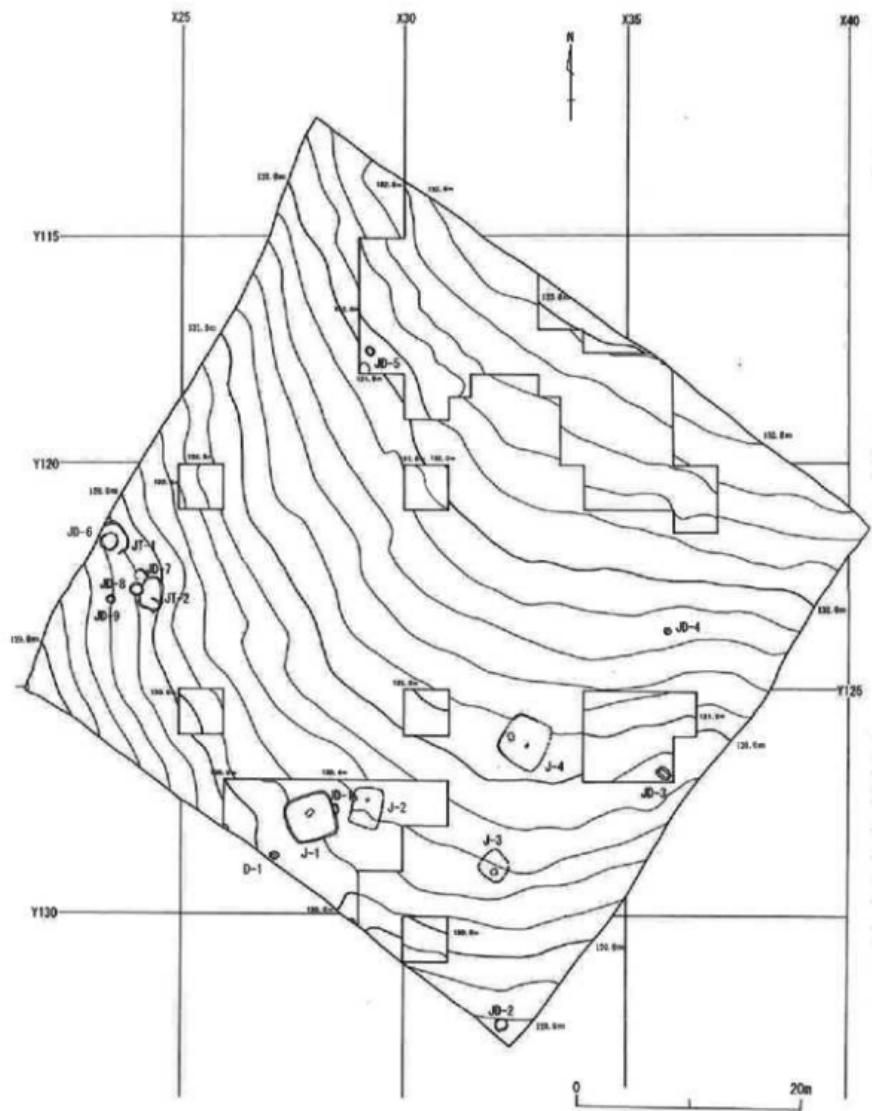


Fig. 10 A区縄文時代遺構全体図

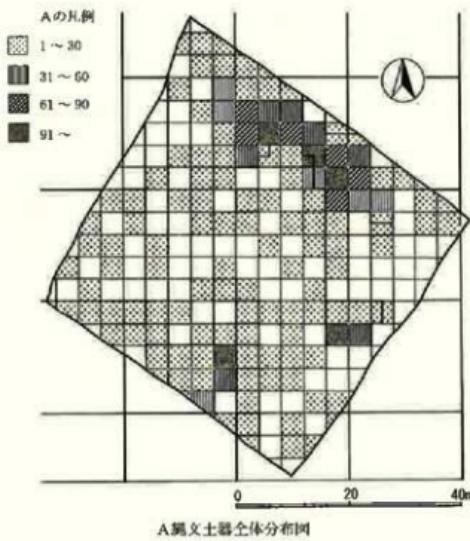
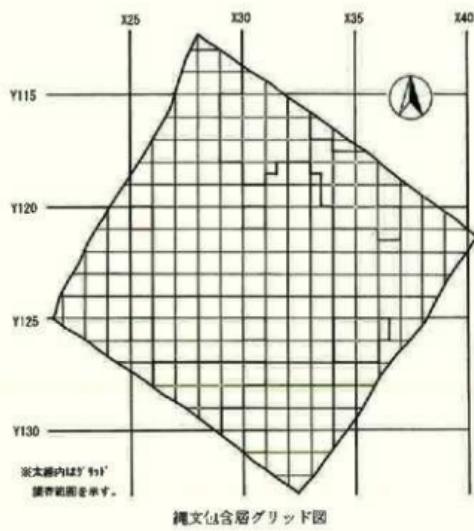


Fig. 11 A区縄文包含層遺物分布図 (1)

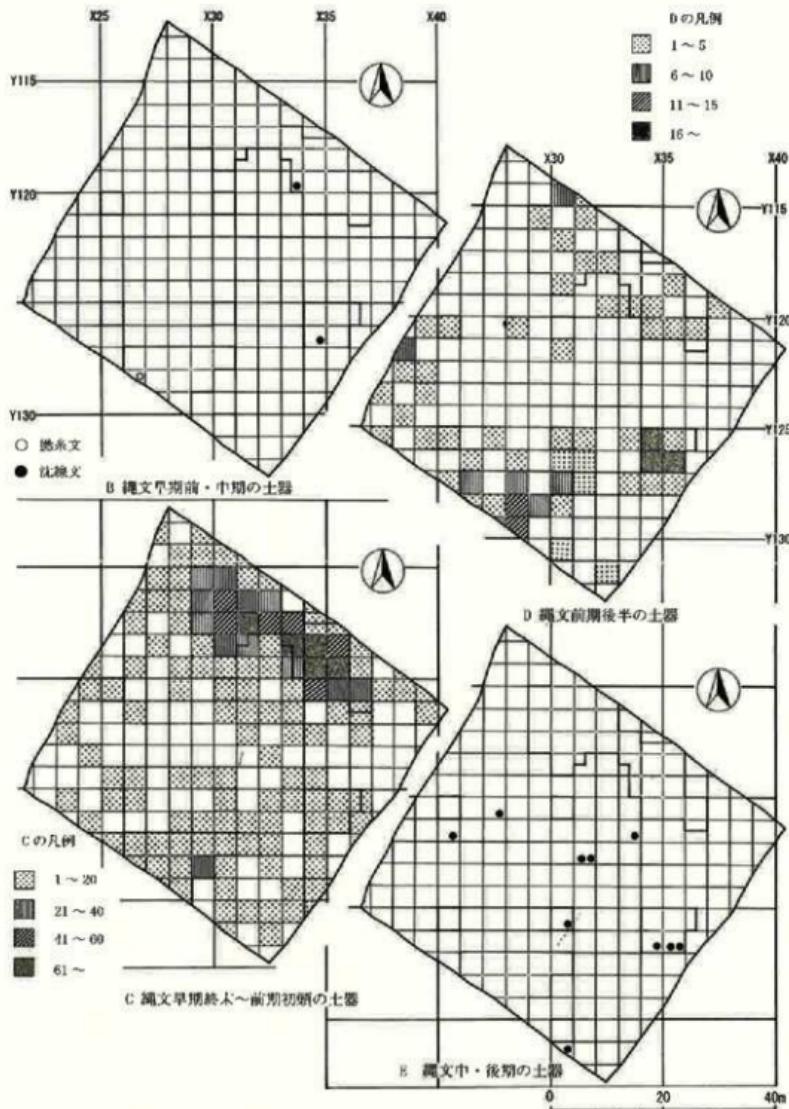


Fig. 12 A区縄文包含層遺物分布図 (2)

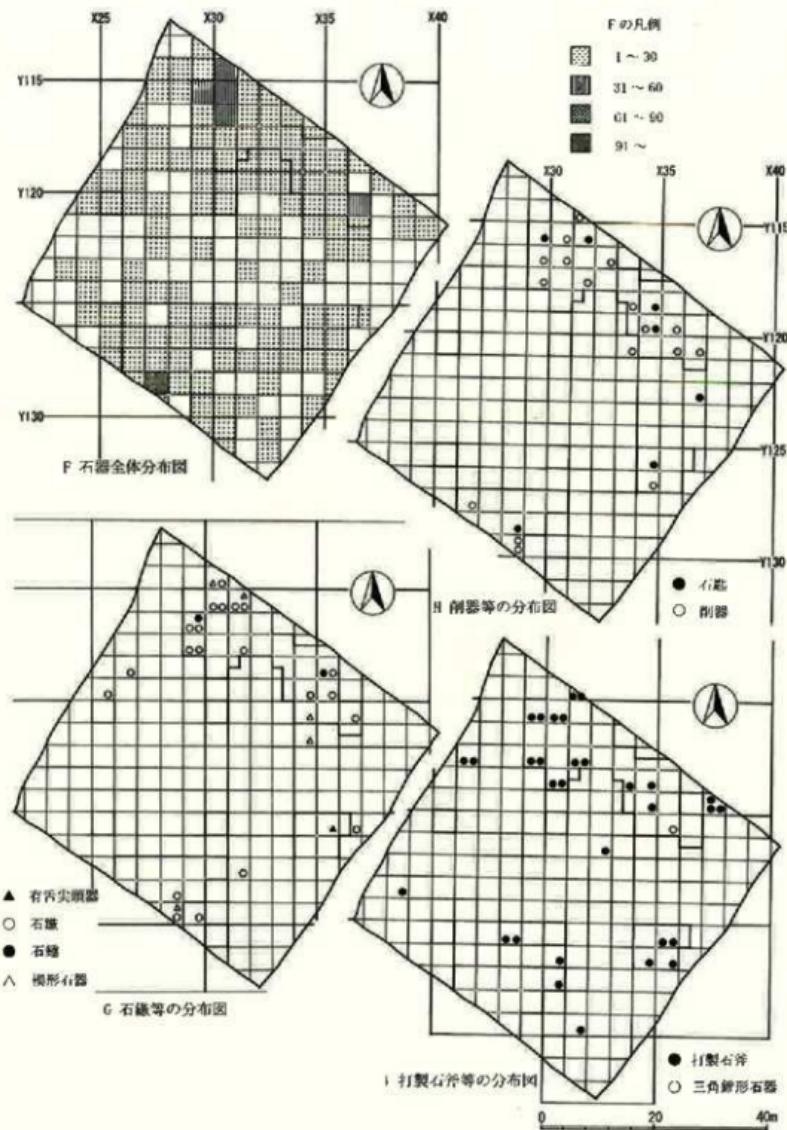


Fig. 13 A区縄文包含層遺物分布図(3)

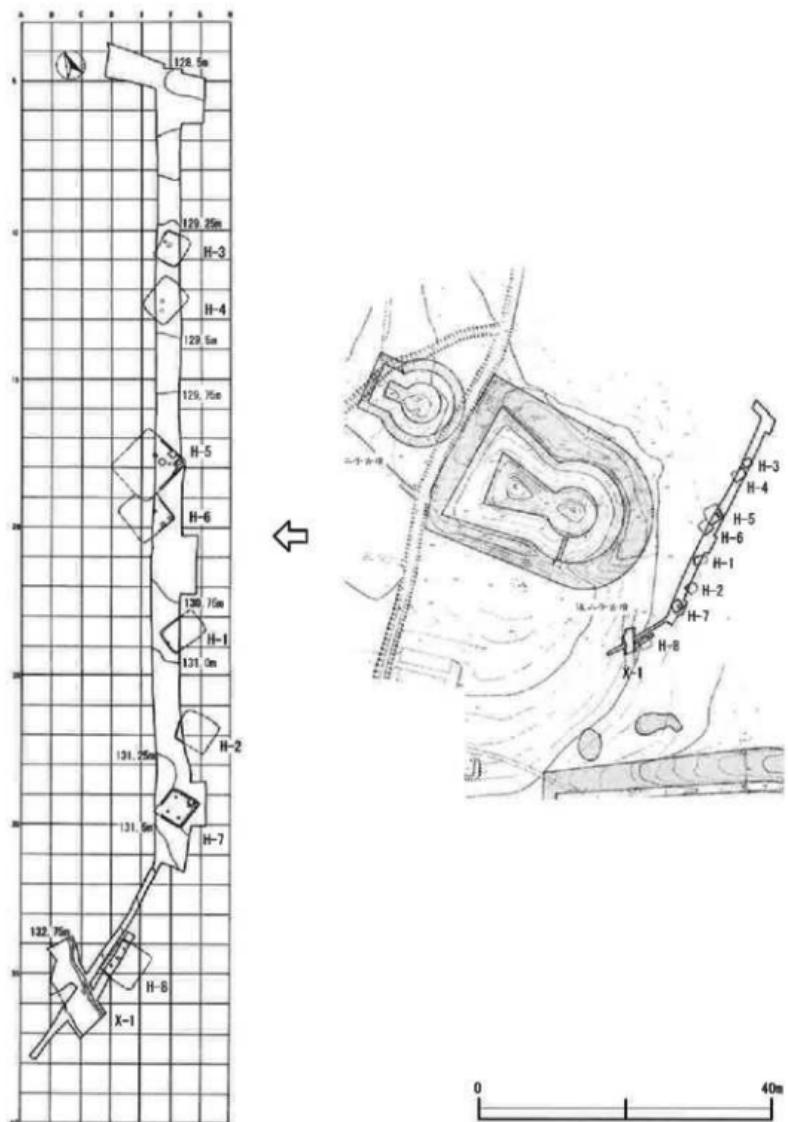


Fig. 14 BKC構造全体図

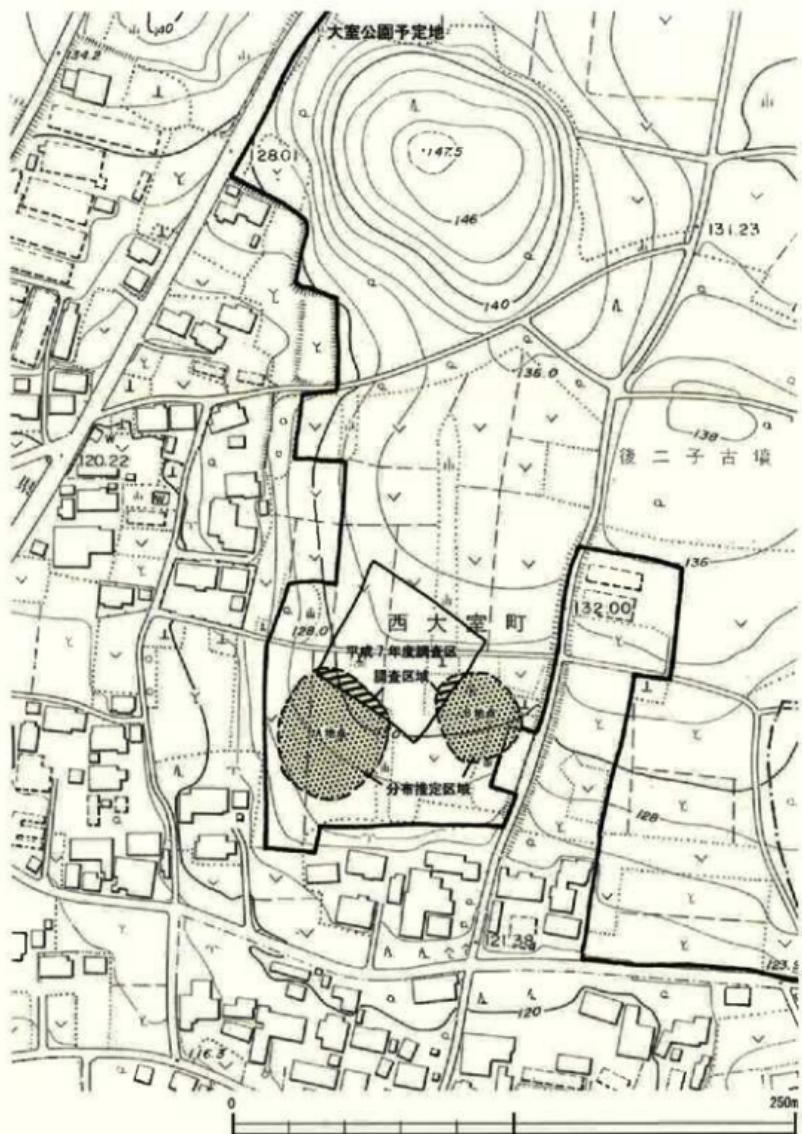


Fig. 15 A区における石器文化層の推定範囲

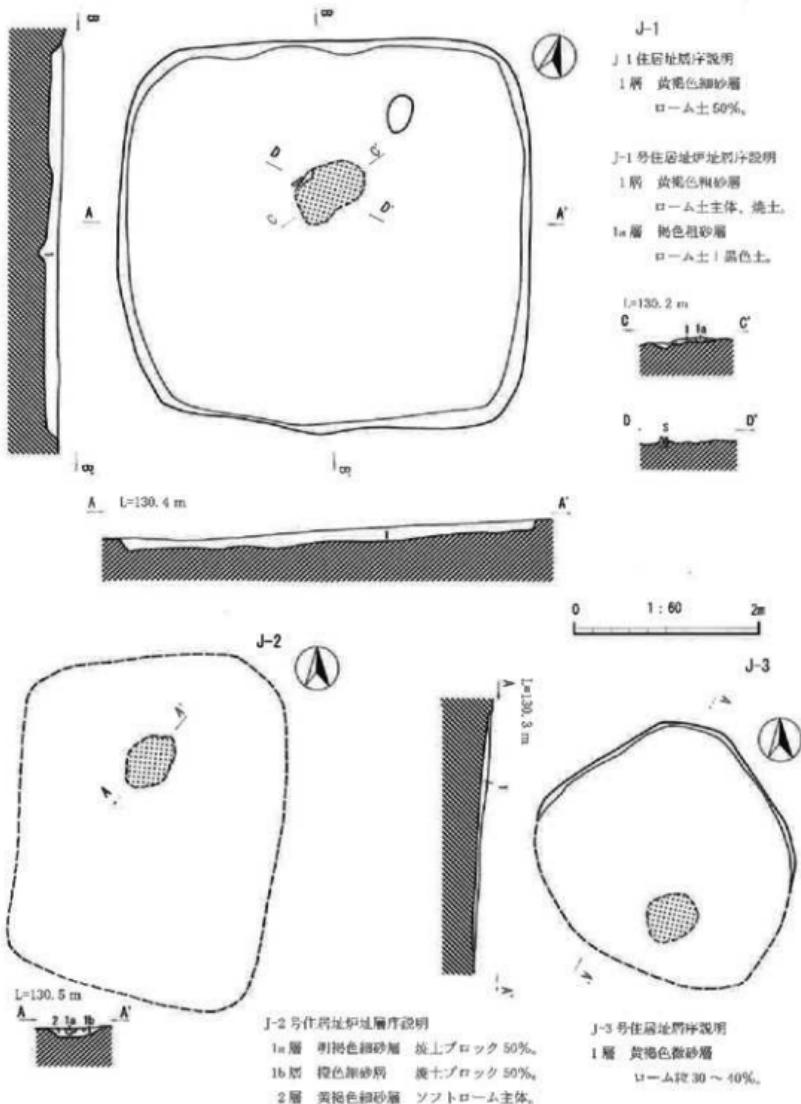


Fig. 16 A区J-1~3号住居址

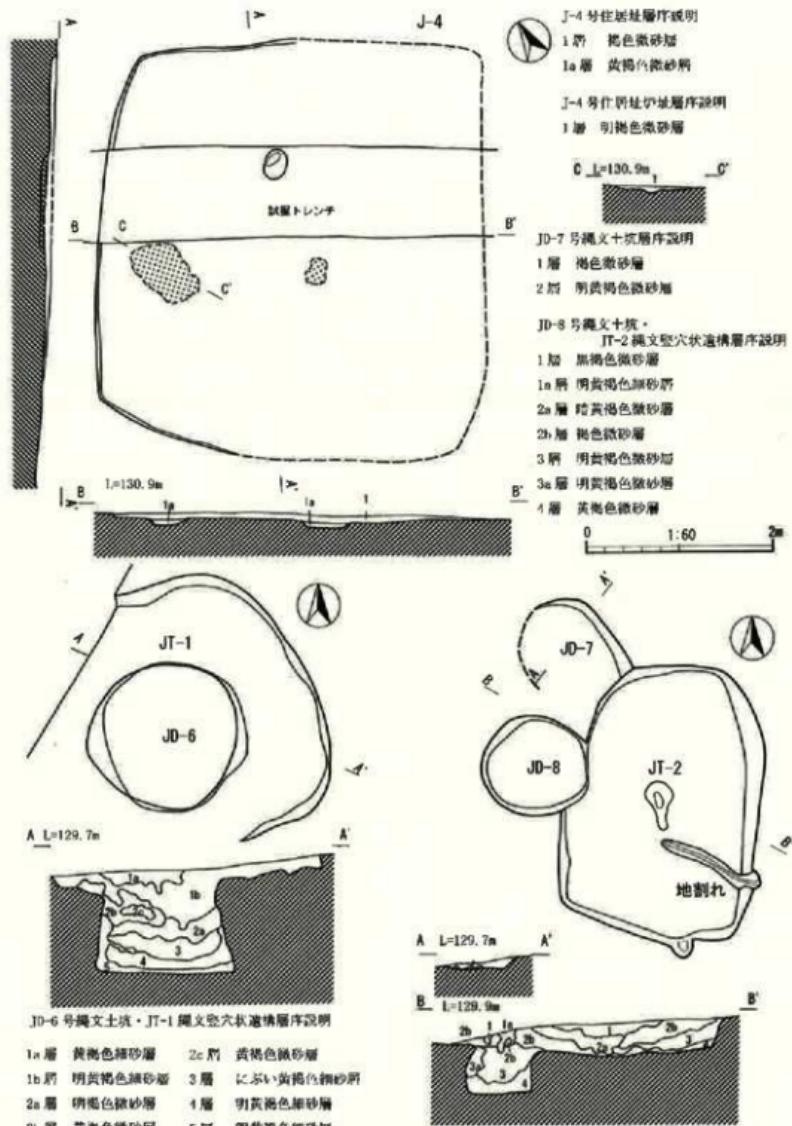
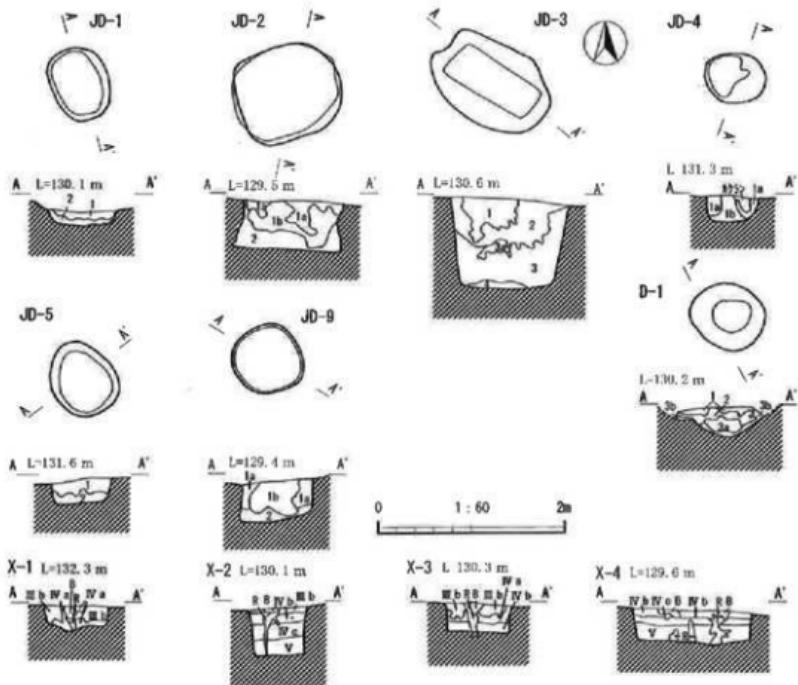


Fig. 17 A区 J-4、JT-1・2、縄文土坑



JD-1 号縄文土坑層序説明

- 1層 暗褐色細砂層 岩化物をかなり含む。
- 2層 黄褐色細砂層

JD-2 号縄文土坑層序説明

- 1a層 黄褐色微砂層 ローム土 30%~40%。
- 1b層 明褐色微砂層 ローム土と黑色土の互層。

JD-3 号縄文土坑層序説明

- 1層 黒色微砂層 ローム粒子 7~10%。
- 2層 黑褐色細砂層 ローム粒子 15~20%。
- 3層 黄褐色微砂層 ローム粒子 30~40%。
- 4層 明褐色微砂層 ローム粒子 60~70%。
- 5層 黃褐色微砂層 ローム粒子 70%~80%。

JD-4 号縄文土坑層序説明

- 1a層 黄褐色微砂層 ローム質 30%~40%。
- 1b層 明褐色微砂層 ローム土と黒色土の互層。

JD-5 号縄文土坑層序説明

- 1層 黒色多砂層 ローム粒子 15~30%。
- 2層 黄褐色微砂層 ローム粒子 20~30%。

JD-6 号縄文土坑層序説明

- 1a層 黄褐色微砂層 ローム土 20~30%。
- 1b層 黄褐色微砂層 ローム粒子 5~10%。
- 2層 明褐色微砂層 ローム粒子 30~40%。

D-1 号坑層序説明

- 1層 にぶい黄褐色細砂層 表土。
- 2層 黑褐色細砂層 As-Cを含む黑炭。
- 3a層 褐色細砂層 ローム土 50~60%。
- 3b層 黄褐色細砂層 ローム土主体。

X-1 ~ 4 層序説明

- B層 黒色土
- R層 ローム土

Fig. 18 A区縄文土坑、土坑、地割れ

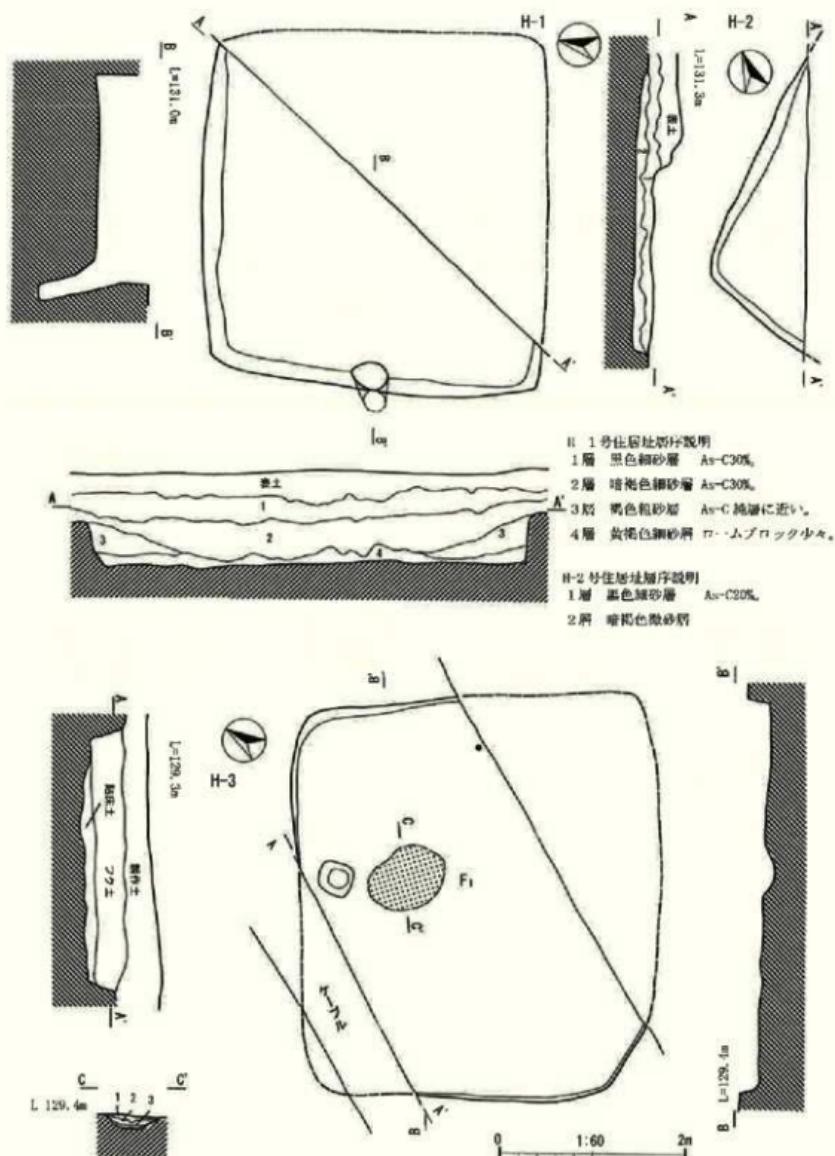


Fig. 19 B区H-1～3号住居址

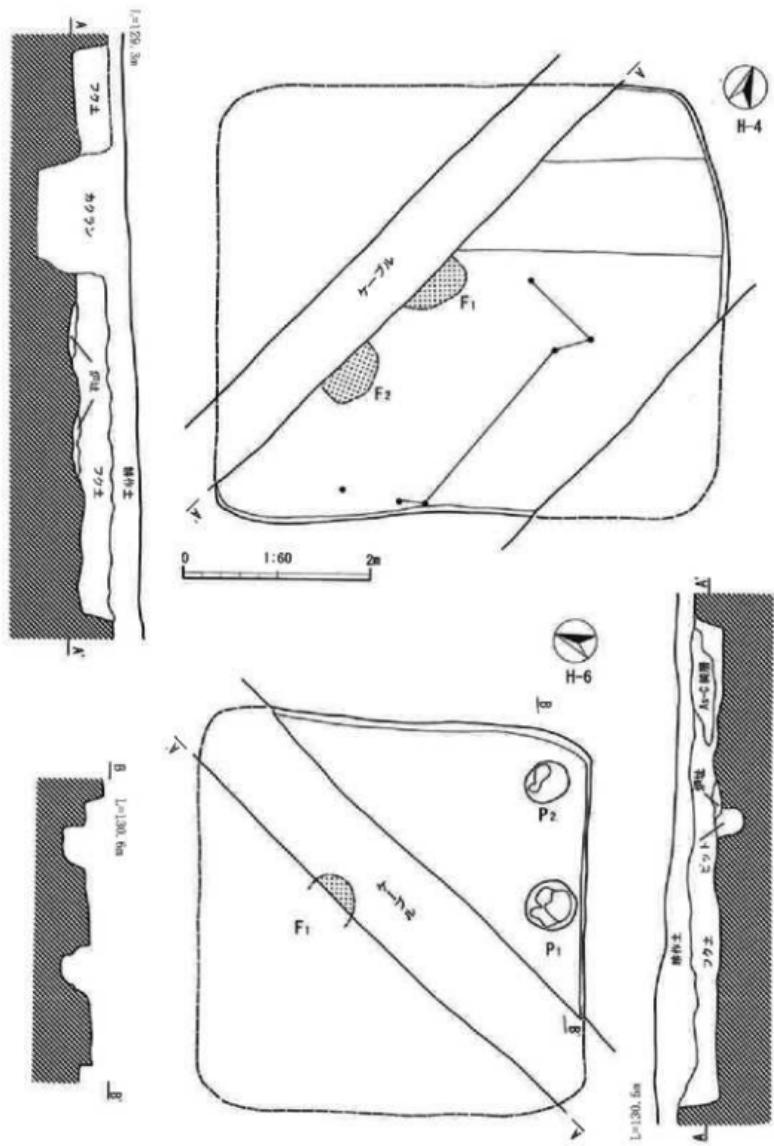


Fig. 20 B-II 4・6号住居址

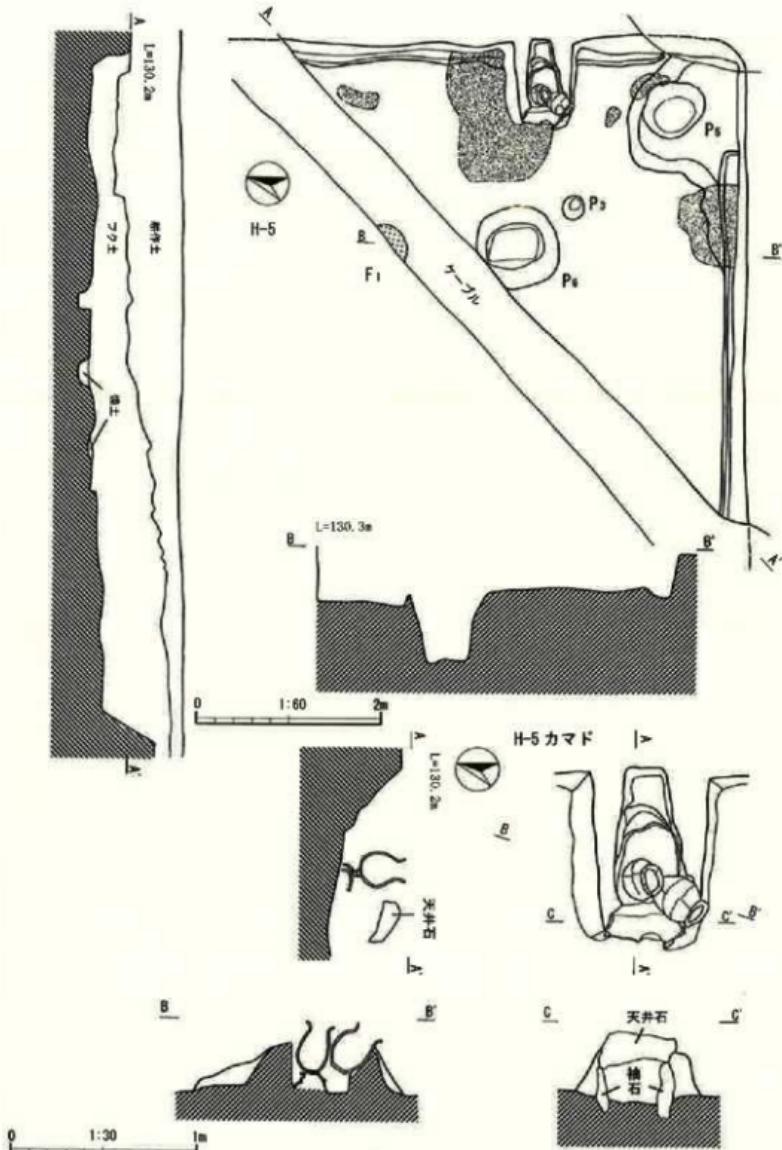


Fig. 21 B区H-5号住居址

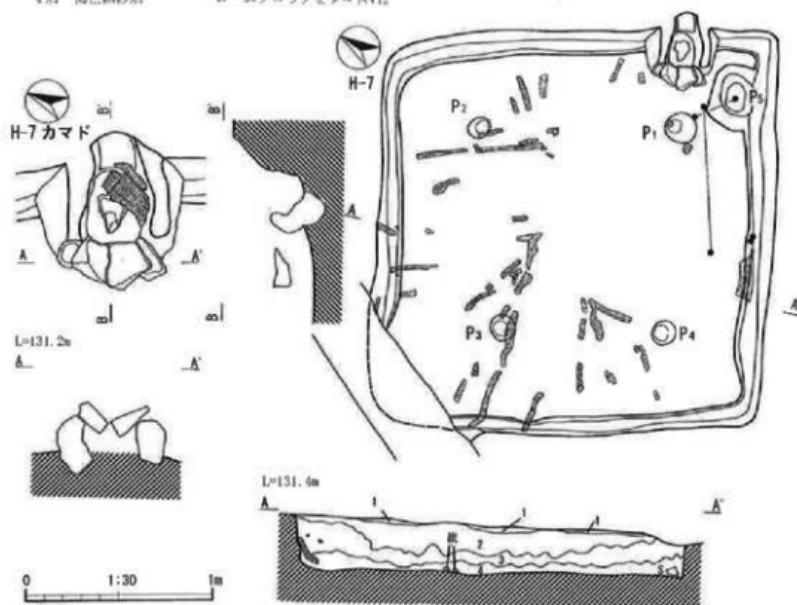
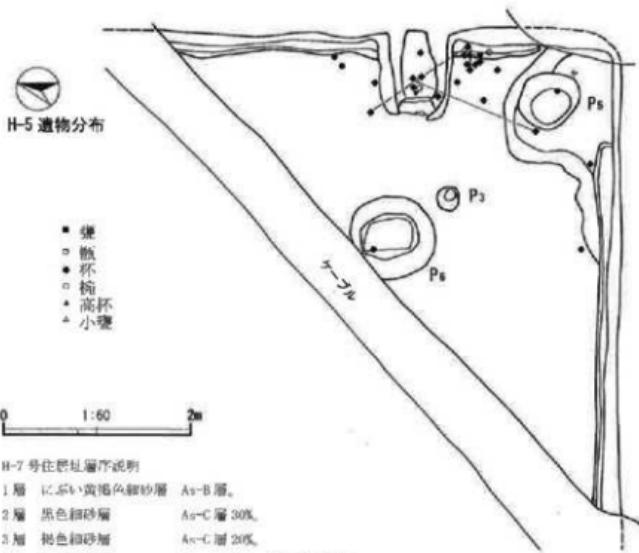


Fig. 22 B区H-5・7号住居址

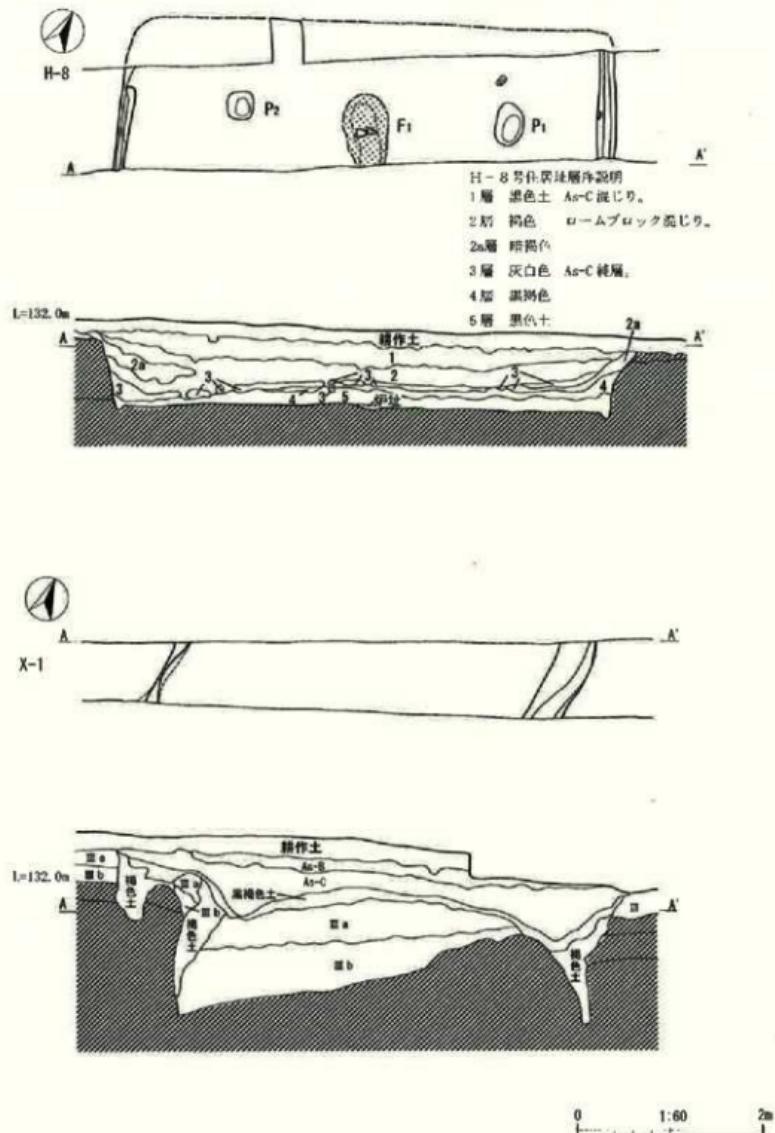


Fig. 23 BIKH-8・X-1号地割れ

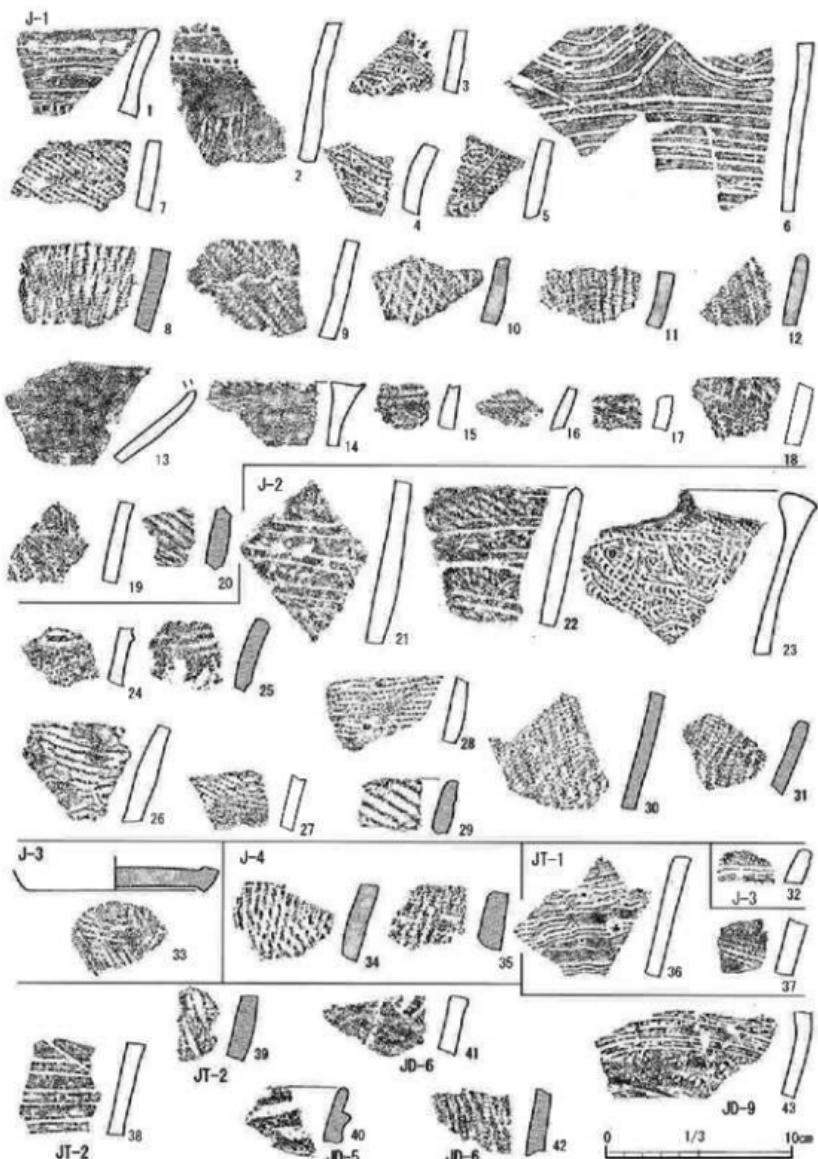


Fig. 24 A区縄文時代の土器 (1)

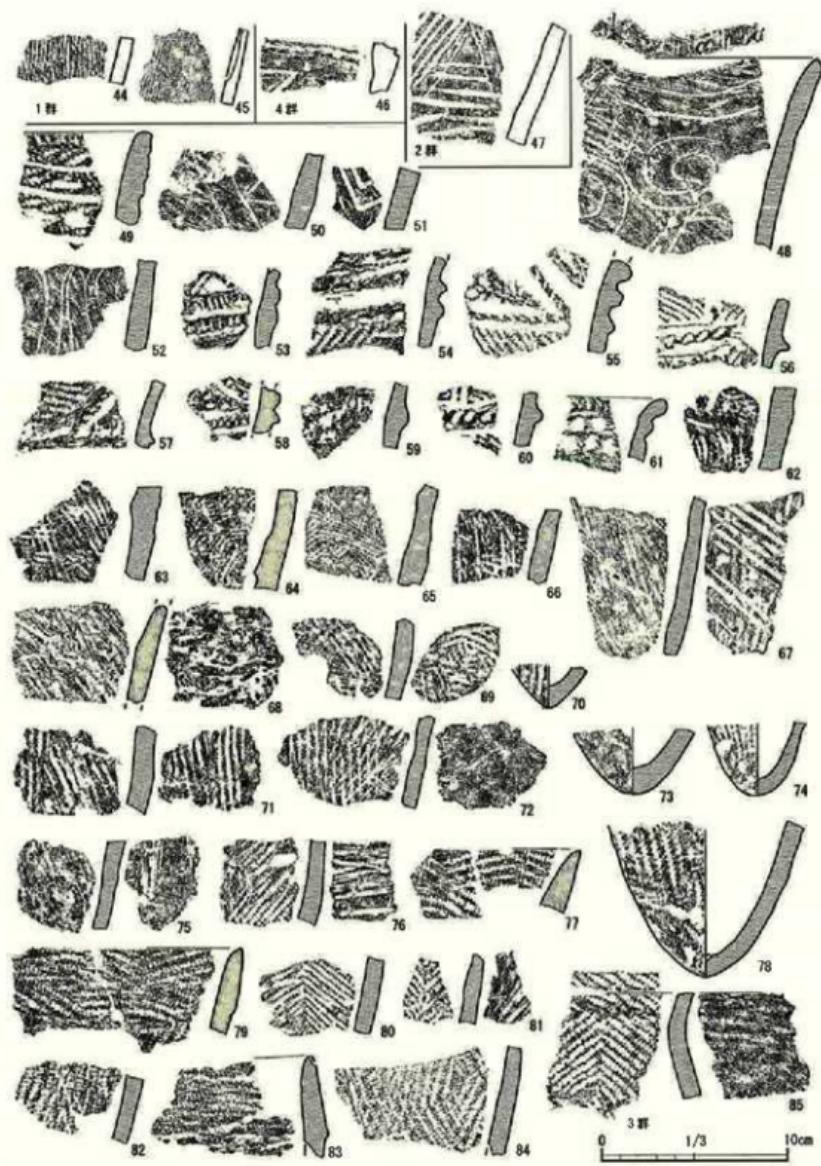


Fig. 25 A区縄文時代の上器 (2)

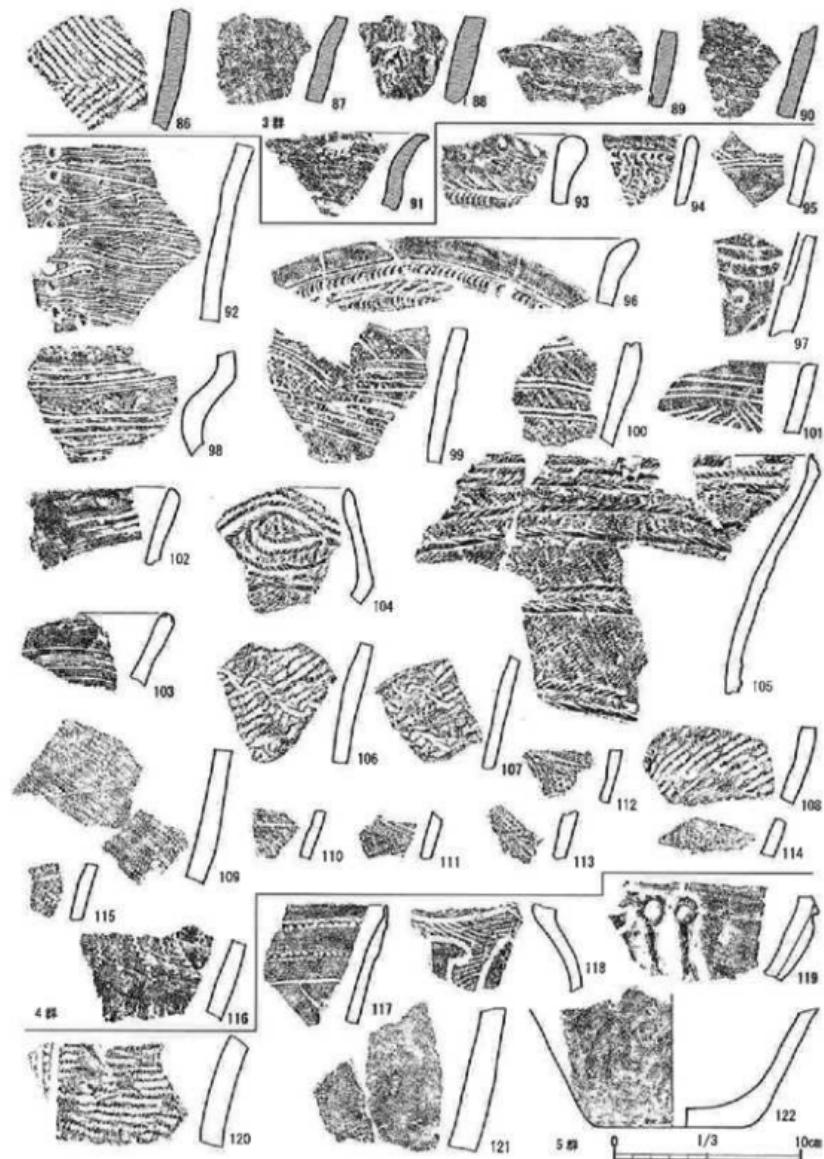


Fig. 26 A区縄文時代の上器 (3)

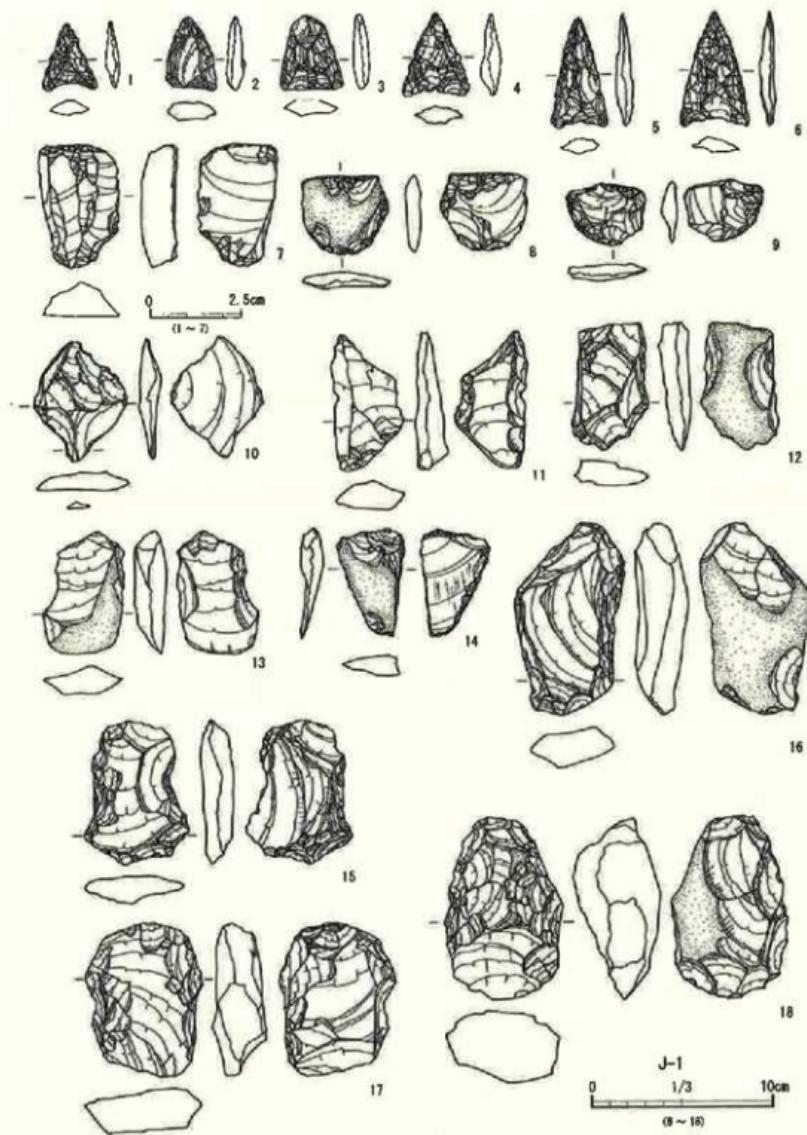


Fig. 27 A区縄文時代の石器 (1)

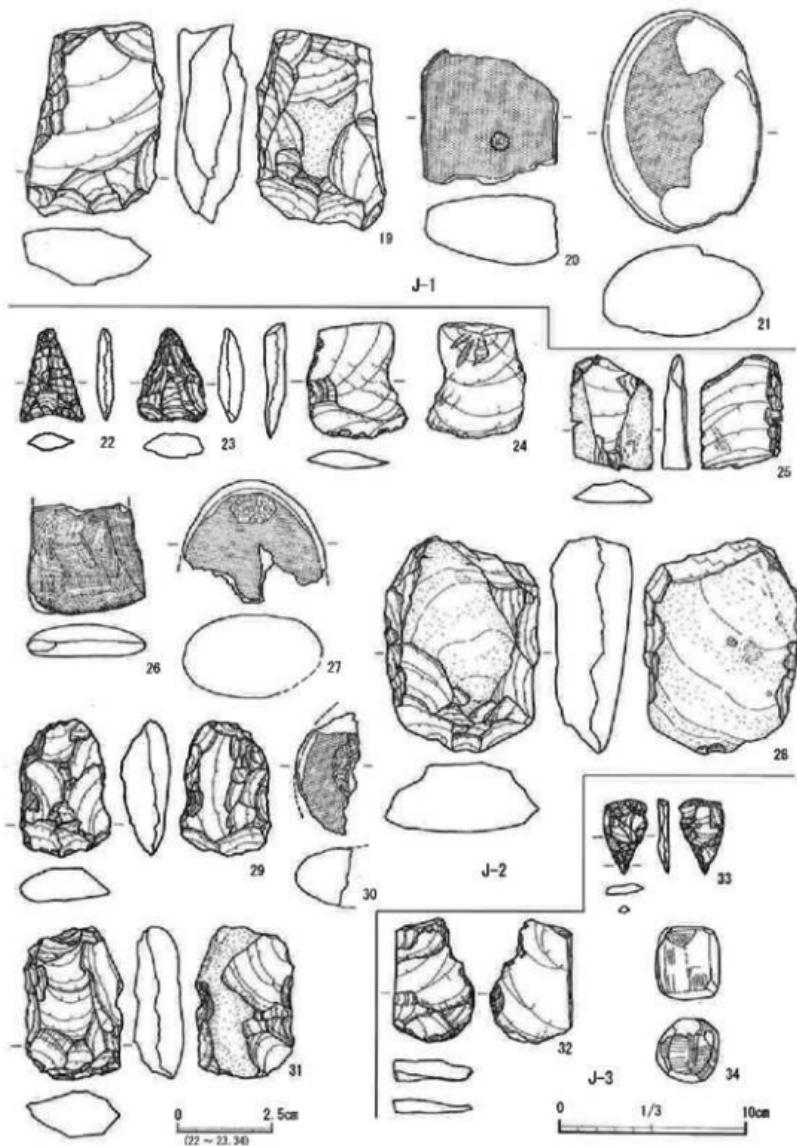


Fig. 28 A区縄文時代の石器 (2)

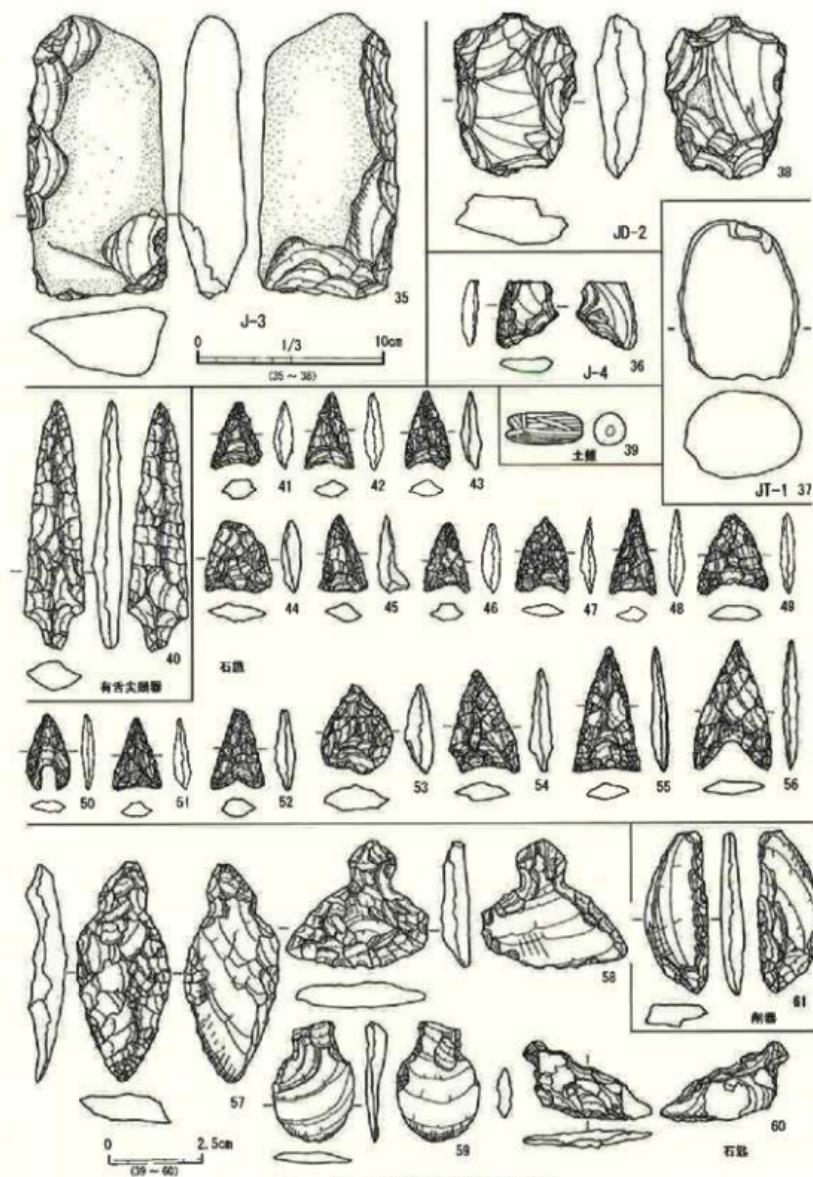


Fig. 29 A区绳文時代の石器 (3)

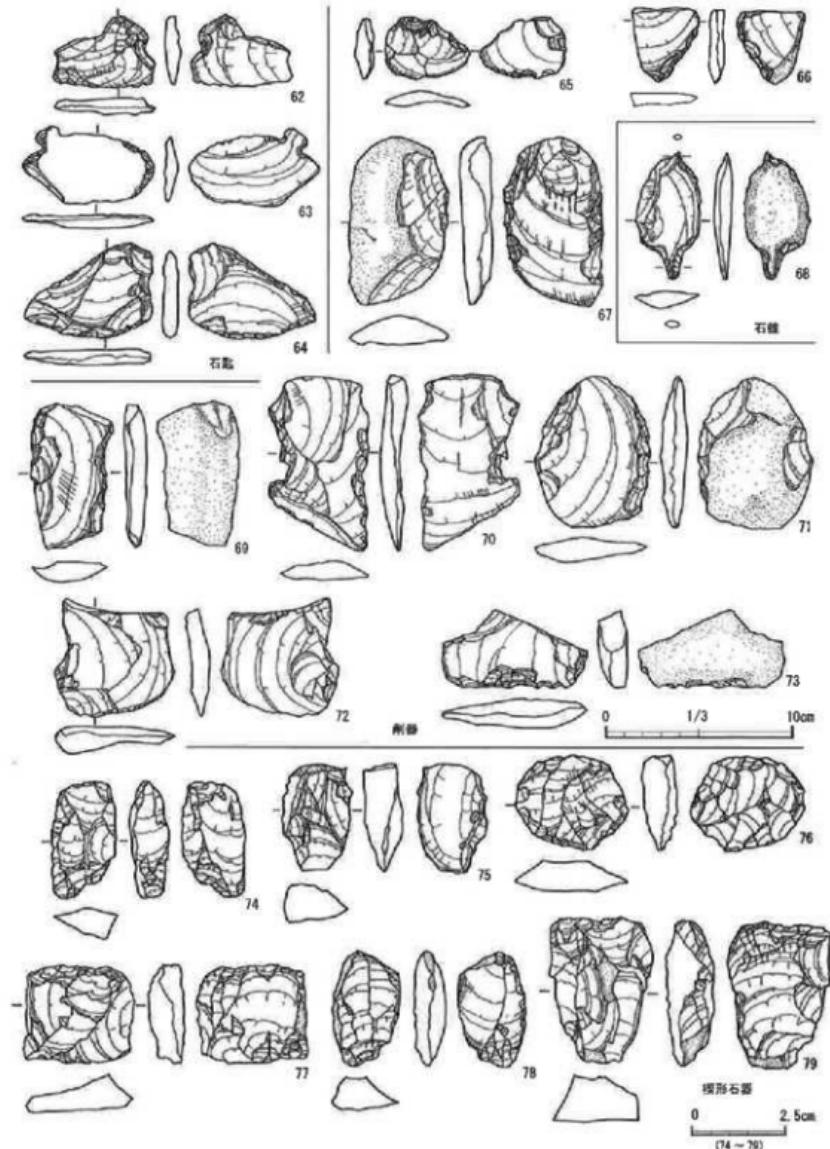


Fig. 30 A区绳文時代の石器 (4)

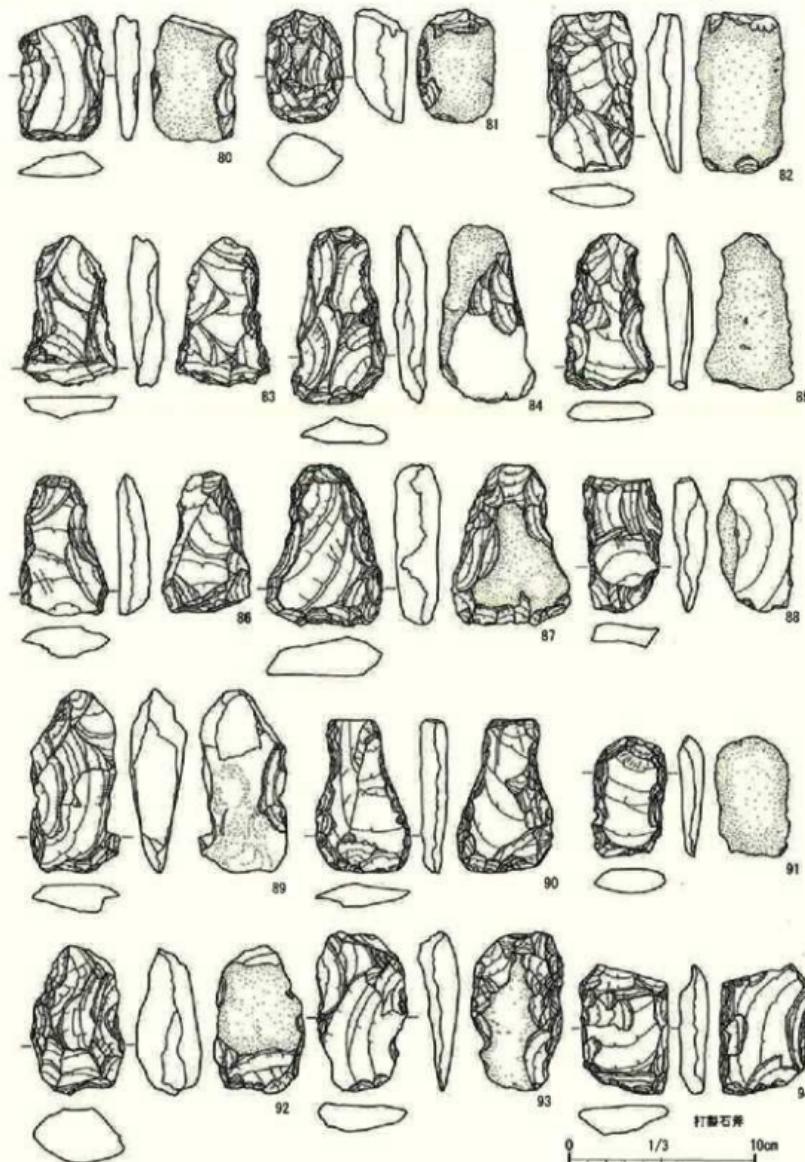


Fig. 31 A区縄文時代の石器 (5)

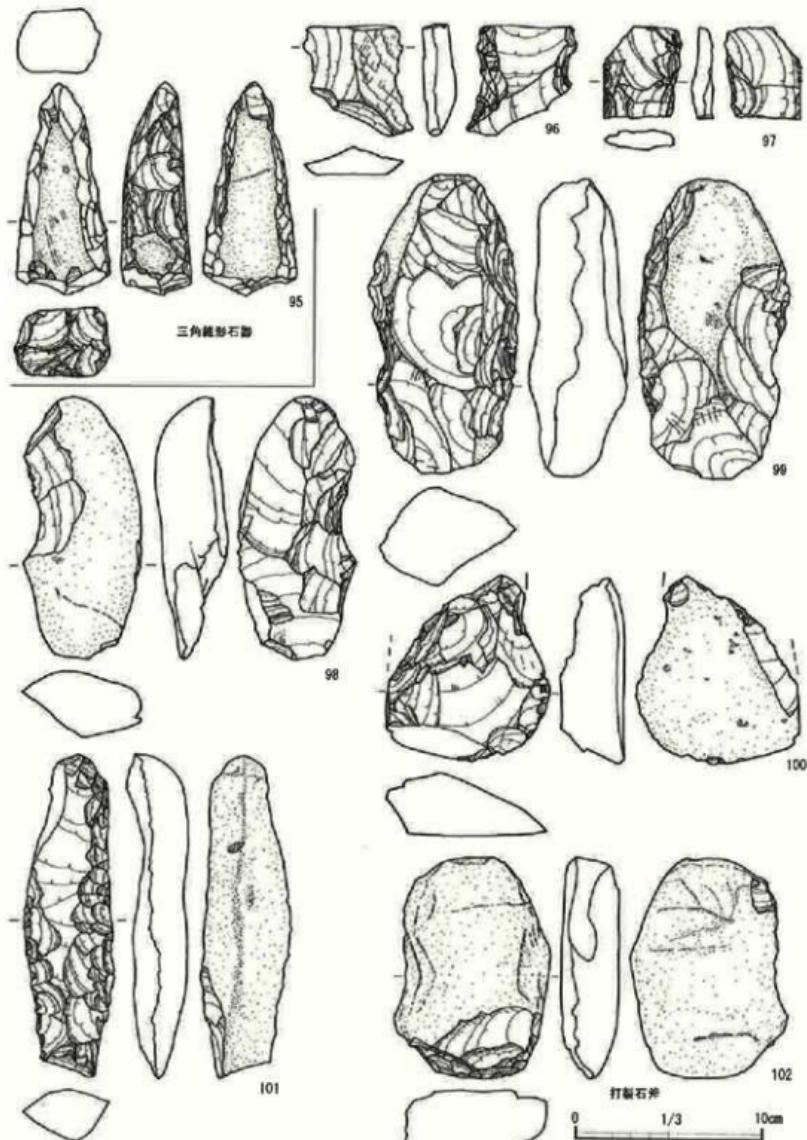


Fig. 32 A区縄文時代の石器 (6)

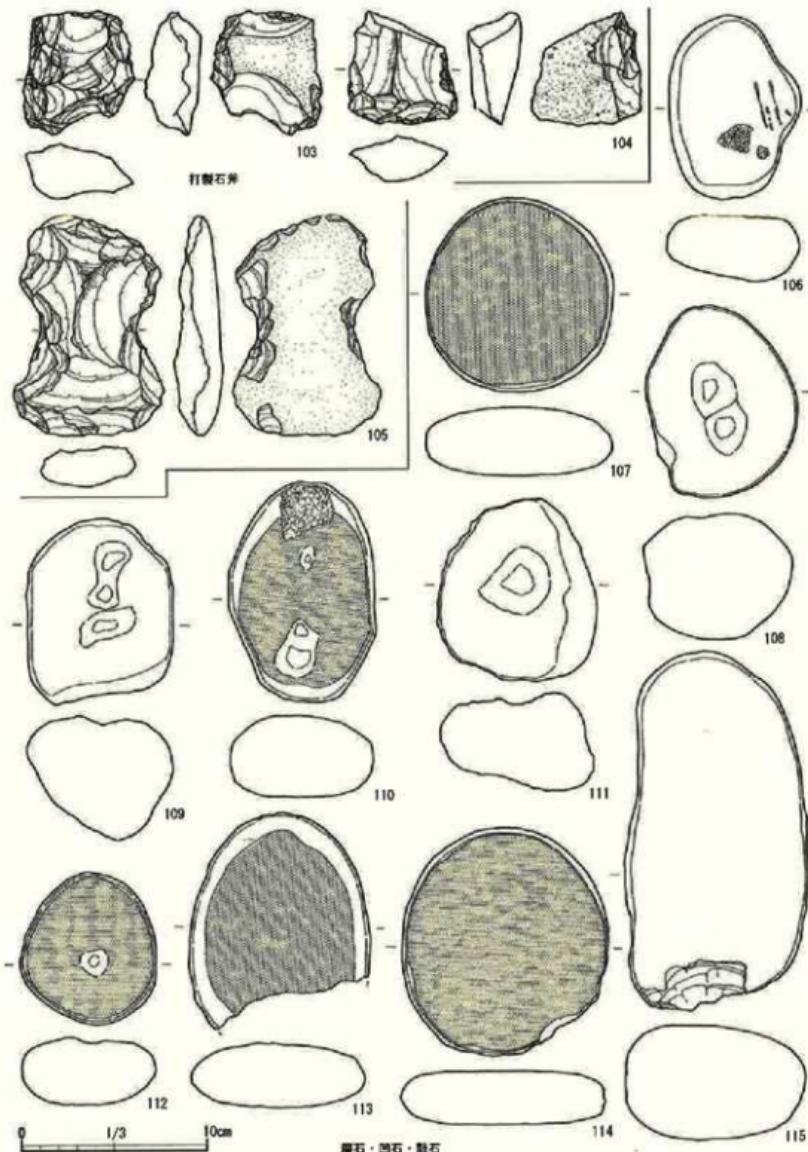


Fig. 33 A区縄文時代の石器 (7)

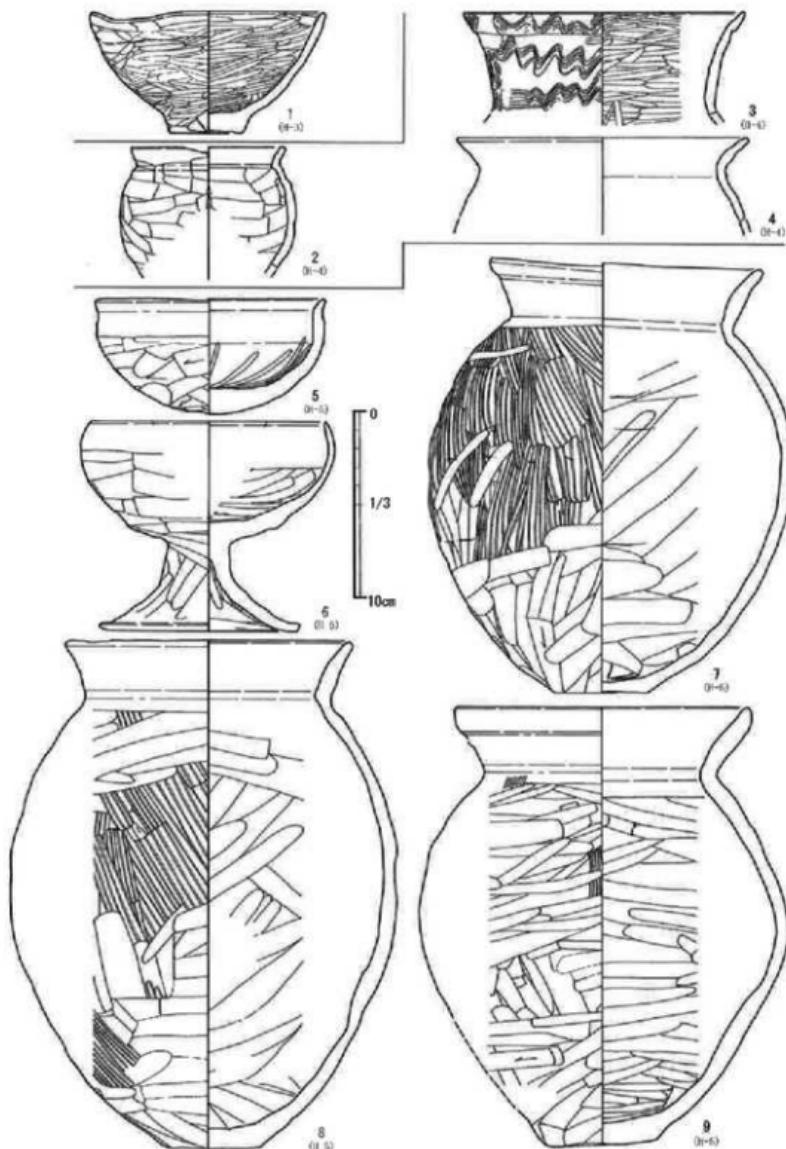
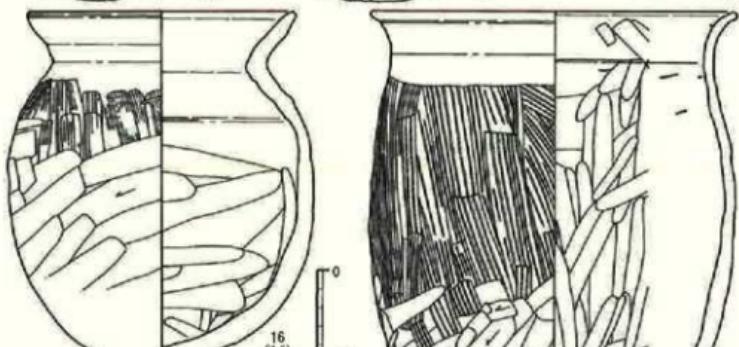
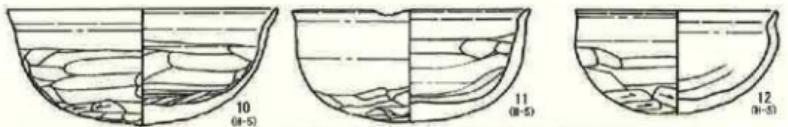


Fig. 34 B区古墳時代の土器（1）



0
1/3
10cm

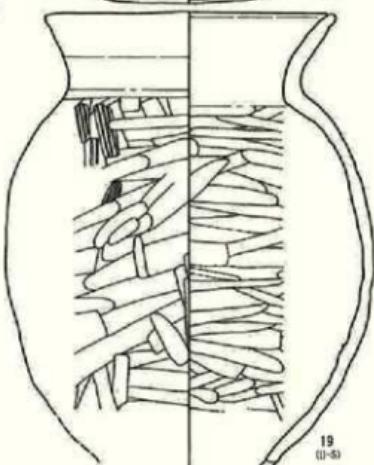
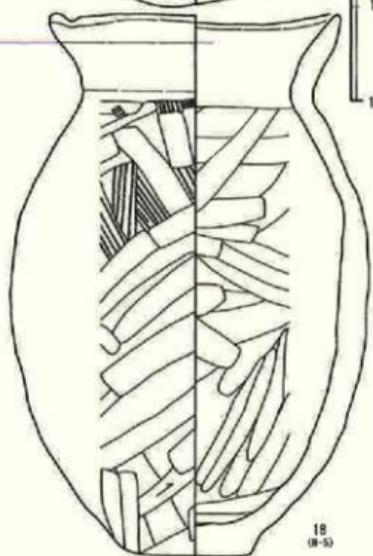
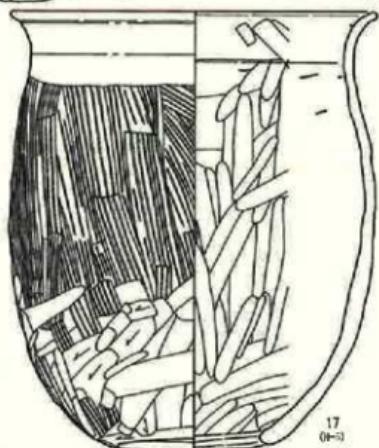


Fig. 35 B区古墳時代の土器 (2)

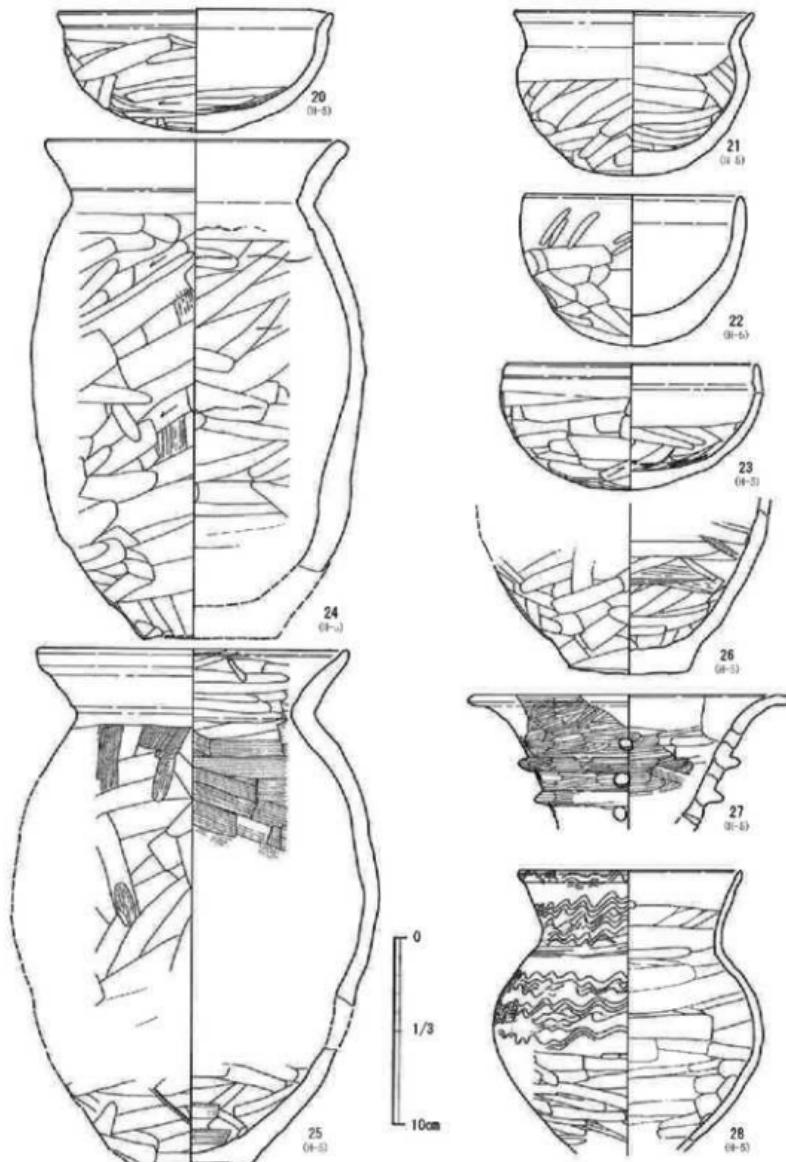


Fig. 36 B区古墳時代の土器 (3)

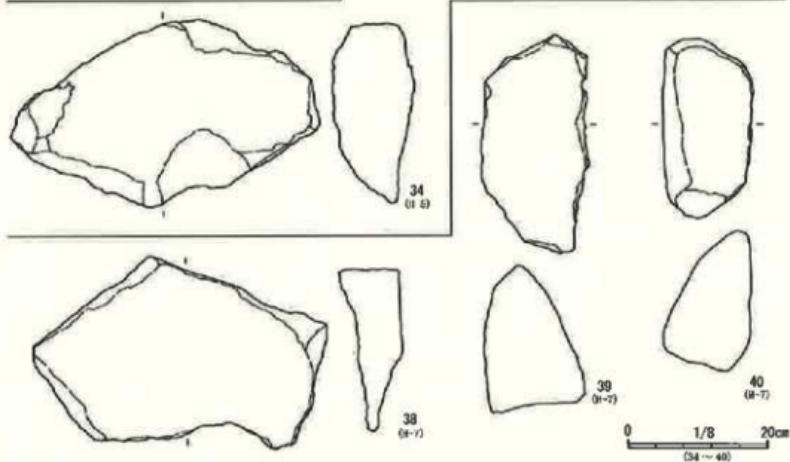
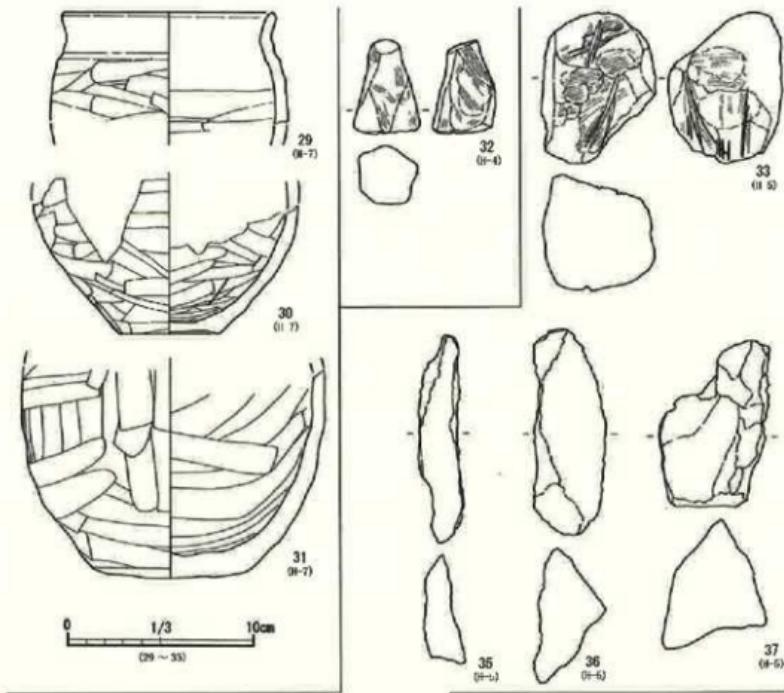
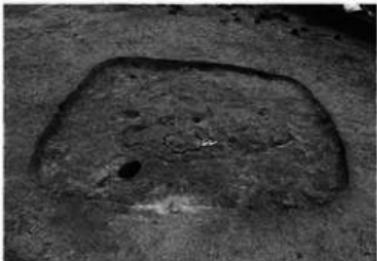


Fig. 37 B区古墳時代の遺物 (4)

写 真 図 版



1. A区縄文時代調査区全景(南面から)



2. A区J - I号住居址全景



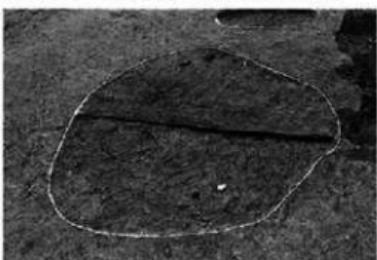
3. A区J - I号住居址の炉



4. A区J - I号住居址のかに使用された甕



5. A区J - 2号住居址全景



6. A区J - 3号住居址全景



7. A区J - 4号住居址後出状況



8. A区J - 4号住居址全景



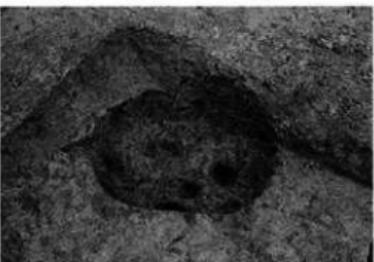
1. A区 JT-1・JD-5号坑(南西から)



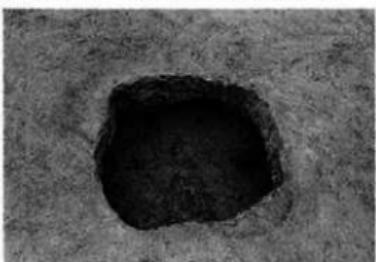
2. A区 JT-2、JD-7・8号坑



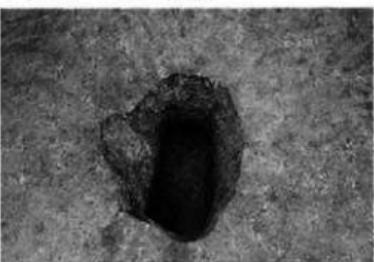
3. A区 JT-2号竖穴状遗構全景(西から)



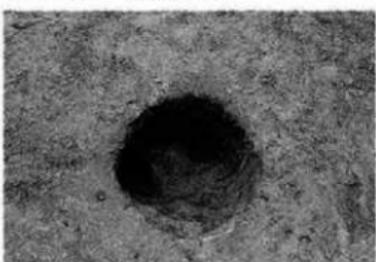
4. A区 JD-1号上坑全景



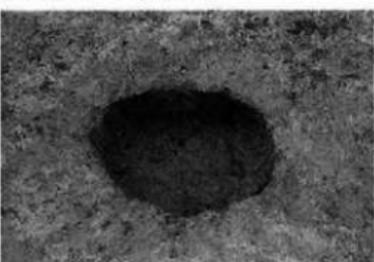
5. A区 JD-2号土坑全景



6. A区 JD-3号土坑全景



7. A区 JD-4号土坑全景



8. A区 JD-5号土坑全景



1. A区「D-8号」十坑全景



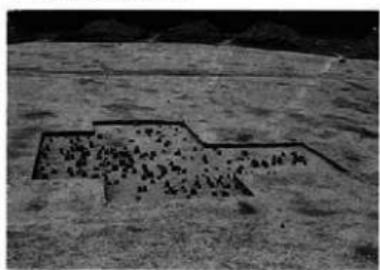
2. A区「D-1号」十坑全景



3. A区縄文時代包含層



4. A区縄文時代包含層



5. A区縄文時代包含層



6. A区縄文時代包含層



7. A区縄文時代包含層調査風景



8. A区縄文時代包含層の遺物出土状況



1. A区縄文時代包含層の遺物出土状態



2. A区縄文時代包含層の遺物出土状態



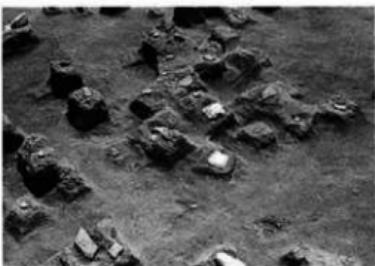
3. A区縄文時代包含層の遺物出土状態



4. A区縄文時代包含層の遺物出土状態



5. A区縄文時代包含層の遺物出土状態



6. A区縄文時代包含層の遺物出土状態



7. A区縄文時代包含層の遺物出土状態



8. A区縄文時代包含層・打製石斧の出土状態



1. B区と後子古墳、公園工事の区域



2. B区H-1号住居址全景



3. B区H-2号住居址全景



4. B区H-3号住居址全景



5. B区H-4号住居址全景



1. B区H-5号住居址全景



2. B区H-5号住居址の土器出土状態



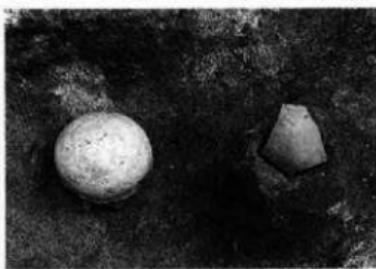
3. B区H-5号住居址の土器



4. B区H-5号住居址の土器



5. B区H-5号住居址の土器



6. B区H-5号住居址の土器



7. B区H-5号住居址の土器



8. B区H-5号住居址の土器



1. B区H-5号住居址竈にかけられた上器



2. B区II-5号住居址竈にかけられた上器



3. B区H-5号住居址竈と支柱



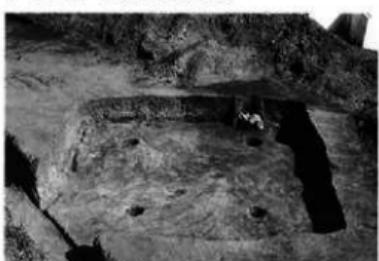
4. B区II-5号住居址竈と支柱



5. B区H-5号住居址竈全景



6. B区II-6号住居址全景



7. B区H-7号住居址全景



8. B区H-7号住居址炭化材の出土状態



1. B区H-7号住居址遺全景



2. B区H-8号住居址と浅間C輕石堆積状態



3. B区H-8号住居址全景



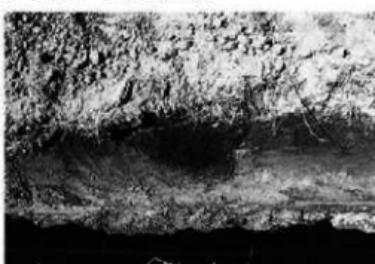
4. B区H-8号住居址の炉址



5. B区X-1号地割れ全景



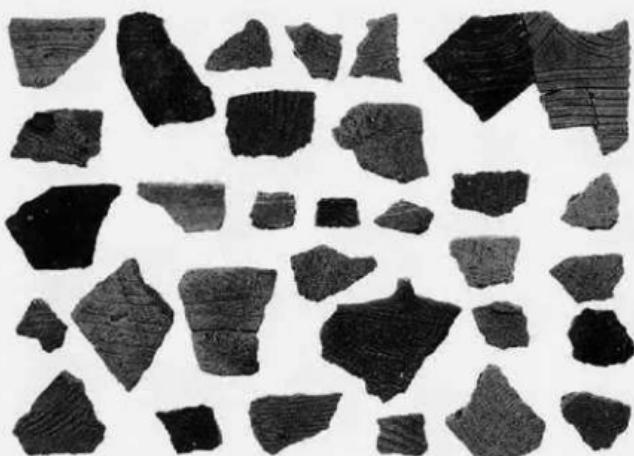
6. B区X-1号地割れの人きさ



7. B区の土層断面の土坑(東から)



8. 調査を終えて



1. A区J-1~4号住居址の土器



2. A区J T 1・2、JD-5・6・9と縄文包含層の土器（早期～前期）



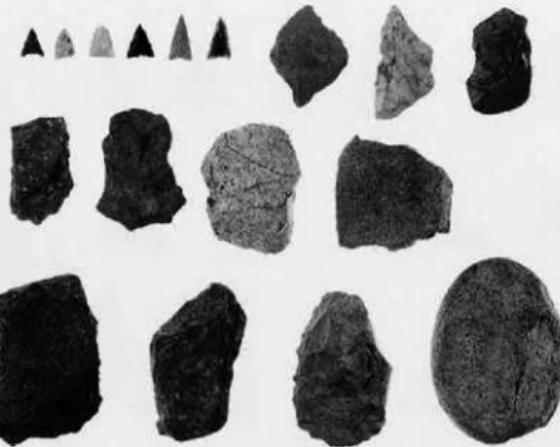
1. A区縄文包含層の土器（前期）



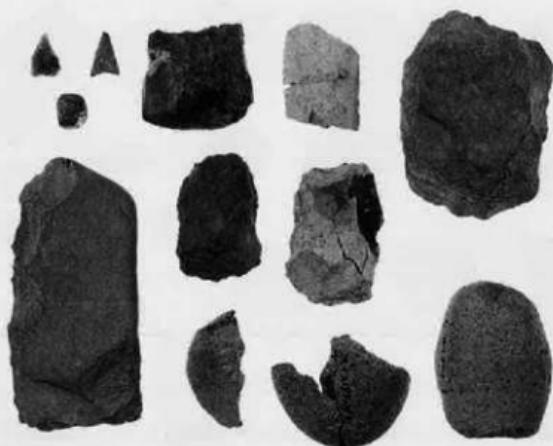
2. A区縄文包含層の上器（前期）



1. A区縄文包含層の土器（前期～後期）



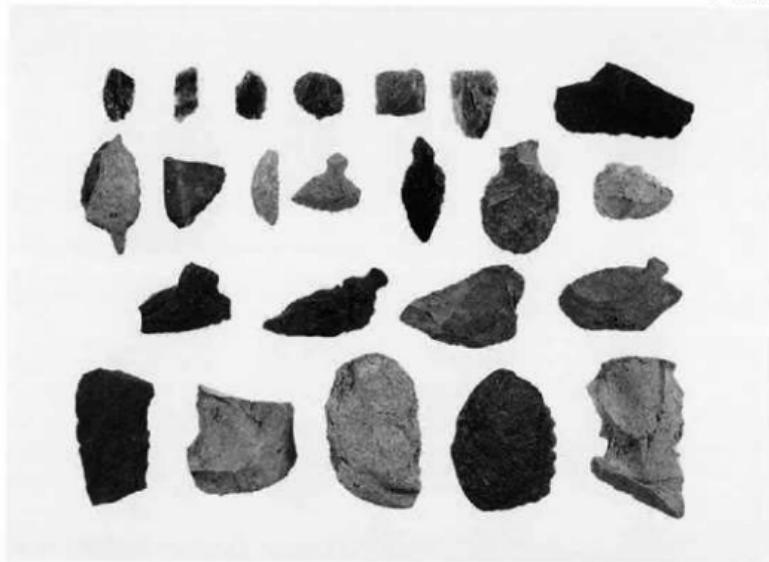
2. A区J-1 芬仕居址の石器



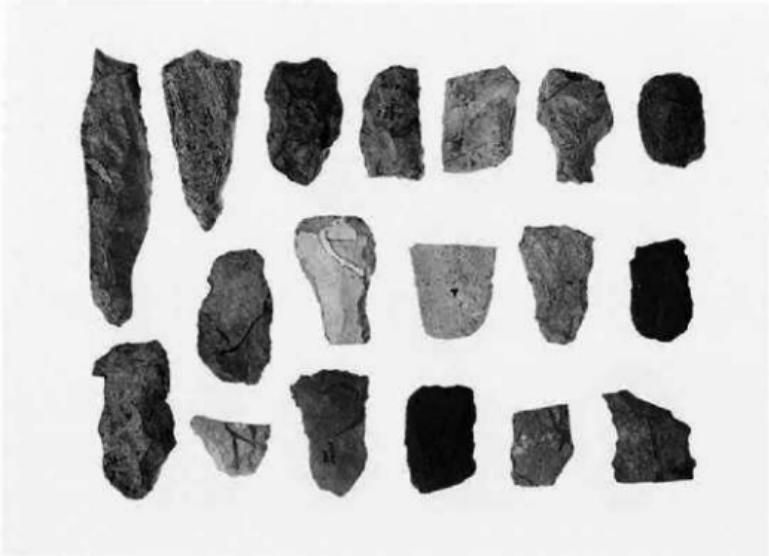
1. A区J-2~4、J T-2、J D-2の石器



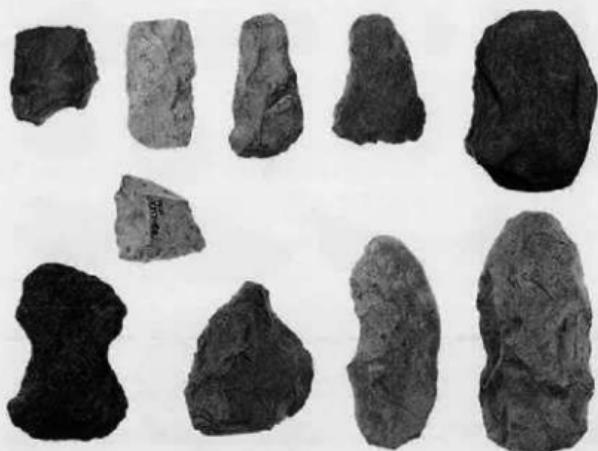
2. A区縄文包含層の石器（有舌尖頭器・石鏃）



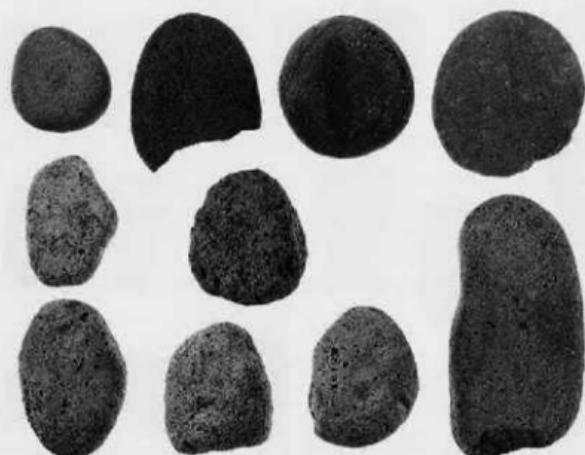
1. A区縄文包含層の石器(楔形石器・石錐・石芯・削器)



2. A区縄文包含層の石器 (打製石斧)



1. A区施文包含層の石器（打製石斧）



2. A区圓文包含層の石器（磨石、凹石、蔽石）



B区古墳時代の土器 (1)



B区古墳時代の土器（2）



上空から見たB区全景（上方が後二子古墳の社）

調査要項

遺跡名 称	内堀遺跡群内堀遺跡（うちぼりいせき）						
遺跡記 号	7K11						
遺跡所在地	群馬県前橋市西大室町2539番地ほか						
調査期間	発掘調査 1995（平成7）年4月25日～1995（平成7）年10月31日						
調査面 積	3,400m ²						
開免面 積	369,000m ²						
調査原 因	公園造成						
調査主体者	前橋市教育委員会 教育長 岡本信正						
調査担当者	前原 豊 新井真典						
調査参加者	石井春江	伊藤孝子	岡野幾代	神沢方子	木村源次郎	木村はる	
	久保もり子	佐藤仕子	高橋やすの	高畑八栄子	竹内るり子	角田正次郎	
	高岡和子	内藤貴美子	内藤 孝	萩原和子	牧野せつよ	峰岸あや子	
	吉田真理子	小保方義五郎					
調査協 力	上野克巳	加部二生	小島紳	細野高伯	山下歳信		
	群馬県教育委員会文化財保護課	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団					
	柏川村教育委員会・公園緑地部公園課	・たつみ写真スタジオ					
	丹生サーヴェイ・井上測量(株)	・イズミトレス					
事務局	課長 本山 卓	文化財専門員 同久津宗二					
	埋蔵文化財係 係長 駒倉秀	・主査 關部守央	主任 井野誠一				
		前原 豊	斎藤仁志	狩野吉弘	戸所慎策	新井真典	
		坂口好孝	主事 大山知久	吉田聰二	佐藤則和		
	文化財保護係 係長 宮下 寛	主査 井野修二	江原 清	庄澤保之			
		主任 真塙欣一	主事 林 信也				

内堀遺跡群 VIII

印 刷 1996（平成8）年3月25日

発 行 1996（平成8）年3月31日

編集発行 前橋市教育委員会
群馬県前橋市上泉町664-4
TEL 0272-31-9531

